

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Twelve Heroes, or Hero Twelve in the Janggar Epic : Reinterpretation of a Numeral in a Mongolian Epic

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 真湖 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004037

英雄叙事詩『ジャンガル』における“12勇者”

—モンゴル英雄叙事詩の数詞解釈—

藤 井 麻 湖*

Twelve Heroes, or Hero Twelve in the Jangyar Epic:
Reinterpretation of a Numeral in a Mongolian Epic

Mako Fujii

『ジャンガル』は、『元朝秘史』や『ゲセル』と並ぶモンゴル三大文芸作品のひとつに数えられているモンゴル英雄叙事詩であり、主として口頭で受け継がれてきた。その伝承地域は、新疆（中国）、カルムイク（ロシア）、モンゴル国である。ジャンガルは、この物語の舞台となるアル=ボムビーン=オロンの盟主であり、彼には“12勇者”の側近がいると語られている。“12勇者”の「12」という数詞は一般に「12人」という人数を表す数詞とみなされているが、実際には12人に満たないことが多く、それ以外にも疑わしい点が多々観察される。本論では、信頼できる資料をもとに“12勇者”の表現をすべて検討し、この“12勇者”が指示する勇者を特定することを目的とする。考察の結果、「12」は数詞ではなく、固有名詞として用いられている場合が認められる。そして、固有名詞として用いられる場合、次のような3つの意味を表しているものと考えられる。

- 1) 12人で構成されていてもよいが、基本的に人数とは関係のない「12」と呼ばれる集団
- 2) 「アルタン・チェージという勇者を念頭に置いた集団」とそうでない集団のいずれかの集団
- 3) アルタン・チェージという個人の勇者

以上の考察をふまえてカルムイクジャンガルの学術的に最も信頼できるテキストを眺めると、ここにおいては“12勇者”ではなく、むしろ“6千12勇者”という表現が主流であることが観察される。そして、この事実から再び新疆ジャンガルの“12勇者”表現の現われている箇所を振り返ると、“6千12勇者”

* 国立民族学博物館外来研究員

Key Words : Jangyar, “twelve heroes”, “Hero Twelve”, “arban qoyar”, Kalmyk Jangyar, Xinjiang Jangyar, numeral, proper noun, altan čeeji, qongyur

キーワード : ジャンガル“12勇者”, カルムイクジャンガル, 新疆ジャンガル, 数詞, 固有名詞, アルタン・チェージ, ホンゴル

に対応する“8千12勇者”という表現が存在していたことが確認される。ただし、新疆ジャンガルのテキストの場合、カラムイクジャンガルの場合とは異なり、“8千勇者”という表現は“12勇者”と対に現われるよりも、単独で現われる頻度が高い。このことは新疆ジャンガルのテキストで“12勇者”が「12人の勇者」として意識されることと相関関係があるものと考えられる。カラムイクジャンガルにおいては2)と3)の用法は確認されないが、新疆ジャンガルの考察を応用すると、“6千12勇者”の「12」にアルタン・チェージの暗示をみることになる。

以上により、“12勇者”の「12」は、一般に理解されているような12人という人数ではない可能性が高い。アルタン・チェージが「12」で表される理由には、「12」と隣接する「11」か「13」との数字との関連が見込まれる。この場合、「11」は、「12」の変形として以外にテキストに現われないので、対象外となる。それゆえ、対象とされる数字は「12」に隣接するもうひとつの数字「13」となる。そこで、新疆ジャンガルにおける「13」が用いられる表現をすべて検討することになる。考察を通して、「13」がある特定の勇者を指示している可能性が高いことが明かにされる。アルタン・チェージが「12」で表された背景には、通常アルタン・チェージよりも地位が低いと考えられている「13」で表される勇者と対比させるためであったと推論される。この場合、アルタン・チェージは勇者の序列を示すと考えられる座席において右側の第1席に位置する最高位の勇者であるが、アルタン・チェージと対比させられる「13」で標識づけられる勇者は左側の第1席、あるいは右側の第2席に座していることが確認される。

モンゴル文化において右側の席は左側の席よりも上位とみなされることを考慮に入れると、「13」で標識づけられる勇者は表向き（明示的に）アルタン・チェージより地位が低いにも関わらず、アルタン・チェージが「12」で標識づけられることにより、明示的に与えられている席次の序列が逆転し、アルタン・チェージは「13」で表される勇者よりも下位に位置づけられるということになる。したがって、「12」や「13」という隠喩が用いられたのは、物語の表層や現実の生活世界における秩序に照らし合わされたときに浮上する反秩序性を隠蔽するためであったと結論しうる。

Epic is a special genre of folklore among the numerous Mongolian-speaking peoples, one that plays an important role in investigating their culture, history, and mentality. The *Jangyar* epic, or epic song cycle, about *Jangyar*, the leader of an imaginary state or region called “*Aru-Bumba-yin-Orun*”, is widespread mainly among the western Mongols called Oyirat. It is regarded as a literary work on a par with the Secret History of the Mongols or the Geser epic.

Jangyar is accompanied by “*arban qoyar*”, fighting foreign or alien enemies by his side. “*Arban qoyar*” is generally taken to mean “twelve heroes”, and the number twelve has been widely accepted as the actual number of heroes. But there are few statements about their names in the introduction of the seat-

ing order of the heroes in the many versions of the ǰangyar epic known to us. In fact, often, the names of fewer than twelve heroes are referred to. Usually, not only the number, but also the actual names, as well as the seating order of the heroes differ from one version to another.

In this respect, the 17-chapter-ǰangyar text transcribed by Taya from the words of Arinpil, a famous ǰangyar epic performer in today's Xinjiang, attracts our attention, for it contains precisely the twelve names of the twelve heroes in the first chapter. The 17-chapter-ǰangyar text is the most reliable of the Xinjiang ǰangyar texts at the moment, so this fact is significant. However, careful observation shows that one name is repeated. In actual fact, only eleven heroes are presented.

In this paper, I would like to examine what exactly “arban qoyar” indicates. For this purpose, all the passages in the 17-chapter-ǰangyar text that contain “arban qoyar” are scrutinized. This is followed by a detailed examination of the ways in which “arban qoyar” is used in various contexts. It is concluded that the number “twelve” in “arban qoyar” can be taken both as a numeral and as a proper noun. Scholars usually recognize “twelve” as a numeral, but they have not yet examined it as a noun.

The usage of “twelve” as a proper noun has three meanings as follows:

1. a group called “the twelve heroes” consisting of twelve warriors or less. The actual number is fundamentally irrelevant,
2. a group called “the twelve heroes” who may or may not be under the command of Altan čeeji,
3. a hero called “Hero Twelve”, referring to Altan čeeji (one of ǰangyar's heroes).

If we extend this examination to the Kalmyk ǰangyar or the 25-chapter-ǰangyar text, the most reliable of the Kalmyk ǰangyar texts, it is observed that the expression “six thousand and twelve heroes” is used more frequently than “arban qoyar”. This fact makes us aware that not only “arban qoyar” but also “eight thousand and twelve heroes” appears in the 17-chapter-ǰangyar text. It is true that expressions of “eight thousand heroes” are used in the 17-chapter-ǰangyar text separately from “arban qoyar” for the most part, but this phenomenon shows the fact that the “arban qoyar” is treated as a numeral by the performer of the 17-chapter-ǰangyar text.

From the Kalmyk ǰangyar or the 25-chapter-ǰangyar text, however, we cannot derive the second and the third meanings of “arban qoyar” mentioned above. Nonetheless, it is possible to read a hint of Altan čeeji in the expression of “arban qoyar” if we follow the analysis of the 17-chapter-ǰangyar text advanced in this paper.

We can understand why Altan čeeji is used metaphorically, especially if compared with the number “thirteen”. An examination of the usage of “thirteen” in the 17-chapter-ǰangyar text suggests that this number “thirteen” is used as a metaphor for Qongyur or Güzeen-gümbe, the main warriors in the

Ĵangyar epic. On the one hand, Altan čeeĵi seats himself in the first or the most estimable seat on the right-hand side of Ĵangyar at all times, and on the other hand, warriors labeled “thirteen” are seated either in the first seat on the left-hand side of Ĵangyar or in the second seat on the right-hand side.

In Mongolian culture, the right-hand side is usually more respected than the left. Therefore, according to this tradition, it seems that Altan čeeĵi is superior to Qongyur. But the arrangement of two numbers in order of decreasing size allotted to the two warriors indicates that Altan čeeĵi is inferior to Qongyur. Such metaphorical uses are designed to conceal from listeners the reversed order of daily routine or accepted order in the explicit narrative of the Ĵangyar epic.

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 『ジャンガル』について | 8.3 エーリヤン・オヴラン以外のカルムイクジャンガルにおける勇者表現 |
| 2 『ジャンガル』のテキスト | 8.4 小括 |
| 2.1 ロシアにおける『ジャンガル』の出版 | 9 カルムイクジャンガルと新疆ジャンガルの考察からみた“12勇者” |
| 2.2 中国における『ジャンガル』の出版 | 9.1 カルムイクジャンガルの考察の新疆ジャンガルへの適用 |
| 3 本論の目的 | 9.2 新疆ジャンガルの考察のカルムイクジャンガルへの適用 |
| 4 勇者の席次からみた12勇者 | 10 隠喩としての“12勇者” |
| 5 具体的な表現からみた12勇者 | 11 「12」が選択された理由 |
| 6 新疆ジャンガル（アリンピルの17章本）における12勇者の表現 | 11.1 「12」と対比すべき数字 |
| 7 新疆ジャンガルにおける“12勇者”の用法 | 11.2 アリンピルの17章本における「13」に関連する表現 |
| 7.1 具体的に表現されている“12勇者” | 11.3 「13」が指示する勇者 |
| 7.2 章ごとにみた“12勇者” | 12 17章本における“12勇者”以外の「12」関連の表現 |
| 7.3 数詞とは異なる“12勇者”の「12」 | 13 「12」と「13」の隠喩の配置が示す隠喩 |
| 7.4 abaya(オジ)を用いる“12勇者” | 14 フォーミュラ・モデルと心性史—結びにかえて |
| 7.5 小括 | |
| 8 カルムイクジャンガルにおける“12勇者”の表現 | |
| 8.1 エーリヤン・オヴランの10章における“12勇者” | |
| 8.2 アルタン・チェージとの関連でみた“12勇者” | |

1 『ジャンガル』について

英雄叙事詩『ジャンガル』は『元朝秘史』や『ゲセル』と並び称されるモンゴル三大文芸作品のひとつであり、モンゴル民族のなかでも狭義の東モンゴルと対比されるところのオイラトと呼ばれる西モンゴル諸集団を中心に今日まで主に口頭によって伝承されてきた。周知のように、『元朝秘史』はチンギス・ハーンが台頭する以前の神話的伝承を含むチンギス・ハーンおよびその後継者オゴタイ・ハーンまでの治世を描いた作品である。『元朝秘史』がその後に生まれた年代記に多大な影響を与えたことはよく知られているが、現在に至るまで漢字音訳でしか残されていない。この点からいえば、『ゲセル』や『ジャンガル』は、モンゴル人の居住するほぼ全域に写本や口頭で伝承されてきた巨大叙事詩群である。もっとも、『ゲセル』はモンゴル人のなかにも独自に伝承されているものの、チベット人のなかにも『ケサル』という名前の英雄叙事詩があり、モンゴルに伝承される『ゲセル』はチベットの『ケサル』との関連を常に問わざるをえないことに対比させると、『ジャンガル』は紛れもなくモンゴル人のなかで生まれ、今日まで主に口頭で伝承されてきた、モンゴル人の生きた記念碑的作品といえることができる。

『ジャンガル』は、敵に屈しないモンゴル人の雄々しい民族的自立の精神を称揚している文学であるというのが通説的見方であり、様々な敵との対戦を繰り返すジャンガルを盟主とする勇者たちの武勲をその主な内容としている。戦いは敵の家畜や民といった財産の押収でもって終わることが多い。ジャンガルの故地はアル=ボムビーン=オロン *aru bumba-yin orun* と呼ばれる架空の国もしくは地方であるが、これを国と地方のどちらに訳すかについては議論の余地がある。登場する敵にしても、異国の敵であるのか異族の敵であるのか、同族の他集団の敵であるのかといった点について、明示されているとはいえない。

それゆえ、主要テーマについて「民族的自立の精神」でもってのみ説明するのはやや一面的な見方ということになる。『ジャンガル』が「民族的自立の精神」という観点からしばしば要約される背景には、『ジャンガル』の主要な伝承地域が独立国であるモンゴル国ではなく、モンゴル人が少数派として存在しているロシアや中国であること、そして当該英雄叙事詩の研究者にこうした地域出身のモンゴル人が多いということが関係しているのかもしれない。ただしこの問題は、現在の国家や民族的状況から帰結されるべきではない。なぜなら、この問題は『ジャンガル』の形成あるいは成

立の時期と密接に関わっていると考えられるからであり、しかも当該英雄叙事詩がいつ頃形成あるいは成立したかという時期については、西モンゴルのオイラト系モンゴル人の歴史的活動期と関連づける15世紀説、17世紀説、18世紀説といった説が比較的有力といえるものの、今だ定説は現われていない状況だからである。

『ジャンガル』の主な伝承地域としては、ロシアのカムイク共和国（カスピ海西北地域）におけるモンゴル人居住地¹⁾、中国新疆ウイグル自治区のモンゴル人居住地、そしてモンゴル人を主要民族とするモンゴル国が挙げられる。『ジャンガル』がオイラト（西モンゴル）で創作されたことはほぼ定説となっているが、モンゴル国における伝承の分布で興味深いことは、この伝承がオイラト系モンゴル人の集中居住している西部だけでなく、中・東部のハルハ集団のなかにもみられることである。また、トヴァヤブリヤートにもわずかにその伝承が確認されている（Загдсүрэн 1968: 1978）。重要なことは、1編しか収録されていないトヴァ・ヴァージョンのように、わずかに採録されている地域にも非常に整った伝承が残されていることである（Загдсүрэн 1978: 200-204）。このことを考慮に入れると、採録の量の多寡と重要性とは別の次元に属する事柄であることに留意しておく必要がある。

伝承の現状をみると、モンゴル国やロシアのカムイクでは、今日すでに民間で『ジャンガル』を専門に語るような伝承者はいなくなっているのに対して、中国の新疆ウイグル自治区のモンゴル人居住区では、伝承者はほぼ亡くなりつつあるとはいえ、まだなお生存している。伝承の本格的記録が3つの地域のなかで最も遅く始められたことから、現在、主な伝承地域といえるのは新疆におけるモンゴル人居住区である。以下、カムイクで伝承されている『ジャンガル』をカムイクジャンガル、新疆で伝承されている『ジャンガル』を新疆ジャンガルと表記することにするが、伝承の内容面からみると、明らかに新疆ジャンガルと密接な関係にあるのはカムイクジャンガルと考えられるので、本論では主に新疆ジャンガルとカムイクジャンガルを取り上げることにしたい。

『ジャンガル』の特徴としては、次の3点を基礎的事項として挙げうる。

まず第1に、個々の物語で活躍する勇者が主に1人であるという点である。すなわち、守勢・攻勢を問わず、敵に立ち向かうさいにはジャンガル陣営が総勢で出陣することではなく、ジャンガルの盟友たちの誰か1人の勇者が出陣し、奮闘のあげく敵を支配下に入れるか、逆にそれに失敗し、敵の手中に落ちる場合には、ジャンガルたちが援護射撃をして敵を屈服させるという展開になっている。こうしたジャンガルの勇者たちのなかで最も抜きん出た武勲を立てているのは、「ホンゴル」という名前の勇者である。

伝承によっては、アル=ボムビーン=オロンの主君ジャングルとホンゴルとの関係を次のように説明している。それによると、幼少の頃、父母を怪物によって殺されて孤児となったジャングルは、ホンゴルの父であるブフ・ムンゲン・シグシルゲに拾われてホンゴルと一緒に育てられる。あるとき、ホンゴルの父はジャングルが将来自分の息子を凌駕するのではないかという危惧をいだき、ジャングルを早期に始末してしまおうと画策する。父のこの思惑に対してホンゴルは身を挺してジャングルを守り、それ以降、ホンゴルはジャングルの義兄弟かつ最も信頼する腹心として活躍するようになったとしている。幼少の頃のエピソードを除外してもなおかつホンゴルの活躍は目覚ましく、それゆえホンゴルの存在なくして英雄叙事詩『ジャングル』を語ることはできないといっても過言ではない。「ホンゴル」は、本論でも議論が進むうちに重要な勇者として立ち現われてくる。ホンゴルの登場する物語を別にして、『ジャングル』にはジャングルが強く関与する物語とそうでないものがあり、後者の場合にはジャングルの影が全くみられないような物語さえある²⁾。

第2の点は、第1の点と関わっており、『ジャングル』の大きな特徴は、この英雄叙事詩を構成している個々の物語間に強い論理的連関がみられないことである。このことは『ジャングル』の厳密な定義を難しくしており、それゆえ『ジャングル』のなかには、当該伝承で登場する主要勇者が『ジャングル』として広く受容されている物語に頻出している勇者と同名であるという点だけで『ジャングル』とみなされているようなものもある。つまり、英雄叙事詩『ジャングル』は、現象的にみる限り、確固たるひとつの体系的物語があって、その構成成分として個々の勇者たちの活躍譚があるわけではなく、むしろそうした勇者たちの個々ばらばらな活躍譚があって、それらがジャングルと関連していると見込まれるがゆえに『ジャングル』という名前が付されるようになったと考える方が、伝承の実態をよりの確に表しているといえる。

『ジャングル』の第3の特徴は、この英雄叙事詩が「ジャングルチ」と呼ばれる語り手によって伝承されてきたということである。過去においては、王の専属のジャングルチが存在したと言われているが、こうしたジャングルチが果たして語りの芸のみで生計を立てていたかどうかは不明である。というのも、一般に、モンゴルにおけるほかの英雄叙事詩の語り手はプロフェッショナルではなくアマチュアであって、語りの芸のみで生計を立ててはいなかったからである。いずれにせよ、「ジャングルチ」とは、『ジャングル』のかなり多数の章を語ることのできる人物をそのように呼んでいたということだけは確かである。現在では伝承者がいなくなりつつあるために、ジャングルについての伝承を1編でも語るることができる人であれば、「ジャングルチ」

と呼ぶようになっている。また、演奏時にはトブショールと呼ばれる2弦の弦楽器を用いることがあるが、多くの場合、伴奏楽器なしで節をつけて歌い、その節は地域や部族、あるいは伝承筋などによって異なっていることが観察される。

2 『ジャンガル』のテキスト

2.1 ロシアにおける『ジャンガル』の出版

『ジャンガル』の存在が世に知られるようになったのは、1804年にドイツの旅行家ベルグマンがロシアのカムイクのアストラハン地区において聴いたジャンガルの2編をドイツ語に訳して公刊したことに遡る (Bergmann 1805: 181-214)。1979年以前のカムイクにおける『ジャンガル』の出版事情については、A. ボルマンシノフ氏による「英雄叙事詩『ジャンガル』研究の現状」というビブリオグラフィーに詳しい (Bormanshinov 1979: 273-339)。ロシアにおけるジャンガル研究は、ペテルブルグ大学の講師であったA. A. ボブロウニコフが、次のような由来をもつ2種の手書き本を譲り受けて、1854年に露訳を試みたことに始まる³⁾。そのひとつは、ロシア地理学協会のN. I. ミハイロフが、1852年にバガ・ツォーホル地方において、Šamba Sandžirxaevという、アストラハンにあるカムイク学校の教師でカムイクの口頭伝承の収集家でもあったホシュート部出身のカムイク人の手を借りて記録した2本の手書き本である。もうひとつは、モンゴリストとして著名なO. M. カヴァレフスキーがホシュート地方で得た同じ物語の2種の手書き本である。こちらは、どのようなカムイク人によって記されたものかは不明で、不注意に記録されたものであるとされている。

現地言語表記によるテキストは、上記の2編——通称〈ハル・キナスの章〉および〈シャル・グルグの章〉——を1864年にトド文字で出版したペテルブルク大学教授のK. F. ゴルストンスキーのテキストを嚆矢とする。トド文字は、オイラトの高僧であったザヤ・パンディタが17世紀にウイグル式蒙古文字を改良して創製したアルファベット文字で、オイラト（西モンゴル）人の間で用いられた。現在も新疆ウイグル自治区のオイラト系モンゴル人の間で使用されており、出版物も刊行されている。このテキストは、1892年、1907年、1915年に再版され、1911年にはA. M. ポズドネーフがこの2編に古文書保管所より発見したもう1編の写本——通称〈シャル・マンガスの章〉——を加えて刊行した⁴⁾。どの伝承者から〈シャル・マンガスの章〉を書き留めたのかは不明であるが、前述のŠamba Sandžirxaevによって書き留められた章である

らしい。

部分的な伝承の記録ではなく、『ジャンガル』の全容を示すような規模で記録された最初のテキストは、1910年度のB. L. コトヴィッチによる10編のトド文字テキストである。このテキストのもととなったのは、ペテルブルク大学東洋学部のカルムイク人学生ノムティン・オチルが1908年に郷里アストラハンに帰省したさいに、エーリヤン・オヴランEelän Ovlan (1857-1920) という人物からキリル文字で聞き書きした記録で、当時彼の教官であったB. L. コトヴィッチがトド文字に直して出版したという経緯をもつ。このテキストの出版により、エーリヤン・オヴランはカルムイクにおいて現在までに最も多くの章を語ったジャンガルチとして後世に名を留めることになった。このテキストは1935年にラテン文字でエリスタ市で再版され、1940年にB. バサンゴフによって詩の形式に改められて再版された。1940年度版は、1910年度版のコトヴィッチの10章本とK. F. ゴルストンスキーの2編とA. M. ポズドネーフの1編とを合わせたキリル文字転写版であり、当時において最も充実したテキストとなった⁵⁾。コトヴィッチはこの10章以外に1910年にエーリヤン・オヴランからもうひとつの章を記録していたが、生前には公刊されず、1970年によりやくその記録がポーランド科学アカデミーのクラクフ支部の古文書館に保管されていることが判明し、後述する1978年度の25章本のなかに刊行された (Джангар 1978b: 340-353)。ただしこれは章数には数えられていない⁶⁾。

その後、1940年には約8千行の6話がバサンガ・ムクヴナBas'nyä Mukövünë (1878-1944) から、さらに330行と570行の2話がシャヴァリン・ダヴァンŠavalin Davan (1884-1954) からそれぞれ記録された⁷⁾。また1967年には、バルダラ・ナスンキーンBald'ra Nas'ñkiinから1話記録された。新しく採集された伝承も加えて、1978年にはモスクワでカルムイクジャンガルの集大成ともいえる合計859頁に及ぶ2巻本25章のジャンガル・テキストが公刊された (Джангар 1978a: 1978b)。ここには、14編のバガ・ドルベト集団の伝承 (1864年のゴルストンスキーの2編, バルダラ・ナスンキーンの1編, エーリヤン・オヴランの全章10編 [第11章を加えると11編], そしてそれまでに公刊されたことのなかった3編) と10編のトルグート集団の伝承 (2編はバガ・ツォーホル地方のもの, 6編はハラホス地方のもの, 2編はイキ・ツォーホル地方のもの), そしてドン河流域のロストフの古文書館に保管されていたトド文字写本が掲載された⁸⁾。

1978年度の25章本——以後「カルムイクジャンガル25章本」と記す——は今日まで出版されたカルムイクジャンガルテキストのなかで最も学術的に信頼できるテキス

トといえる。なぜなら、この2巻本ではあらゆる方面での研究を保証するために、方言に配慮した音声転写がなされているからである。コトヴィッチは特別な転写方法を考案することにより、それまで様々な文字で記されてきたテキストにおける表記を統一し、初めてカルムイクジャンガルを同一表記のもとに一望することを可能にさせた(Михайлов 1978: 14)⁹⁾。それゆえ、本論では、カルムイクジャンガルから引用する場合、このカルムイクジャンガル25章本を用いることにしたい。なお、その場合、第1巻の34頁を(Ⅰ/34頁)、第2巻の123頁を(Ⅱ/123頁)というように表記することにする(Джангар 1978a; 1978b)。ただし、本論ではこれをラテン表記に変換しており、その対応は、母音の場合、y: u, y: ü, и: i, ы: ÿ, o: o, ø: ö, ь: ʹ, э: e, е: ě, а: a, ә: äとし、子音の場合、п: p, т: t, к: k, с: s, ш: š, х: q, ц: c, ч: č, б: b, д: d, г: g, h: y, ж: ž, м: m, н: n, н: ñ, в: v, з: z, й: j, р: rとする。

1990年には、このカルムイクジャンガル25章本をもとに、モスクワでエーリヤン・オヴランの11章がキリル文字を用いたカルムイク新文字で出版された(Биткеев·Кидаиш·Покровская·Кудияров·Пюрбеев 1990)。また同年に、エーリヤン・オヴランの第11章以外を省いたカルムイクジャンガル25章本である16章が、エリスタにおいてカルムイク新文字で出版された(Биткеев·Овалов 1990)。なお、前者にはロシア語訳が付されているが、後者には付されていない。

2.2 中国における『ジャンガル』の出版

他方、中国においてジャンガルが知られるようになった契機は、1950年上海で边垣という人物がマンジン(満金)というモンゴル人の語っていたホンゴルの章を漢語訳したことに始まる(边垣 1958: 1-77)¹⁰⁾。中国の場合、興味深いのは、自国における『ジャンガル』の伝承を採録するよりも以前に、カルムイクジャンガルが先に出版されていることである。そこには、上に述べたエーリヤン・オヴランの10章と、それよりも前に記録された名前の不明なジャンガルチの3編を合わせた合計13章が含まれており、ウイグル式蒙古文字で出版された。この13編は奉天(現在の沈陽)において1958年に出版され、これ以降カルムイクジャンガルとは、この13章本を主に意味するようになった。巻頭には、モンゴル人民共和国(現在のモンゴル国)の碩学ダムディンスレン氏の序が寄せられている(Damdingsürüing 1958)。1960年には、新疆でこの13章本がトド文字で再版された¹¹⁾。本論では、以下これを先の「カルムイクジャンガル25章本」に対して、「カルムイクジャンガル13章本」と記すことにする。

新疆における『ジャンガル』の採録作業は文化大革命後に再開され、本格的には内

蒙古大学の口頭伝承研究者であるボヤンヒシグ（宝音和希格）氏が同大学のブルンバヤル氏とともにウルムチに赴き、現地の新疆人民出版社のト・バドマ（托・巴德玛）氏とリンチン氏の2人と協力して、1978年5月末から3ヶ月間、40人以上の伝承者たちから採録をおこなったことに始まる¹²⁾。そのうちの15編が1980年に新疆でトド文字により出版され、これが中国における最初のジャンガル・テキストとなった（宝音和希格・巴德玛 1979）。このトド文字本は、1982年に内蒙古のフフホト市でウイグル式蒙古文字で刊行され、特にこのウイグル式蒙古文字版により、新疆ジャンガルは広く世に知られることになった（Buyankišig・Badma 1982a; 1982b）。以下、この15章本を「新疆ジャンガル15章本」と記すことにする。

約2万行にも及ぶ新疆ジャンガル15章本の序によると、新疆には手書き本と口頭でジャンガルが広く伝承されていたため、調査の目的は、ジャンガルの録音だけでなく、手書き本の収集にもあったという。だが、文化大革命時代に、ほぼ全部の手書き本が焼却されるか地中に埋められるかして失われたということである。地中に埋められた手書き本は長年の風雨に晒されて救うべくもない状況にあり、かろうじてテクス（特克斯）県から竹筆で記された仏教経典様式の《シャル・グルグの章》と《ハル・キナスの章》の2つの写本を入手できたことが記されている。口頭での情報によると、写本は多い場合に約30章、少ない場合には1章のみという形で民間に流布していたということである。その後、仏教経典様式の《シャル・グルグの章》と《ハル・キナスの章》は、1996年に影印本で刊行された（索德那木拉布担・巴图編 1996）。この影印本では、内蒙古社会科学院図書館蔵の《シャル・グルグの章》と、内蒙古語言文学研究所蔵の《ハル・キナスの章》が使用されており、刊行本の序によると、前者は20世紀の50年代に内蒙古の研究者で膨大な資料のコレクターであったメルゲンバートル氏が新疆より持ちかえったものだというのであり、後者については出典の情報が何も記載されていない¹³⁾。

この事実からも充分推測されるように、口頭での伝承にしても、伝承者が長らく語ることがなかったために、『ジャンガル』は次世代に伝承されることなく、完全に生活から消失してしまう寸前の状態にあることも多々みられた。文化大革命によって衰退した口頭伝承の救済を主な目的としていたこともあり、新疆ジャンガル15章本には、記録の仕方が学術的な見地からみて妥当なものか否かということにはさして注意が払われなかったという欠陥が認められる。すなわち、そこにおいては、同じような内容を語る複数の人間の語りや、編集者の裁量で自由に切り貼りされているのである。だが、採集者であるボヤンヒシグ氏は、1982年版の15章本の序で、調査当時です

ら後々政治的批判に晒されるのではないかという不安から採集の協力に躊躇する伝承者もいた、と記しており、そうした事情を考慮に入れるなら、学術的欠点を云々するよりも、新疆ジャンガル15章本が世に誕生したことの意義が最大限に強調されるべきなのであろう。

その後、新疆においてはジャンガルを採集する組織である《江格尔》工作组が自治区副主席のバダイ（巴岱）氏を長として発足し、1980年3月以降、新疆ジャンガルの精力的な採集が推進されるようになった。『ジャンガル』研究者リンチンドルジ（仁钦道尔吉）氏によると、約187時間に及ぶ録音がなされ、約19万行に達する157編のヴァージョンもしくはヴァリエントが採集されたということである。このほか、1981年の6月～7月にはボルタラ（博尔塔拉）、バヤンゴル（巴音郭楞）、およびタルバガタイ（塔城）地区において『ジャンガル』の演唱会がおこなわれ、これらに参加した伝承者たちの語りはすべて録音されたという。さらに、1981年の8月～9月にはリンチンドルジ氏とジャムツァ（贾木查）氏の2人がボルタラ（博尔塔拉）とイリ（伊犁）2州の6県を訪問し、10数名の伝承者から『ジャンガル』を録音したという情報も存在している（仁钦道尔吉1999:54）。

録音された『ジャンガル』はトド文字に転写されて、「ジャンガリー・エヘ・マテリヤル」と呼ばれる叢書で現在まで1巻～13巻の140編が刊行されている¹⁴⁾（中国民間文学芸術研究会新疆分会整理1985a; 1985b; 1985c; 1985d; 1985e; 中国芸術家協会新疆分会・新疆维吾尔自治区民族古籍办公室合編 n.d.a; n.d.b; n.d.c; n.d.d; 1993; 1996a; 1996b; 1996c）。以下、これを江格尔原資料集と呼ぶことにしたい。この資料集は、語り手個々人の語りをそのまま採録した資料とされているが、必ずしもそうではないらしいことについては後述することにする。そのほか、「70章本ジャンガル」と通称される70編のジャンガルがトド式蒙古文字で出版され（中国民間文学芸術研究会新疆分会整理1985; 1987）、これらは注釈とともにウイグル式蒙古文字でも出版された（内蒙古少数民族古籍編・内蒙古社会科学院文学研究所編1988; 1989; 内蒙古古籍整理办公室・新疆民間文芸家協会編1996）¹⁵⁾。「70章本ジャンガル」は、学術研究のためというよりもむしろ一般読者を対象に編まれたために、編集の操作がかなり入っている。とはいえ、信頼できるインフォーマントの情報によれば、これらの本はすでに完売され、新疆のモンゴル人家庭で広く親しまれているとのことである。

こうした新疆ジャンガルの採録・出版状況をかながみると、1999年3月に千葉大学のユーラシア言語文化論集別冊第1号として出版された『アリンピルの「ジャンガル」新疆オイラト・モンゴルの英雄叙事詩』というテキストは、重要な成果といえる

(塔壘 1999)。これは、『ジャングル』の主要な伝承地域であるホボクサイル地方の著名なジャングルチであるアリンピル（冉皮）氏の語った17編の記録であり、新疆ウイグル自治区ホボクサイル（和布克賽爾）県出身のD. タヤ（塔壘）氏によって採録・解説されている。タヤ氏はあとがきで次のように記している。

1989年の夏、当時新疆・ホボクサイル県第1中学・高等学校の教員を勤めていた私は、父方祖母のいとこである大叔父アリンピルの家を訪ねた。当時、大叔父アリンピルは県鎮の学校で勉強するために草原から来ていた姪に手伝ってもらいながら、一人暮らしをしていた。彼は私をみると喜んでお茶や食事の支度をしつつ、私とのおしゃべりに興じるなかで、自分の語りにもとづいて出版された『ジャングル』を姪に読んでもらって聞いたと話した。そして「わしの語っていない言葉が出てくるだけじゃない。他人の語った『ジャングル』と混ぜ合わされて、わしの語った『ジャングル』はなくなってしまった」と不満をこぼしていた。彼は「わしの語ったとおりに出版することはできんものなのかのう」と私に尋ねた。当時の私には語ったとおりに出版できる方法など思いつかなかったが、「もちろん、できるでしょうよ」というよりほか答えようがなかった。(塔壘 1999: 453-454)

ジャングルチのこうした不満を解消するため、また、伝承の学術的利用を考えて、このテキストは、語り間違えも含めて語ったままと再現する方針を最優先して記録されたことを大きな特徴としている。実際、テキストには重複する句が散見されるなどして、その方針どおりに採録されたことをうかがわせている。新疆において最も多くの章を語るジャングルチとしては、アリンピル氏とジョーナイ氏の2人がいるが、アリンピル氏のテキストをすべて記録したというこの労作は、ウイグル式蒙古文字で表記されているために現地の方言を十分に反映させることができている面ではカルムイクジャングル25章本の音声表記には及ばないものの、内容の面においてはそれに匹敵する優れた民族誌資料となっているといえる。このテキストは上下段27行378頁にわたる約2万412行から構成されている。以下、これを「アリンピルの17章本」と記すことにする。

『ジャングル』の2大伝承地域であるカルムイクと新疆においてカルムイクジャングル25章本とアリンピルの17章本という2つの学術的テキストが刊行されたことで、『ジャングル』研究者は重要な比較資料を手に入れたことになる。アリンピルの17章本に収録されている章は、江格尔原資料集の1巻と13巻にも収録されたことがあり、この17章とそれらとの対応は次の表のようになる。ただし、対応している章があるとしても、字句がすべて一致しているわけではなく、長短にも差異があることを断っておく。

表1 アリンピルの17章本と江格尔原資料集第1巻と第2巻の対応

章	章のタイトル	《原資13》	《原資1》
1	《jingyar》un ekin bölüg 首巻	有(5-43頁)	有(21-49頁)
2	böke mönggün sigsirge önučin qučuruysan jingyar-i olju abuɣad 《jingyar》gedeg nere öggügsen bölüg プフ・ムンゲン・シグシルゲが弧児を見つけ、「ジャンガル」と名づける巻	有(45-82頁)	有(51-90頁)
3	böke mönggün sigsirge jingyar-i alaqu sanaya-ban quriyaju ejen sirki-yin tabin saya nutuy-i tusiyaju ögkü-ber toytaɣsan bölüg プフ・ムンゲン・シグシルゲがジャンガルへの殺意を思い止まり、エズン・シルヒの5千万人の領民を引き渡すべく決める巻	無	有(3-20頁)
4	kündü ɣartai sabar-un bölüg フンド・ガルタイ・サワルの巻	有(511-534頁)	無
5	qayan köbegün qangyaltai üzhüw-ün bölüg ハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウの巻	無	
6	aliya mongqulai-yin bölüg アリヤー・モンフライの巻	有(483-509頁)	
7	qongyur-un ger abulya-yin bölüg ホンゴルの嫁取りの巻	有(391-442頁)	
8	küčü yeke-tei kürkülüyitü altan soyuya-yin bölüg 力強いフルフリート・アルタン・ソヨーの巻	有(129-180頁)	有(91-163頁)
9	doysin sira gürtüg-ün bölüg ドクシン・シャル・グルグの巻	有(193頁-279頁)	無
10	doysin qara kinis-ün bölüg ドクシン・ハル・キナスの巻	有(281-343頁)	
11	döngsiɣur gerel mangyus-i qongyur amidu-bar bariysan bölüg ドゥンシュール・ゲレル・マンガスを生け捕りにする巻	有(443-482頁)	
12	ayuru doysin boru mangnai-tai qongyur bayiri barilduysan bölüg アイフ・ドクシン・ボル・マンナイとホンゴルの戦いの巻	無	
13	doysin qara sanal ɣayan tabay tayiji küder tayiji qayan-i jingyar-tu oruɣulju öggügsen bölüg ドクシン・ハル・サナルがザーン・タバク・フデル・タイジ王をジャンガルの国に降伏させる巻	有(535-575頁)	
14	qayan siir köbegün-ü bölüg 若者ハーン・シールの巻	有(577-602頁)	

15	jingyar-un atuγar qara köbegün ergigüü mönggün tebeg-i amidu-bar bariγsan bölüg ジャンガルの息子アトガル・ハル・フブーンがエルゲー・ムンゲン・テベクを生け捕る巻	有 (345-390頁)	有 (165-224頁)
16	qosiγun ulayan, bayatur qara jilya, aliya šongqur yurba bayatur törügšen badma-yin ulayan-i oruγulju iregsen bölüg ホシヨーン・オラーン, パートル・ハル・ジルガ, アリヤー・シオンホルの3英雄が勇猛なバドミーン・オラーンを征服する巻	有 (603-644頁)	無
17	jingyar-un tegüsülte bölüg 終巻	有 (645-702頁)	

- ※1 表中の〈原資1〉〈原資13〉とは江格尔原資料集第1巻と第13巻のことを指す。
 ※2 表中のアリンピルの17章本の各章のタイトルは、塔亜氏の整理したタイトル名に従うものとする。
 ※3 表中のタイトル名はすべて小文字で記す。
 ※4 各章のタイトル名の邦訳は対照の便を考えて塔亜氏のテキストに従うが、人名のカタカナは本論の表記に従うものとする。

3 本論の目的

ジャンガルは、しばしば「6千12勇者」あるいは「8千12勇者」を統率していると語られている。「6千12勇者」もしくは「8千12勇者」は、場合によって、最初の「6千」や「8千」と後の「12」の部分が逆になっていたり、別個に語られたりしていることが観察される。このことから、これらの表現は、「6千勇者」もしくは「8千勇者」と、「12勇者」とが結合したものだと思なすことができる。一般に、この「6千」もしくは「8千」、そして「12」という数はそれぞれ、「6千人の勇者」、「8千人の勇者」、「12人の勇者」というように、人数を表す数詞であると考えられている¹⁶⁾。この場合、「12勇者」はジャンガルの側近にいる勇者たちのことで、ホンゴルやアルタン・チェージ、サウル、サナルといった「固有名詞」で語られる主要な12人の勇者-を指し¹⁷⁾、「6千勇者」もしくは「8千勇者」は、そうした「固有名詞」をもたない格下の勇者たちを指示するものと考えられている。

しかし、具体的に12人がどの勇者のことを指しているかについては議論されたことがなく、「12」が人数を表す数詞であるかについても本格的に議論されたことはない。「12勇者」を同定することは、『ジャンガル』の勇者論として重要であり、『ジャンガル』が英雄叙事詩である以上、『ジャンガル』そのものの主題の考察につながるものと見込まれる。したがって、本論では、“12勇者”の表現を信頼できる資料をもとにすべて検討し、“12勇者”が指示していると考えられる勇者の特定をおこなうこ

とにしたい。

4 勇者の席次からみた12勇者

まず最初に述べなくてはならないことは、「12勇者」という表現が具体的にどの勇者を指しているかについて、伝承内において明示されることは極めて例外的な事柄に属しているということである。『ジャングル』の「12勇者」が具体的にどの人物を指しているのかを知る手掛かりは、冒頭部に示されることの多い勇者たちの座る席次の紹介である。この席次は左右に分けて語られており、ジャングルの「12勇者」という場合、この左右の席次で紹介される勇者のことを指しているものと一般にみなされている。

だが、カルムイクジャングルにおいて11章という最も多くの章を語ったジャングルチであるエーリヤン・オヴランがジャングルの主要勇者の名前として明示的に語ったのは、実際、5人にすぎないことが観察される。このことは、エーリヤン・オヴランが各編を語る序としてジャングルとその勇者たちを常に紹介していたことを考えると、偶然ではない事実として受けとめなければならないであろう。エーリヤン・オヴランの挙げた5人の勇者の名前は次のようになる¹⁸⁾。

表2 エーリヤン・オヴランの席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	アルスランギーン・アラク・オラーン・ホンゴル arsl'ŋgiin ar'g ulan qoŋγ'r	I/365頁	第1席	クンキーン・アルタン・チェージ kūŋkiin alt'n čeeži	I/365頁
第2席	グゼーン・グンベ güzängümbě	I/365頁	第2席	クンド・ガルター・サワル kündě ɣarta sav'r	I/366頁
第3席	ドクシン・ハル・サナル dogš'n qar' san'l	I/366頁			

席次に12人にはるかに満たない人数しか紹介されていないことは、エーリヤン・オヴランだけでなく、彼より以前に記録されて1864年に出版された写本《ハル・キナスの章》および《シャル・グルグの章》の場合にも観察される¹⁹⁾。前者の場合、1996年に刊行された前述のトド文字写本《シャル・グルグの章》においても同じ表現がなされている（索徳那木拉布担・巴图編 1996: 10b-14b）。カルムイクジャングル

25章本の第4話と1996年度版の写本とは語句が一致していることが観察されるので、同源の伝承とみなせる。どちらのテキストにも、次のように、右に2人、左に2人の計4人にしか言及されていない。

表3 <ハル・キナスの章>における勇者の席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	グンベン gümbän	I/231頁	第1席	ダグナン・アルタン・ チェージ dagn'n alt'n čeeži	I/227頁
第2席	エルフ・シオンホル erkě šoŋq'r	I/232頁	第2席	ハリング・オラーン・ ホンゴル qaliŋg' ulan qoŋy'r	I/229頁

ただし、表2や表3の席次の示し方は厳密に正しいとはいえない。なぜなら、右の第2席のホンゴルは、実際のテキストにおいては序数では示されておらず、アルタン・チェージについての叙述が終わったあとに、「その次の側にtüüni daru bijdëni (I/227頁)」とあるために、序数とみなしたにすぎない。実際、すぐ次行では、「真中の7円陣を無言でリードするduŋdak' dolan duŋy'ryiini, duu uga aql'n」という叙述が見えている。すなわち、ホンゴルの座った席がアルタン・チェージとどのように関係しているのかは定かではない。同様のことは、第2の席次が与えられているエルフ・シオンホルの場合にも指摘できる。

エルフ・シオンホルの場合は、ホンゴルの場合よりもさらに曖昧に記されている。エルフ・シオンホルは、右のホンゴルと同様にグンベンの叙述が終わったあとに、「その次の側に」という表現は見えず、「真中の7円陣をリードして座った勇者はdoŋdak' dolan duŋy'rayiini, aq'lzi suugs'n baat'rni」とあり、ここでも左の第1席に座しているグンベンの席次とどのように関係しているのかが曖昧なのである。このような観点からみて指摘すべきことは、よくみると、左右の第1席に座っているアルタン・チェージやグンベンにしても、序数で「第1」という表現がなされていないことである。両者とも左右をリードして座っているとしか叙述されていないのである²⁰⁾。このことは本論の結論からみれば意味あることであるが、それについては次第に理解されてくることになるので、このことが次の<シャル・グルグの章>にも該当することをみておこう。

<シャル・グルグの章>の席次は次のようなものである。

表4 <シャル・グルグの章>における勇者の席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	ノイン・グンベ noj'n gūmbě	I/160頁	第1席	アルタン・チェージ alt'n čeeži	I/159頁
第2席	ザロー・オラーン・ホン ゴル zalu ulan qoñγ'r	I/160頁	第2席	クルギーン・クブーン・ モンフリ kūlgiin kövün muñq'li	I/159頁
第3席	ハプトイン・ウング・ ビエ qavtyyn öngě bijě	I/160頁	第3席	ボロー・マンナ buru mañna	I/159頁
			第4席	クンド・ガルター・サワル kündě γart' sav'r	I/159頁

<シャル・グルグの章>においては、右側の勇者が言及された後に、「最後の権利まで、17ボドンが円陣を組んで、誉れある聖君の宮殿に、右側の大臣が座っている ad'g erkěn kürtělě ar'n dolan bod'ñ dunγ'ralad,duut' bogdüün örgädě, barun bijiin säädüd suud'g (I/159頁)」という表現がなされている。「ボドン」とは、通常「若い野生猪」のことであるが、英雄叙事詩においては「勇者」の意として一般に解される。叙述に沿うならば、席次に挙げられている勇者は17人のなかでも主要な人物だとみなすことになり、それが右4人、左3人の計7人挙げられている勇者の名前であるということになる。先の<ハル・キナスの章>と同様に、ここでも12人に満たないことが観察される。指摘しておくべきことと思われるのは、<シャル・グルグの章>がカルムイクジャンガル25章本のうちで最も多くの勇者の名前が席次に言及されている章だという点である²¹⁾。

ただし、これは席次の叙述がある章を対象にする限りであり、勇者の席次はどの章においても必ずしも語られるわけではない。たとえば、カルムイクジャンガル13章本のもうひとつの章である<シャル・マンガスの章>においては、席次の叙述はみられない。

以上の事例をみると、12人の勇者の存在が確認されないばかりでなく、各伝承間で席次における勇者は全く一定していないことが観察される。唯一共通しているのは、右の第1席に座するアルタン・チェージのみである²²⁾。口頭伝承の動態性を考えると、アルタン・チェージの席次がいかに安定しているかがわかる。いずれにしても、以上の事例は、勇者の席次が「12勇者」を考察するのに適していないことをうかがわせている。こうしたことは、カルムイクジャンガルだけでなく、新疆ジャンガルの場合にも観察される。ただし、先に挙げた塔里氏によるアリンピル氏のテキストの場合、

「12勇者」は、次のように左右6人ずつ計12人に言及されている。

表5 アリンピルの17章本における勇者の席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	ドクシン・タヒル・アル ダル・アラーン doysin takil aldal arayan	29頁	第1席	アルタン・チェージ・ ババイ altan çegeji babai	27頁
第2席	アサル・オラーン・ホン ゴル asar ulayan qongyur	30頁	第2席	ロスティン・タルガン・ グンベ luustu-yin taryun gumbü	27頁
第3席	オルチロンギーン・サイ ハン・ミンヤン orčilang-un sayiqan mingyan	30頁	第3席	ドクシン・ハル・サナル doysin qara sanal	28頁
第4席	アリヤー・シヨンホル aliya šongqur	30頁	第4席	ザロー・ダンナン・ボル・ マンナイ jalayu dangnan boru mangnai	29頁
第5席	フンド・ガルタイ・サワル kündü yartai sabar	31頁	第5席	エルゲー・ハル・ヌドゥン ergigüü qara nidün	29頁
第6席	エルゲー・ハル・ヌドゥン ergigüü qara nidün	31頁	第6席	サンサル・ハル sangsar qara	29頁

上記の左右における勇者の名前を詳細にみると、右の第5番目のエルゲー・ハル・ヌドゥンと左の第6番目のエルゲー・ハル・ヌドゥンは同一名称なので同一人物を指しているのではないかと考えられる。もしそうであれば、厳密には12人になっていないことになる。この席次に問題があるらしいことは、原文のほかの箇所との関係で幾つか指摘することができる。第1に、表5で示した12人の勇者の席次が紹介された後には、ジャングルの息子世代の勇者についての席次の紹介があり、アルタン・チェージの息子アリヤー・シヨンホルの名前が見えるが、この人物はすでに提示された親の席次における左の第4番目のアリヤー・シヨンホルと同一人物と考えられるからである。すなわち、同一人物の名前が重複して語られているのである。第2に、第4話ではサワルという勇者は左の第3の勇者になると叙述されているにも関わらず（塔壘 1999: 75）、最初の章では左の第5の勇者に登録されている。第3に、第14話の結末部においてはジャングルがハーン・シールという新たに盟友となった勇者をホンゴルの次の席につかせたとあるのに（塔壘 1999: 311）、最初の章ではこの位置はミンヤンの席になっている（塔壘 1999: 30）。

江格尔原資料集第1巻と第13巻にはこのテキストのヴァリエントが見えるのでそれを参考にすると、前者においては右に5人、左に4人の計9人が記されている。具体的に江格尔原資料集第1巻《ブフ・ムンゲン・シグシルゲ父がウィーン・ウンチン・ジャンガにエズン・シルヒの5百万の領地を委任してやりしこと *bökü mönggün šigširge a:bu, üeyin önöčin jangyartu ezen širkiyin tabun saya nutuy-yigi tuša:ji ögüqsen ni*》における席次を示すと、次のようになる。

表6 アリンピルの江格尔原資料集第1巻における勇者の席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	アサル・オラーン・ホン ゴル <i>asar ula:n qongyor</i>	48頁	第1席	<u>アルタン・チェージ・</u> <u>バーバ</u> <u>altan če:ji ba:ba</u>	44頁
第2席	オルチロンギーン・サイ ハン・ミンヤン <i>orčilang giyin sayiqan mingyan</i>	48頁	第2席	<u>オスン・タルガン・ゲンベ</u> <u>usun taryan gümbe</u>	45頁
第3席	フンド・ガルタイ・サワ ル <i>kündü yartai sabar</i>	48頁	第3席	<u>ドクシン・ハル・サナル</u> <u>doqšin qara sanal</u>	46頁
第4席	ナチン・シヨンホル <i>način šongqor</i>	49頁	第4席	<u>ウーチ・ボロ・マンナイ</u> <u>üüči boro mangnai</u>	46頁
			第5席	<u>エルゲー・ハル・ニドゥン</u> <u>ergüü qara nidün</u>	47頁

ここでは勇者の数が12人から9人に減少している。これは江格尔原資料集の叙述の信頼性を問わせる例となるが、こうした事実をふまえて塔亜氏のテキストの巻末には江格尔原資料集との語句の対照表が掲載されている。ただし、この席次については言及がない。このほかにも、巻末にアリンピル氏からのインタビュー記事も収録されているが、残念ながらそこにも言及がない。

表6において下線で記したものは、塔亜氏のテキストと他のテキストとの間で基本的に一致している勇者名である。これによると、右側は安定して語られる席次の可能性が高い。左側の席をみると、塔亜氏のテキストで第1席に挙げられているドクシン・タヒル・アルダル・アラーン *doqšin takil aldal arayan* が抜けたために、塔亜氏のテキストで第2席のホンゴルと第3席のミンヤンの位置がひとつずつ繰り上がったように見える。しかし、塔亜氏のテキストではアリヤー・シヨンホルという勇者とフン

ド・ガルタイ・サワルという勇者が第4席と第5席というように連続しているのに対して、ここでは若干語の差異を伴いつつ、逆に第5席が先に来てその後に第4席が配置されている。

後者の江格尔原資料集第13巻での席次は、次のようになっている。ただし対比が明瞭にわかるように、アリンピルの17章本における席次とは異なる場合にだけ具体的に名前を記し、その場合に⇔の右側に17章本で対応している名前を付しておいた。

表7 アリンピルの17章本と対比された江格尔原資料集第13巻における勇者の席次

左側	勇者	右側	勇者
第1席	同一 ²³⁾	第1席	同一
第2席	同一	第2席	同一
第3席	同一	第3席	同一
第4席	フンド・ガルタイ・サワル kündü yartai sabar (39頁) ⇔アリヤー・シオンホル aliya šongqur	第4席	同一
第5席	ナチン・シオンホル način šongqor (39頁) ⇔フンド・ガルタイ・サワル kündü yartai sabar	第5席	同一
第6席	サンサル・ハル・ブルグド sangsar qara bürgüd (40頁) ⇔エルグー・ハル・ヌドゥン ergigüü qara nidün	第6席	ザロー・ダンナーン・ボルハン・ボル・マンナイ zalu dangna:n burqan boro mangnai (32頁) ⇔サンサル・ハル sangsar qara

実は表中に示した以外にも、通訳ヘー・ジルビンが司法の座についたことや、サルヒーン・タバク・バートルが戸口の伝令になったことが言及されている（中国芸術家協会新疆分会・新疆维吾尔自治区民族古籍办公室合編 1996c: 40）。アリンピル氏の3つのヴァリエントで共通しているのは、表7における右側の第1席～第5席までの5人の勇者である。左の席についていえば、第13巻のテキストにおいては第1席～第3席が17章本と一致しているが、第1巻と17章本では完全に齟齬があるので、この3つの席にしてもそれほど安定しているわけではなさそうである。

いずれにせよ、江格尔原資料集が語りを必ずしもそのまま再現しているわけではな

いことを考慮に入れば、新疆ジャンガルのもう一人のジャンガルチで25章を語ったとされるジョーナイ（朱乃）氏のテキストをこの資料から提示するのは問題がないわけではないが、参考のために提示しておきたい。江格尔原資料集第1巻の《聖主ジャンガル様がドクシン・シルヒの印璽を掴んでアルスラン勇者たちを招集したこと aldar noyan boqdo jangyar doqšin širkiyin tamya bari:d arslang ba:turmuuda:n cuqluuluqsan ni》における描写である²⁴⁾。

表 8 ジョーナイ氏の江格尔原資料集第1巻における勇者の席次

左側	勇者	当該場所	右側	勇者	当該場所
第1席	ボスディー・タルガン・ グゼーン・グンベ busudiyin tarγun gūze:n gümbe	335頁	第1席	バヤン・フンヒーン・ア ルタン・チェージ bayan küngkeyin altan če:ji	331頁
第2席	ドクシン・ハル・サナル doqšin qara sanal	336頁	第2席	フンド・ガルタイ・サワル kündü yartai sabar	332頁
第3席	アルタン・アラーン altan ara:n	337頁	第3席	ウング・ビエ önggü biye	333頁
第4席	サルヒン・タバック・ ディディライ salkin tabaq didirai	337頁	第4席	ドゥーウエル・エルキン・ メルゲン・テベク düübür erkin mergen tebey	334頁
第5席	ザロー・ボルハン・ボ ロ・マンライ zaluu burqan boro mangnai	337頁	第5席	ドクシン・アルタン・ア ラーン doqšin altan ara:n	334頁

席次で示されているのは以上の左右5人ずつであるが、勇者たちの叙述はこうした席次とは別の箇所にも現われている。たとえば、右の席次の前にジャンガルは、「右側の勇者たちの真ん中に、獅子・虎玉座の上に、1万人の人が上から押さえつけようとも、難なく立ち上がる、トゥブシン・シルキの長子、ブフ・ムンゲン・シグシルゲ父よ座れ baruun biyeyin ba:turčuudiyin dunda, bar arslangtu barda:n šire: de:re, tümen kümün de:re:sü ni darubčigi, tüdel ügei örgün bosdaq, түбшин širkiyin uuyan köbüün, bökü mönggün šiγširge a:bu suutuγai」と命じており（中国民間文学芸術研究会・新疆维吾尔自治区分会整理 1985a: 331）、席次のなかにはないブフ・ムンゲン・シグシルゲ bökü mönggün šiγširge という人物が登場している。ブフ・ムンゲン・シグシルゲは、『ジャ

ンガル』の花形勇者ホンゴルの父にあたる。アリンピル氏の語りにおいては、ジャングルは幼少の頃この人物に殺害されかかるが、ホンゴルが庇ったために命拾いすることについて言及されている。そしてこの後続する部分には、花形勇者であるにも関わらず席次が与えられていなかったホンゴルについて、「俺の次に座るといえば、かまどの脚の上に、ボムビーン・オロンの勇者ホンゴルよ座れ *mini dariu suudaq ni bolqula, bo:l tulya-yin šiyir de:re, bumba-yin oroni ba:tur qongyor suutuŋai*」とジャングルが命じている箇所がみえる（中国民間文学芸術研究会・新疆维吾尔自治区分会整理 1985a: 331）。ただし、ホンゴルの席が他の勇者の席次といかに関わっているのかは定かではない。

右側だけでなく、左側の勇者たちについての叙述の後にも、ホンゴルと同様に、席次が与えられていなかった3人の勇者について言及されている。すなわち、1人目は、「真ん中に上座をみて、素晴らしきボムバの司法の座に、タラーチ・アルダル王の息子、…（略）…、優れた通訳のヘー＝ジルビンが座ることになる *tala dunda ni ö:dö qali:lyaqsan, tangsuq bumba-yin zaryu-yin altan šire: de:re, tara:či aldar qa:ni köbüün, …tabtai kelemərči ke: jilbin suudaq bolunai*」とあり（中国民間文学芸術研究会・新疆维吾尔自治区分会整理 1985a: 337-339）、2人目と3人目は近接して「絶世の美男子ミンヤン勇者よ、偉大なる酒注ぎになれ、ザロー・ボロ・マンライ猪よ、我が馬丁になれ *orčilang giyin sayıqan mingyan ba:tur, erkin sayın söngči mini boltuŋai!, zaluu boro mangnai bodong, mini möriči daquuli boltuŋai!*」というように言及されている（中国民間文学芸術研究会・新疆维吾尔自治区分会整理 1985a: 339）。

このように述べられるジョーナナイ氏の席次にも、アリンピル氏のテキストで指摘したことと同様の現象が観察される。それは、右の5番目に位置するドクシン・アルタン・アラーンと左の3番目に位置するドクシン・アルタン・アラーンとが同一人物ではないかと疑われることである。そこで、勇者の席次について言及しているジョーナナイ氏のもうひとつのテキストをみておきたい。それは、江格尔原資料集第8巻の《ハーン・ノヨン・ジャングルの最初の章 *qa:n noyon jangyariyin eken bölöq*》における席次である。これを示すと、次のようになる。下線部は先のテキストと共通していることを意味する。

表9 ジョーナイの江格尔原資料集第8巻における勇者の席次

左側	勇者	当該箇所	右側	勇者	当該箇所
第1席	<u>ボスディーン・タルガン・グゼーン・グンベ</u> busudiyin tarγan gūze:n gūmbe	28頁	第1席	<u>バヤン・フンケイン・アルタン・チェージ</u> bayan künqkeyin altan če:ji	25頁
第2席	<u>ドクシン・ハル・サナル</u> doqšin qara sanal	29頁	第2席	<u>フンド・ガルタイ・サワル</u> kündü yartai sabar	27頁
第3席	ドクシン・アルタン・アラーン doqšin altan ara:n	29頁	第3席	アルタン・マラル・ソヨー altan malar soyo:	27頁
第4席	ザロー・ボルハン・ボロ・マンナイ zaluu burqan boro mangnai	30頁	第4席	サルヒン・タバク・デイ デイライ salkin tabaq didirai	27頁
第5席	ウング・ビエエ önggü biye	30頁	第5席	ドゥーヴル・エルケ・ムンゲン・テベク düübür erke mönggün tebeq	28頁

このテキストの場合、アルタン・アラーンという名前の勇者は1名しか存在していないので問題はない。ここでは重複が避けられたアルタン・アラーンの代わりに、アルタン・マラル・ソヨー *altan malar soyo:* という名前の勇者が右側の第3席に登場している。また、このテキストにおいては、先のテキストとは異なる表現であるとはいえ、プフ・ムンゲン・シゲシルゲ以外のミンヤン、ホンゴル、通訳ヘー・ジルピンについても別の箇所で言及がある。先のテキストとこのテキストの共通部分は下線で強調した、左右の第1と第2の席次に座る4人の勇者であり、半分以上の勇者の席次が一定していない。両者のテキストにおいて席次に述べられる人数はどちらも10人であるが、席次およびそれ以外に述べられた人物を合計すれば、前者は14人、後者は13人となる²⁵⁾。

以上のように、新疆ジャンガルではカルムイクジャンガルとは異なり、挙げられている人物の数は12人（アリンピル氏の場合）、13～14人（ジョーナイ氏の場合）というように、カルムイクに比べると「12人」に近づいているといえる。アリンピル氏とジョーナイ氏の席次を対比した場合、両者の席次における勇者の名前は右の第1席に座っているアルタン・チェージ以外一致していないことが観察される²⁶⁾。さらに、カルムイクジャンガルと新疆ジャンガルにおける席次を比較する場合においても、共通しているのは右の第1席のアルタン・チェージだけということになる。以上から、『ジャンガル』においてはアルタン・チェージの席次の位置がかなり安定したもので

あることが理解される。その他の勇者については、各伝承間で共通して登場する何人かの勇者がいることは事実であるが、安定してはいない。このアルタン・チェージの安定性は本論の結論からみれば、大いに意味深いことであるが、これについては本論で以下詳述していくことになる。

5 具体的な表現からみた12勇者

『ジャングル』における「12勇者」を特定しようとする本論の目的に立ち戻ると、この問題は次のような認識をもったうえで取り組むべき問題であるように思われる。すなわち、席次の叙述がかなり不安定であることを考慮すると、席次から「12人」を特定することは妥当ではないというだけでなく、そもそもジャングルの勇者が「12人」いるというほぼ自明になっている見解それ自体が非常に危ういものだとということである。

これに関連して触れておくならば、研究の初期の頃には、カルムイクにおいて「12勇者」についての問題は、物語の数との関連で考えられていた。そこにおいては、12人の勇者が誰かということではなく、一人一人の勇者にひとつひとつの物語があるというような根拠のない見方があったために²⁷⁾、十二支や1年が12ヶ月といったこととのアナロジーで、ジャングルには12編の歌があるという見方がなされていた(Михайлов 1978: 12-13)²⁸⁾。「12勇者」の問題が物語数との関連で注目された背景には、当時知られていた章の数が12～13編であったことが少なからず影響したものと考えられる。むしろ、現在ではこのような考え方は払拭されている。勇者の数について、ミハイロフ氏は次のように述べている。

…ジャングルにおける勇者たちは、もしジャングルの本陣にいて勇敢な武勲を働いて尊敬すべき位置を占めている最も活躍している者をいおうとするならば12人で、これはより少なく見積もった場合である。もし名もない多数の勇者たち—この者たちはジャングルの語り手たちによって頻繁に言及されているのだが—を考慮に入れるならば、それより多くなる。(Михайлов 1978: 12-13)

この考え方は通説となってきたものであるが、ミハイロフ氏は「12人」がジャングルの主要な勇者とみなされながらも誰も実際にこの主要な勇者の数を突き止めようとはしなかったと付け加えて、実際に12人いるかどうかに対しての疑問を含みとして残している(Михайлов 1978: 13)。いちはやく『ジャングル』についての著作を世に送ったモンゴリストであるS. A. コージンにしても、12人を同定しようとはせず、こ

の「12人」を「ジャンガルの周囲にいる勇者たち」と記述しており、これらの人々はオイラトの下位集団における最上層部に属する王族の子息であるという見方を示した(Козин 1998: 98-99)²⁹⁾。

モンゴル国のツェレンソドノム氏は、モンゴル文学における『ジャンガル』についての解説において、『ジャンガル』には登場人物が100人以上いると言われているが、実際にはジャンガルと戦ったり友好関係をもったりする少数の勇者についてしか語られていないと指摘している(Цэрэнсодном 1987: 122)。主要勇者としてツェレンソドノム氏が挙げたのは、アルタン・チェージ、ホンゴル、サナル、アリヤー・モンフライ、サワル、バートル・ハル・ジルガン、ミンヤン、ボル・マグナイの計8人である³⁰⁾。

以上の議論からおのずと暗示されてくるのは、「12勇者」の「12」が必ずしも人数を表す数詞ではないということである。したがって、本論では席次を全く考慮しないというわけではないが、むしろ語りのなかで「12勇者」という表現が現われる具体的箇所注目し、そこにおける「12勇者」の用法を検討することにより、この問題にアプローチすることにしたい。

6 新疆ジャンガル(アリンピルの17章本)における12勇者の表現

この問題を扱うさいに、まず新疆ジャンガルを考察してから、カルムイクジャンガルを考察することにした。新疆ジャンガルを扱うさいには、アリンピルの17章本を用いることにしたい。新疆ジャンガルのなかでアリンピルの語りを対象とする理由は、それが伝承者の語りをそのまま記録したものであり、音声表記という厳密さはなくとも、表現の揺れや幅を詳細に観察することを可能にしているからである。しかも、アリンピル氏の場合、「12勇者」の「12」をカルムイクジャンガルのテキストよりも「12人」として描き出そうとしている点で、この問題を論じるのに格好と素材となっているといえる。

以下においては、このテキストにおいて「12勇者」という語句が用いられている箇所を章ごとに列挙し、用いられている環境を記述することにした。このテキストには計17章が含まれているが、実は「12勇者」という表現には幾つかのヴァリエーションがある。しかし、すべて「12勇者」という意味で用いられていると考えることができる。それゆえ、前者を伝承の現実的形態、後者を伝承の理念的形態というように区別することができる。以下の論では、両者を区別するために、数字にカギ括弧

(「 」)を付す場合は前者の現実的形態、二重コンマ(“ ”)を付す場合は後者の理念的形態を、それぞれ表すことにしたい。

“12勇者”の表現は第7章に初出する。『ジャングル』の物語の感覚を掴んでもらうため、第7章『ホンゴルの嫁取りの巻』の要約を塔亜氏から引用しておきたい(塔亜1999: 395-396)³¹⁾。

英雄たちと饗宴を楽しんでいたジャングルが「ホンゴルにドクシン・ツァガーン・ハーンのナラネ・ゲレルという姫君を娶ろう」と言うと、アルタン・チェージ・ババイは「その姫君は外見は姫君のようだが、心は悪鬼のようだ」と反論する。ジャングルは固執して、ドクシン・ツァガーン・ハーンに会いに行く。ドクシン・ツァガーン・ハーンはジャングルの頼みを受け入れ、ホンゴルを自ら迎えに来させるようにと言う。喜んで帰途についたジャングルはアルタン・チェージ・ババイの予知どおり毒の海、砂漠や化け物の五本柱に遭い、命辛々戻ってきた。アルタン・チェージ・ババイの予言が的中し、自らの誤りが露呈したことをジャングルは恥じらい、それをごまかそうとしてホンゴルを嫁迎えに行かせる。ホンゴルも数々の危難を乗り越えてドクシン・ツァガーン・ハーンの国に辿り着いた。しかし、ナラネ・ゲレルはすでにトゥムル・プスと結婚していた。ホンゴルはトゥムル・プスと相撲を取って殺してしまうが、戦いを挑んできたナラネ・ゲレルも斬り殺してしまう。ホンゴルは夢のなかでボーラル・ザンバル・ハーンのゾル・ザンダンという姫君のお告げを受ける。ホンゴルは途中で、あるハーンの国に入って道を教えてもらう。ボーラル・ザンバル・ハーンの国について、駿馬を疥癬病をもった2才馬に、自分はハゲ頭の少年に変身して、ハーンのラクダ飼いの爺さんの養子になる。少年はラクダ飼いの爺さんと一緒に、マンハチ・ハーンの息子のブフ・ツァガーンがボーラル・ザンバル・ハーンの姫君のゾル・ザンダンに婚礼の品物を届ける祝宴に行き、「ジャングル」(英雄叙事詩『ジャングル』のこと—注筆者)を語って1頭の馬を賞品としてもらう。ゾル・ザンダンは「ジャングル」を聴くことを口実にして、少年に会う。そして、〔彼女は—筆者注〕千里眼の力で知ったこと、すなわち、ジャングルたちがホンゴルを13年間探し続けていること、今〔現在—筆者注〕ボーラル・ザンバル・ハーン国に入ってきていることを知らせた。ジャングルはホンゴルと会い、ボーラル・ザンバル・ハーンに姫君をホンゴルに嫁がせるよう頼むが、ハーンは姫君がすでにブフ・ツァガーンと婚約したことを話し、3種の競技を行って勝った方に嫁がせることを約束した。競馬と弓射でジャングル側が勝ったが、ホンゴルはブフ・ツァガーンと相撲を取って負けてしまう。ホンゴルの父親のブフ・ムングン・シグシルグは激怒してブフ・ツァガーンを両足から掴んで地面に叩き付けて殺してしまう。マンハチ・ハーンはジャングルたちと戦おうとするが、ボーラル・ザンバル・ハーンが仲立ちをして止めた。ホンゴルはゾル・ザンダンを娶って、ジャングルたちとボムバの国に帰り、饗宴を催した。

以下、章ごとに順次みていくが、“12勇者”関係の表現を読みやすくするために、原文と訳文の当該箇所を下線部で示したことを断っておく。

第7章には、〔1〕～〔3〕の3箇所“12勇者”が現われている。

〔1〕 第7章94頁上段14～19行目

ジャンガルがホンゴルに嫁を娶ってやると言い出す場面で用いられている。

araja-yin naiman mingyan アルズ（2回蒸留した酒）の8千
 bayatur-uud ni tay boluyad 勇者たちがしーんと静まり返って
aqamad arban qoyar arslang-uud ni 年長の12獅子たちが
 čingnaju bayitala 聴き耳を立てていると
 aldar jingyar ni ジャンガル様が
 kelen bayiba 言っていた

〔2〕 第7章94頁下段1～6行目

ジャンガルがホンゴルに嫁を娶ってやると宣言し、それに勇者たちが賛成する場面で用いられている。

aqamad arban qoyar 年長の12
arslang-uud boluyad 獅子たちと
 araja-yin naiman mingyan bayatur-uud ni: アルズ酒の8千勇者たちが
 -odu jöbtei bolba!gejü 「さあ（これで）よくなった」と
 šuugildun yarjignan³²⁾ 騒々しく我も我もと身を乗り出して
 šuugildun bayarlaju bayitala 騒々しく喜んでいと

〔3〕 第7章112頁下段最終行～113頁の11行目

ホンゴルがボーラル・ザンバル・ハーンのもとに禿げ頭の少年に姿を変えて行き、王に物語teüke tuyüjiがあれば語るようにと所望されて『ジャンガル』を語り出す場面で用いられている。

ene qojigir tarqai この禿げ頭は
 aldar noyan jingyar-un-kin-u 御領主ジャンガル様の
 aru bumba-yin orun-ača-ban アル=ボムビーン=オロンから
 abuyad ekileged 初めて
 aldar noyan jingyar-iyen maytayad 御領主ジャンガル様を讀えて
arban qoyar bayatur-iyen maytayad 12勇者を讀えて
 araja-yin naiman mingyan アルズの8千
 bayatur-uud-i maytayad 勇者を讀えて
 üze³³⁾ asar ulayan qongyur アサル・オラーン・ホンゴルの
 beye-ben maytayad maytayad 自分自身を讀えて
 keleged iregsen čay-tu 語ってきたとき

第8章には〔4〕～〔6〕の3箇所“12勇者”が現われている。

〔4〕 第8章132頁11～17行目

冒頭の箇所でタルガン・グンベが勇者たちに呼びかけている場面で用いられている。

aqamad arban qoyar 年長者の12
arslang boluyad 獅子および
aldar jingyar mini ジャングル様よ
asar ulayan qongyur mini アサル・オラーン・ホンゴルよ
araja-yin naiman mingyan bodung-uud mini アルズの8千猪たちよ
ta nar-tu kelekü üge-ben 貴方がたに言う言葉を
martayad orkiysan sanji bi! gege 忘れていたよ俺は、と言って

〔5〕 第8章133頁上段17～下段2行目まで

タルガン・グンベが強豪のフルフリート・アルタン・ソヨーという怪物王 mangyus qayan の息子についてジャングルに進言する場面で用いられている。

ene köbegün bolbala この子供は
aldar noyan jingyar-un-kin boluyad 御領主ジャングル様のところの者たちおよび
naradu yirtinçü-yin nutu-yi ejeleged この陽のもとの世界の地を占拠して
ayul gürüm-i edlegejü 危険な呪術を施して
aman üge-yi ni surna bi gejü その言葉を聴こうと思う俺は、と言って
edür-ün yurba 1日に3回
orkilan iniyejü kelegseger bayina 雄たけびをあげ、笑い、言い続けている
aldar noyan jingyar mini 御領主ジャングル様よ
asar ulayan qongyur bayatur mini アサル・オラーン・ホンゴル勇者よ
araja-yin naiman mingyan bodung-uud mini アルズ酒の8千猪たちよ
arban qoyar aqamad 12年長者
arban qoyar arslang mini 12獅子よ
yayakiday bile ta!gejü どうしたものかな貴方たち、と言って

〔6〕 第8章149頁下段26～150頁上段14行目

ホンゴルがいかにして力強きフルフリート・アルタン・ソヨーの屋敷に入り込むかとシャル・エレーン・ハルツガイに言う発話のなかで用いられている。

-sira eriyen qarçayai mini シャル・エレーン・ハルツガイよ
amin ulayan youl-iyen qolbuba³⁴⁾ 生死を共にすると誓った
qolbuba biden 結んだ俺たちは
amin-du bayiysan 命に存在した
küçün çidal-iyen neyilegülbe biden 力を合わせた俺たちは

aldar noyan jingyar-un-kin-u ジャンガル様のところの
 jiryalang-tai 幸福な
 aru bumba-yin orun-u tölüge アル=ボムビーン=オロンのために
 amin čisu-ban öregegsen 心血を捧げた
 asar ulayan qongyur bayatur geju アサル・オラーン・ホンゴル勇者というのは
 namayi keledeg bile 俺のことを言っているのだ
 aldar jingyar toljayilaysan ジャンガル様が統率した
 araja-yin naiman mingya アルズの8千
 arban aqamad arban qoyar abaya dayan 10年長者12オジに
 andayar-iyen öggüged 誓いを立てて
 kürcü iregsen tula bi! やってきたからには、俺は

第9章には〔7〕～〔9〕までの3箇所に“12勇者”が現われている。

〔7〕第9章174頁上段1～12行目

落涙しているジャンガルをみてホンゴルがその理由を尋ねる冒頭部の場面で用いられている。

aqamad arban qoyar abaya 年長の12オジ
 asar ulayan qongyur ni bosuyad アサル・オラーン・ホンゴルが立ち上がって
 -aldar jingyar mini ジャンガル様よ
 yayun bolba? gegeg kelebeču どうしたのですか?と言うと
 aldar jingyar ジャンガル様は
 dayun ügei boluyad ずっと無言でいて
 arban tabun-u sara metü čirai ni 15夜の月のような顔が
 ünestsün boluyad 灰ようになって
 asar qara nidü ni büriyegčiren 大きな黒目がとろんとして
 aldar jingyar ni ジャンガル様が
 sayuju bayiyad そのようにしていると
 geb genedken qayikiraqula-ban: 突然大きな声を出すと

〔8〕および〔9〕第9章177頁上段11～25行目

突然アル=ボムビーン=オロンからいなくなったジャンガルは、あるところで一人の女人と知り合い子をなす。生まれた息子は3日目にはジャンガルの馬に乗り、5日目には遠征に行く。大青山の麓から土埃がたっているのをみて、そこへ近づいていく場面で用いられている。

nige yeke öndür köke ayula bayıysan-du ある大きな高い青山があったところ
 tegün-ü eligen-eče その内側から
 yeke toyrum toyrusun yaruysan-i 大きな砂埃が出たのを

ene köbegün üjeged この息子はみて
aranjal jegerde külüg ayta アランザル・ゼールド駿馬の
ama-yi ni suladqaysan çay-tu 手綱を緩めたとき
kürüged ireküle やってきて
altan çegeji babai-yin tolyayılaysan アルタン・チェージ・ババイの統率する
arban qoyarqan kümün bolju üjegdebe 12ほどの人となって見えた
ene araja-yin naiman mingyan bayatur-uud このアルズの8千勇者たちが
qoyar anggi boluyad qubiyaydaysan 2つになって分かれた
altan çegeji babai-yin アルタン・チェージ・ババイの
tolayıylaysan bayatur-uud 統率する勇者たちが
arban qoyarqan kümün bolju 12ほどの人となって

第10章においては〔10〕～〔12〕の3箇所“12勇者”が現われている。

〔10〕 第10章198頁上段1～8行目

冒頭の叙述部分で用いられている。

arban dabqur 10層の
altan çarlig bambalai dotura 黄金で網目模様にしてある宮殿のなかに
aldar noyan jingyar tolyayılaysan 御領主ジャングル様の統率する
aqamad arban qoyar 年長の12
abaya bayatur ni sayuysan オジ勇者が座している
araja-yin naiman mingyan bayatur-tai-ban アルズの8千勇者と共に
küür küünidügen kiged 談笑して
sayuju bayitala ni 座していると

〔11〕 第10章199頁下段16～27行目

アルタン・チェージがジャングルに敵のハラ・キナス・ハーンからアラク・ツァーガンという勇者が攻撃してくる旨を奏上すると、ジャングルが8千人の勇者に問いかける。しかし返答する者が出てこない。これをみてホンゴルが立ち上がって言う発話のなかで用いられている。

aru bumba-yin orun-ıyan アル=ボムビーン=オロンを
yayakiju dayılayuluna? どうして攻めさせてなるものか?
aldar jingyar ジャングル様
arban qoyar abaya-yi 12オジを
yayakiju oljalayuluna? どうして占拠させてなるものか?
tere tuqai-du それに関して
asar ulayan qongyur bi アサル・オラーン・ホンゴルたる俺は
aray ulayan külüg-tei アラク・ウラーン駿に乗っている

arslang-un köbegün 獅子の息子
 aray çayan-tai アラク・チャガンと
 erkilüйдү mönggүн çayan ayula-yin eligen-dü エルキルト・ムンゲン山の山腹で
 kücün čidal-ıyan üjelčene bi! geju 力を試しあおう俺は、と言って

〔12〕 第10章210頁上段21～26行目

瘦せた2才馬に乗ったある少年が、ホンゴルをアラグ・ツァガン勇者が捕虜にしたと叫んで天窓枠を抜けて飛んでいく。これをグゼーン・グンベという勇者がジャンガルたちに伝えた次の場面で用いられている。

aldar noyan jingyar ni tolyayılaysan 御領主ジャンガル様の統率する
 arban qoyar abaya ni 12オジが
 araja-yin naiman tümen アルズの8万³⁵⁾
 mingyan baytur-uud ni 千勇者たちと
 tung tay čiy boluyad 押し黙って
 gölildüged sayuba. 目をキョロキョロさせて座っていた

第11章においては〔13〕～〔19〕の7箇所にも“12勇者”が現われている。

〔13〕 第11章232頁下段7～15行目

ジャンガルの発話のなかで用いられている。

-aqamad arban qoyar bayatur mini 年長の12勇者よ
 araja-yin naiman mingyan bodung-uud mini アルズの8千猪たちよ
 aranjal jegerde külüg mini アランザル・ゼールド駿馬よ
 qurdun čoyılam çay-tu 速くて馬群から抜け出ていくような時期に
 aldar jingyar bi ジャンガル様たる俺は
 baya düübür çay-tu まだ幼いとき
 naiman tümen naiman mingyan 8万8千
 naiman mingyan yirtinčü-yin nutuy-i 8千世界の地を
 erken qaliyaju yabutala mini 見張っていると

〔14〕 第11章235頁下段13～23行目

ドゥンシュール・ゲレル・マンガスが強力な使者を派遣するようだというジャンガルの発話に対して勇者たちが沈黙するなか、ホンゴルがジャンガルにその使者を捕らえてくると豪語する場面で用いられている。

doysin sira mangyus qayan-u köbegün 荒ぶるシャル・マンガス・ハーンの息子
 yučin doluyan nasutai 37歳の
 düngsiyur genel mangyus qayan-i ドゥンシュール・ゲレル・マンガス・ハーンを

doysin sira mangγus qayan-i 荒ぶるシャル・マンガス・ハーンを
aldar jingγar čima-dayan mörgügüged ジャングルお前様に膝まつかせ
arban qoyar abaya-dayan üjegüged 12オジに見せて
araja-yin naiman mingγan bayatur-uud tayan アルズ酒の8千勇者たちのところに
abču irejü öggüdeg 引き連れてやる
kümün bi! geged 人間は俺だ、と言って
ald čayan qaday-i 一尋の白い儀礼用絹布を
bariγsan čay-tu 手渡したとき

〔15〕 第11章236頁下段4～12行目

アルタン・チェージが敵の荒ぶるシャル・マンガス・ハーンを倒すと言うホンゴルを諫めようとするのに対してホンゴルの言う発話のなかで用いられている。

asar ulayan qongγur bayatur boluyad アサル・オラーン・ホンゴル勇者および
araja-yin aldar jingγar boluyad アルズ酒のジャングル様および
araja-yin naiman mingγan bayatur アルズ酒の8千勇者
aqamad arban qoyar 年長の12
abaya-dayan kelen bayiba オジに言っていた
-töbsin sirki-yin ači gejü トップシン・シルキの男系孫だと
keledeg ese bile či? 言っていたではないか、お前は？
töbelgedü temür qayan-u jige gejü トゥベルゲト・トゥムル・ハーンの女系孫だと
keledeg ese bile či? 言っていたではないか、お前は？

〔16〕 第11章242頁上段1～7行目

ホンゴルが敵の荒ぶるシャル・マンガス・ハーンを生け捕りにしてくると言ってジャングルと12オジに儀礼用絹布を捧げる場面で用いられている。

erengge-yin qara bišimuud-un qabtaya-ača ラマの内着の（ような錦地の？）黒長裾上衣のポケットから
zandan čayan qaday-uud-i yaryayad 白檀（のように香りのよい？）白色の儀礼用絹布を取り出して
aqamad arban qoyar abaya-dayan 年長の12オジに
delgüü bariju ireged: 半尋に折って捧げに来ると
-aranjal jegerde küüg-i アランザル・ゼールド駿馬を
abču ireged toqu! geged 連れてきて馬具をつけろ、と言って

〔17〕 第11章244頁上段9～23行目

ホンゴルが出陣前に言う発話で用いられている。

jirγalang-tai 楽しい
aru bumba-yin orun gedeg-i アル=ボムビーン=オロンというのを

asar ulayan qongyur gedeg nere-yi アサル・オラーン・ホンゴルという名を
 altan delekei-yin orun-du この黄金たる世界の国に
 qola yajar-tu sonusuydayad 遠方まで聞こえて
 oyiraqan yajar-tu 近隣では
 üjeggedeg bayiysan その姿がみられた
 aldar noyan jingyar-un-kin bile 御領主ジャンガル様のところの者である
 egün-dü yamar činegen [したがって] どれほどの
 küčün čidal-tai bolbaču 力があったとしても
 aldar noyan jingyar mini bayina 御領主ジャンガル様がいる
arban qoyar abaya mini bayina 12オジがいる
 araja-yin naiman mingyan アルズ酒の8千
 bayatur-uud mini bayina 勇者たちがいる
 nadadu ayuyad čočiday 俺に恐れおののく [ような]
 yamar yayuma bayiqu bui! geju keleged どんなものもあるものか、と言って

[18] 第11章244頁上段27行～下段12行目

[17] に近接しているホンゴルの発話のなかで用いられている。

düübür mönggün köbčüg degere-ben 極上の銀（飾りのついた？）鞍敷布団の上に
 alya-ban delgeged: 掌を広げて
 -šuyur mönggün altan jiloyu-yi 珊瑚と金銀（の飾りのついた？）手綱を
 gederkü ergigülüged 反対側にまわして
 aldar jingyar ジャンガル様
arban qoyar abaya 12オジ
 araja-yin naiman mingyan bayatur-uud mini アルズ酒の8千勇者よ
 ali taba-bar-iyen ゆっくりと
 jiryalang-un ekin-dü 楽しみごとのはじめに
 jira qonuyad 60日過ごして
 nayir-un ekin-dü 宴のはじめに
 naya qonuyad 80日過ごして
 dayulaldun nayirlan bayiju bayiyun! みなで歌い宴をつづけていなさい！

[19] 第11章261頁上段7～21行目

ホンゴルの配下になったエグデック・ツァガーン勇者が味方の勇者たちにホンゴ
 ルに従うように勧める発話のなかで用いられている。

arban üjüg-ün 10方角の
 asar qara mangyus-i アサル・ハル・マンガスを
 beye-degen oruyuluysan 自分の支配下に入れた
 ayuu yeke küčütei 大いなる力をもつ

asar ulayan qongyur アサル・オラーン・ホンゴル
bayatur geju kelene 勇者というのだ
arban mingyan 10千
asar qara mangyus ta nar アサル・ハル・マンガスおまえたち
andayar-iyān ögçü [従うという] 誓いを立て
aldar noyan jingyar-tu 名高き領主ジャングルのもとに
odçu barayalqaju 赴き謁見して
arban qoyar abaya-du ni üjegdejü 12オジにお目見えして
araja-yin naiman mingyan bayatur-tai アルズ酒の8千勇者と
aqa degüü barilduqu-lai boluna geju 兄弟となるならいいであろうと
jegdeg çayan bayatur kelegesen-dü ゼグデック・チャガーン勇者が言う

第12章においては〔20〕の1箇所“12勇者”が現われている。

〔20〕第12章266頁下段5～16行目

冒頭の箇所。ここでは珍しいことに、ジャングル側の立場からではなく、敵側のボル・マンナイがかつてジャングルの父ウズン・アルダル・ハーンを殺し損ねたことに言及し、今やジャングル側は勇者たちを集めて安泰になっているので戦うべきときがきたと言う発話のなかで用いられている。

aldar jingyar gedeg ジャングル様という
altan delekei-yin orun-i ejeleged この黄金の世界の国を支配して
engke jiryal-tai 平安に
möngke nasu-tai 永遠の命をもつ
ene bumba-yin orun-i bayilyayad このボムビーン=オロンを創建して
öber-ün beye ni beye ni 自分自身は、自身は³⁶⁾
asar ulayan qongyur bayatur-iyān jaruyad アサル・オラーン・ホンゴル勇者を招いて
araja-yin naiman mingyan アルズ酒の8千
bayatur-uud-iyān çuylyayuluyad 勇者たちを集めて
aqamad arban qoyar 年長の12
arslang-iyān sayulyayad 獅子を座らせて
ali taba-bar-iyān jiryān bayina. ゆっくりと楽しんでいる

〔21〕第14章307頁上段21～下段3行目

ホンゴルがハーン・シールという新たな味方を引きつけて帰郷すると、ジャングルがいない。これはホンゴルの不在中にアルワン・ゴルワン・ソヨートとアルワン・ゴルワン・トルゴイトという敵の勇者が2人来て、ジャングルたちがこれらの敵と戦っていたからである。この事情について述べた箇所で用いられている。

arban üjüg-ün 10方角の
 asar qara mangyus-uud-i uduriduysan アサル・ハル・マンガスたちを指揮している
 arban yurban soyuyatu アルワン・ゴルワン・ソヨート³⁷⁾
 arban yurban tolyayitu gedeg アルワン・ゴルワン・トルゴイト³⁸⁾ という
 bayatur-uud ireged 勇者たちが来て
 aldar jingyar tolyayilaysan ジャンガル様の統率する
 araja-yin naiman mingyan bayatur-uud アルズ酒の8千勇者たち
aqamad arban qoyar arslang-uud 年長の12獅子たち
 egün-tei dayilaldayad これらと戦って
 kegere yarçu oduysan bolba 草原に出て行ったのであった

第15章においては〔22〕～〔25〕の4箇所にも“12勇者”が現われる。

〔22〕 第15章313頁下段5～19行目

敵側の描写から始まる冒頭部。右側の最初の席に座ったインデレイ・ツァーガン・ウブゲンにエルゲー・ムンゲン・テベク・ハーンが語りかける発話のなかで用いられている。

mini abu mini 俺の父は
 örügün naran yarçu bayitala 朝、太陽が出る頃
 üjüng aldar qağan-u-du oduyad ウズン・アルダル・ハーンのところに赴いて
 asqan naran sayutala 夕方、太陽が沈む頃
 qonuy kiged 1日ばかりで
 abuyad iregsen bile [ウズン・アルダル・ハーンを] 連れてきた
 bi aldar noyan jingyar-un-kin-i 俺は御領主ジャンガル様のところの者を
 asar ulayan qongyur köbegün アサル・オラーン・ホンゴル息子 [という]
 bayatur-i ni oljalayad 勇者を支配に入れて
arban qoyar bayatur-uud-i ni dayjiyuluyad 12勇者たちを震え上がらせて
 aldar jingyar-un-kin-u ジャンガル様のところの者の
 aru bumba-yin orun-i アル=ボムビーン=オロンを
 mini abu qonuy kiged 俺の父は1日ばかりで
 abuyad iregsen bolqula 連れてきたのなら
 bi üde kiged 俺は半日で
 abuyad irene bi geged 連れてくるよ俺は、と言って

〔23〕 第15章322頁下段18～323頁上段1行目

ジャンガルはアトハル・ハル・フブーンが自分の不在中に生まれた息子であることをアルタン・チェージより聞き、息子を連れてこさせてアルタン・チェージに名前を乞う場面で用いられている。

aldar jingyar ジャンガル様
atuqar qara köbegün-ü アトガル・ハル・フブーンの
čingya čigireg bayatur-tu ni baqaduyad 凜々しい勇者に満足して
-araja-yin naiman mingyan bayatur mini アルズ酒の8千勇者よ
asar ulayan qongyur mini arban アサル・オラーン・ホンゴルよ, 10
aqamad arban qoyar abaya mini 年長の12オジよ
ene atuyar qara köbegün-dü このアトガル³⁹⁾・ハル・フブーンに
nere öggügtün! geju 名前を授けたまえと
aldar jingyar kelegesen-dü ジャンガル様が言うと
altan čegeji babai ni köngginen kelen bayiba アルタン・チェージ・ババイが咳払いをして言う

[24] 第15章323上段27～下段6行目

アルタン・チェージからアトガル・ハル・フブーンという名を授けられたジャンガルの息子が発言する場面で用いられている。

-aldar noyan jingyar abu mini 御領主ジャンガル父様よ
araja-yin naiman mingyan bodung-uud mini arban アルズ酒の8千猪たちよ, 10
aqamad arban qoyar abaya mini 年長の12オジよ
asar ulayan qongyur mini アサル・オラーン・ホンゴルよ
altan čegeji babai abaya mini アルタン・チェージ・ババイ・オジよ
mini emüsdeg jöbtei 俺の着るべき
qobčasun qamiya bayina? 服はどこにある?

[25] 第15章326頁上段10～19行目

アルタン・チェージにもつべき武器の種類を聞いたジャンガルの息子アトガル・ハル・フブーンは、白檀で作った武器——これをもってエルゲー・ムンゲン・テベク征伐に向かおうとしている——を用意してジャンガルの宮殿に戻ってきて発話する場面で用いられている。

altan čarliy bambalai-du 黄金の網模様の宮殿に
kürčü ireged: やってきて
-aldar jingyar tolyayilayšan ジャンガル様の統率する
araja-yin naiman mingyan bayatur アルズ酒の8千勇者
arban qoyar abaya 12オジ
asar ulayan qongyur mini アサル・オラーン・ホンゴルよ
amur taba-bar-ıyan sayuju ゆっくりと座って
bayičayatun! geged おられよ, と言って
atuyar qara köbegün アトガル・ハル・フブーンが
doldoi⁴⁰⁾ jegerde ajıraya degere-ben unuyad ドルドイ・ゼールド種馬に乗って

第16章においては“12勇者”が一度も現われない。

最終章である第17章には〔26〕～〔44〕の19箇所“12勇者”が現われている。

〔26〕 第17章360頁上段15～26行目

ジャンガルが勇者たちに呼びかける冒頭の場面で用いられている。

naiman költei 8本脚の
 naγar altan sirege degere-ben ナガル⁴¹⁾ 黄金の玉座に
 aldar jingγar ni sayuju bayiyad ジャンガル様が座っていて
 -aqamad arban qoyar arslang mini 年長の12獅子よ
 araja-yin naiman mingγan bayatur-uud mini アルズ酒の8千勇者たちよ
 ayuu yeke kücütei 偉大なる力強き
 asar ulayan qongγur mini! アサル・オラーン・ホンゴルよ
 bi ta nar-tu 俺は貴方方に
 önüdür edür 今日という日
 keledeg bolba geju 言うことになった、と言って
 aldar jingγar ni ジャンガル様が
 kelen bayiba 語っている

〔27〕 第17章360頁上段27行目～下段9行目

〔26〕に近接する、ジャンガルの発言を待ち受ける人々の反応の描写で用いられている。

araja-yin naiman mingγan bayatur-uud ni アルズ酒の8千勇者たちは
 tay čig boluyad 押し黙って
 aqamad arban qoyar 年長の12
 arslang-uud ni čingneged⁴²⁾ 獅子たちが耳をすまして
 asar ulayan qongγur ni アサル・オラーン・ホンゴルが
 yayun boluyad odba geju どうなってしまったのだと
 asar ulayan qongγur ni アサル・オラーン・ホンゴルが
 boduyad sayuju bayitala 考え込んで座っていると
 aldar noyan jingγar ni 御領主ジャンガル様が
 jarliγ bolun bayiba: 命令をしている

〔28〕 第17章361頁上段8～22行目

〔27〕の後続の部分、ジャンガルの発話のなかで用いられている。

arban üjüg-ün 10方角の

qouratan dayisun-i daruyad 害敵を征伐して
aldar jingyar gedeg nere-yi ジャンガル様という名を
araja-yin naiman minyan bayatur アルズ酒の8千勇者
asar ulayan qongyur アサル・オラーン・ホンゴル
arban qoyar arslang-un kücü-ber 12獅子の力で
aldar jingyar gedeg nere-yi abuyad ジャンガル様という名を取って
aru bumba-yin orun-i アル=ボムビーン=オロンを
engke jiryal-tai 平安に
… (略) …
bayilayayad irele bi してきたのである俺は

〔29〕 第17章361頁下段10～21行目

ジャンガルが、今や自分は古い、アルタン・チェージがだんだんと物忘れがひどくなり、アバイ・ゲレル后が婆さんになったので、自分はアリオン・タリヤランの場所に行くのがよいと言いつつ場面で用いられている。なお、アリオン・タリヤランとは直訳すると「清らかな穀物」の意であるが、ここでは意味不明。この章ではジャンガルたちと息子たちの世代が交代する内容をもっていることを考えれば「死の国」という意味で解してよいかもしれない。だがもともとジャンガルのアル=ボムビーン=オロンは夏も冬もなく、人々が常に25歳のままであると謳われることを考慮に入れると矛盾することになる。

aldar jingyar bi ジャンガル様たる俺は
ariyun tariyalang-un orun-dayan アリオン・タリヤランの場所に
odday jöbtei bolba geju 赴くのがよいと思うと
aldar jingyar ni ジャンガル様が
arban yurban soyuqa ni tačiginayad 13の牙をきりきりさせて
asar qara nidün ni büriyegčireged 大きな黒目をとろんとさせて
aldar jingyar ni ジャンガル様が
jarliq bolun bayiba 命令を出している
aqamad arban qoyar arslang boluyad 年長の12獅子と
araja-yin naiman mingyan アルズ酒の8千
bayatur-uud ni boluyad 勇者たちと
tung tay čig boluyad sayuba 押し黙って座っていた

〔30〕 第17章363頁上段6～18行目

ホンゴルがジャンガルに語りかけている発話のなかで用いられている。

arban üjüg-ün 10方角の
qouratan dayisun-i daruyad 害敵を征伐して
aldar jingyar ジャンガル様が

aru bumba-yin orun-u tölüge アル=ボムビーン=オロンのために
 toyalal-ügei çabçiysan 無数に切りつけた
 toljai mini bum saya kürbe 首は10億, 100万人に及んだ
 egün-i これを
 aldar jingyar boluyad ジャンガル様と
 arban aqamad arban qoyar abaya mini 10年長者12オジよ
 ene kigsen kelegesen kilinçe-eče この行為と言葉の罪から
 namayi getülgejü öggügtün! 俺を救い出してくれ!

[31] 第17章364頁上段21～下段8行目

アルタン・チェージの発言とそれに対する勇者の描写の中で用いられている。

odu aldar jingyar 今やジャンガル様
 asar ulayan qongyur アサル・オラーン・ホンゴル
 ta qoyar-i dayayad 貴方がた2人の後にしたがって
 degedü-yin ariyun tariyalang-du 上のアリオン・タリヤランに
 odday jöbtei bile bi! geju 赴くのがよいと思う俺は、と
 altan çegeji babai ni アルタン・チェージ・ババイが
 köngginen kelen bayiba 咳払いをして言っていた
 aqamad arban qoyar bayatur-uud 年長の12勇者たちが
 daraya daraya-bar 次々に
 jöb uçir-iyen keleged それが正しいと言って
 aldar jingyar ジャンガル様と
 asar ulayan qongyur qoyar-i dayayad アサル・オラーン・ホンゴルの2人にしたがって
 ariyun tariyalang-un orun-du アリオン・タリヤランの国に
 odday jöbtei bile biden geju 赴くのがよいと思う我々はと
 yarjingnan şuugilduysan çay-tu 我も我もと身を乗り出して騒々しくしていたとき

[32] 第17章364頁下段9～16行目

[31] に後続する勇者たちの描写の中で用いられている。

naiman mingyan bayatur-uud ni çu 8千勇者たちも
 arban yurban soyuya ni qargiyad 13の牙がきりきりと歯ざしりして
 asar qara nidü ni büriyegçireged 大きな黒目がとろんとなって
 aldar noyan jingyar-un-kin 御領主ジャンガル様のところの者が
 jobalang jiryalang-i könidüged 喜びと悲しみについて話し合っ
 arban aqamad arban qoyar bayatur-tai-ban 10年長者12勇者とともに
 aldar jingyar-tai-ban ジャンガル様と共に
 sayuju bayitala 座っていると

〔33〕 第17章364頁下段17～365頁上段3行目

通訳ヘー・ジルビンの発言に対してジャングルと12勇者たちが発話する場面で用いられている。

moyai kele-ber qadqun keledeg 蛇の舌で刺して語る
modun kele-ber tayşin keledeg 木の舌で痛いように語る
aldar noyan tariyaçin köbegün 名高き領主，農民の息子
jarýu-yin noyan 裁判官の領主
jilbing mededeg ジルビンが管轄している
tarni-yin ýurban tülkigür-tei 陀羅尼の3つの鍵をもっている
yeren yisün nasutai 99歳の
yindirei çayan ebügen öggügsen インデレイ・チャガン・ウブゲンが与えた
altan bars sira çoqur qayırçay-un 黄金の虎の黄色の縞の箱の
ama-yi seküdeg bolba geju 蓋を開ける段になったと
jilbing kelegesen-dü ジルビンが言うと
aldar noyan jingyar ni 御領主ジャングル様が
arban qoyar bayatur-uud ni: 12勇者たちが
-odu sekü! gesün-dü さあ開けろ，と言うと

〔34〕 第17章365頁上段12～18行目

通訳ヘー・ジルビンが陀羅尼の3つの鍵を読んで息を吹きかけたとき，金虎の黄縞の蓋が開かれようとするのと同時に，金属的な声を出して言う発話のなかで用いられている。

-ene naradu yirtinçü-yin yayuma-i この陽のあたる世界のものを
yayuma üledegel-ügei 何をも残さずに
luý-i ni keleged bayiba あらいざらいを話している。
aldar noyan jingyar tolyayılaysan 御領主ジャングル様の統率する
arban qoyar bayatur-uud 12勇者たち
sidün ni burçay⁴³ boluyad (歯が欠けて)豆粒ようになって
silüsün ni burantay boluyad irebe. 涎がラクダの口綱の細い紐のように垂れている

〔35〕 第17章370頁下段22～371頁上段2行目

ホンゴルの息子ホション・オラーンがゴンドハン・ハル・スヌンケイという敵のところに行くと言ってジャングルの宮殿に再度入ってきたさいに，ヤスン・エルーケン・パートルがホション・オラーンに言う発話のなかで用いられている。

yasun ereüken bayatur ni ヤスン・エルーケン・パートルが
edüge çü qayikiruyad kelege-tei 今でも叫び声で言うには
aldar jingyar arba ジャングル様，10
aqamad arban qoyar abaya 年長の12オジ

araĵa-yin naiman mingyan bayatur-uud アルズ酒の8千勇者たち
 nidü-ben aniju orkiysan 目を閉じて
 yayakiqiu-yin ču arya ügei boluysan どうなっても仕方がなくなった
 sonusuysan sayuysan bayina. 聴いて座っている

[36] 第17章371行目上段15～27行目

[35] の後続部分。

ホンゴルの息子ホション・オラーンが前にたちはだかつて言う発話のなかで用いられている。

aldar noyan jingyar-un 御領主ジャンガル様の
 araĵa-yin naiman mingyan bayatur-un dotura アルズ酒の8千勇者のなかで
 ali taba-bar-iyān ゆっくりと
 jiryaju bayiyad 楽しんでいて
 jobalang ireküle 苦しみが来れば
 jobalang dayaju yadayad 苦しみを持ちこたえることができず
 jiryal ireküle 楽しみが来れば
 jiryal dayaju yadayad 楽しみを持ちこたえることができず
 aqamad arban qoyar abaya boluyad 年長の12オジと
 aldar jingyar boluyad ジャンガル様と
 araĵa-yin naiman mingyan bayatur-uud-tu mini アルズ酒の8千勇者たちに
 yayun geged čalciju bayina či! ged 何を無駄口をたたいているんだお前は、と
 arban tabun luu-yin dayun yaryuad 15(頭の?) 龍の声を出して

[37] 第17章372頁下段1～14行目

敵陣に出発する前にホンゴルの息子ホション・オラーンが言う発話のなかで用いられている。

bayan ayil-un qotan-u tözütei 豊かな家の羊の柵に似た
 balbar ulayan alaya-bar-iyān 大きな赤い掌を
 qoyuru-ban tatan iliged 指を折りたたんで撫でて
 aldar noyan jingyar 御領主ジャンガル様
 aqamad arban qoyar bayatur 年長の12勇者
 araĵa-yin naiman mingyan bayatur-uud ni アルズ酒の8千勇者たちが
 nidü-ben seküged 目を閉じて
 yarjingnan šuugilduyad 我も我もと身を乗り出して騒々しくして
 -aldar noyan jingyar-un-kin-du 御領主ジャンガル様の者のなかで
 abu-ača köbegün 父から息子が
 törüne gedeg ene! 生まれると言うのはこのことだ!
 aladar noyan jingyar-un 御領主ジャンガル様の

ataya mörüi-yi 恨みを
aldaqusi gedeg ene! ged そのままにしておかないというのがこれだ！と言って

[38] 第17章380頁下段4～11行目

ホンゴルの息子ホション・オラーンがスヌンケイという敵を殺して、その地の王を治めるハーンとしてある少年を見出し、この少年に言う発話のなかで用いられている。

altan gedeg qayan čimadu kelekü-dü 「アルタン」というハーンのお前に言うと
aldar noyan jingyar mini 御領主ジャンガル様が
arban qoyar 12
aqamad arban qoyar abaya mini 年長の12オジが
čayan sara-yin 正月の
arban jiryuqa ni gedeg edür 16日という日に
ariyun tariyalang-un orun-du アリオン・タリヤランの国に
odday jöbtei bile 赴くのがいいと思う

[39] および [40] 第17章382頁上段8～13行目

スヌンケイがジャンガル側にやってくる、人質を要求する場面で用いられている。なお、[39]と[40]は近接しているので一緒に記述する。

aldar noyan jingyar-un-kin-du ジャンガル様のところの者に
aqamad arban qoyar bayatur-un 年長の12勇者の
arban yurban qas egüde-yi tatajad 13の玉の扉を開けていって
arban qoyar bayatur 12勇者
arban qoyar ebügen bayatur-tu 12老勇者のもとに
oruyad kürčü ireged 入ってきて
nige le yar-iyar-iyar ただその一本腕で
barayun yar-iyar-iyar その右腕で
tataju abču ireged 引っ張って
barayun ebüdeg dour-ban ebüdügleküle 右膝の下に組み入ると
qara šaba čisu-bar 黒い傷（から出る）血を
bögeljiged bayiba gene 吐いていたという

[41] 第17章382頁上段21行目～下段9行目

[40]の後続する場面の描写用いられている。

tegejü bayitala そのとき
naiman köl-tei 8本足の
nayar altan sirege-degere ナガル黄金の玉座に座った

aldar noyan jingyar ni 御領主ジャンガル様が
 bayiju bayiyad jalayu jalayu そのままの状態で、若い若い⁴⁴⁾
 -kümün-eče köbegün törüdeg yum 人から若造は生まれるものだ。
 kümün bisi yayuma 人ではない（ものが）
 yaryadaγ yum bisi 出てくるわけではない。
 ergigüü mungqay! トチ狂った馬鹿者が！
 üküjü bayiya 死にかけている
arban qoyar bayatur-iyar 12勇者で
 yaγu kine çi? どうするつもりだ、お前は？
 öggüdeg yaγuman çini bayiqula （俺がお前に）やるものがあるのなら
 ög! köbegün geγü やれ、若造よ、と
 aldar noyan jingyar keleküle: 御領主ジャンガル様が言うと

[42] 第17章388頁上段1～7行目

ジャンガルの世代とジャンガルの息子の世代が交代することに言及している場面で用いられている。

qušiyun ulayan-u ホシヨーン・オラーンの
 amin sakiγul boluyad bayatur 命の護り神となって勇者⁴⁵⁾
 aldar jingyar-un köbegün ジャンガル様の息子
 bayatur qara jilya bayatur boluna パートル・ハル・ジルガである
 bisingki⁴⁶⁾ altan çegeγi babai それ以外の(?)アルタン・チェージ・パバイ
arban qoyar bayatur-un sayuri-du ni 12勇者の座席に
 beye beye-yin-kin köbegün ni sayuna それぞれの息子が座った

[43] 第17章388頁上段27～下段5行目

ジャンガルたち老世代が正月の16日目にタリヤランの場所へ行くという叙述で用いられている。

çayan sara-yin 正月の
 arban jirγuya ni gedeg edür 16日という日に
 aldar boγda noyan jingyar tolyayilaysan 聖主ジャンガル様の統率する
arban qoyar bayatur ni 12勇者が
 örügün üde-yin aldan-du 朝と昼の頃に
 tariyalang-du tayalaba タリヤランに赴いた

[44] 第17章388下段6～15行目

[43] に後続する部分。

ジャンガルたち老世代が一斉にタリヤランの場所へ行ったという描写で用いられ

ている。

egün-dü ここに
 bayıqu dörben tib-ün yirtinçü 存在する4大陸の世界
 aldar noyan jingyar-yin-kin 御領主ジャングル様のところの者が
 ter keb-tegen そのまま
 ene arban qoyar bayatur-tu この12勇者に
 aldar noyan jingyar-tayan-ıyan 御領主ジャングル様に
 ariyun tariyalang-un orun-du oduysan アリオン・タリヤランの場所に赴いた
 yeren yisün nasutai 99歳の
 yindirei çayan ebügen jarlayad インディレイ・チャガーン・ウブゲンが公布して

以上、アリンピルの17章本には〔1〕～〔44〕の計44箇所に“12勇者”が現われているということになる。

7 新疆ジャングルにおける“12勇者”の用法

7.1 具体的に表現されている“12勇者”

アリンピル氏のテキストで現われている“12勇者”を整理すると，“12勇者”には「勇者」を意味する「バトルbayatur」のほか、「人」を意味する「クムnkümün」, 「獅子」を意味する「アルスラン arıslang」, 「父方のオジ」を意味する「アバガ abaya」という語が用いられていることが観察される。現われる表現をすべて書き出してみると表10のようになる。カギ括弧内のuudは複数形の接尾辞であり、事例でみたように付加される場合とない場合がある。最も多くみられた事例は下線で強調した。ただし、「オジ abaya」と「勇者 bayatur」が同時に現われている「年長の12オジ勇者 aqamad arban qoyar abaya bayatur」は「オジ abaya」を重視して「オジ abaya」の表現に数えた。なお、訳語はできる限り直訳に努めたことを断っておく。

表10 アリンピルの17章本における“12勇者”の具体的表現

“勇者”の表現	“12勇者”の表現	事例数	小計
bayatur	12勇者〔たち〕arban qoyar bayatur〔uud〕	8	14
	年長の12勇者aqamad arban qoyar bayatur〔uud〕	4	
	12勇者12老勇者arban qoyar bayatur arban qoyar ebügen bayatur	1	
	10年長者12勇者arban aqamad arban qoyar bayatur	1	

kümün	12ばかりの人arban qoyarqan kümün	2	2
arslang	12獅子arban qoyar arslang〔uud〕	1	10
	年長の12獅子aqamad arban qoyar arslang〔uud〕	8	
	12年長者12獅子arban qoyar aqamad arban qoyar arslang	1	
abaya	12オジarban qoyar abaya	7	18
	年長の12オジaqamad arban qoyar abaya	4	
	年長の12オジ勇者aqamad arban qoyar abaya bayatur	1	
	10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya	5	
	12年長者12オジarban qoyar aqamad arban qoyar abaya	1	

表10の表現で奇妙に思われるのは、bayaturの項目の3番目にある「12勇者12老勇者arban qoyar bayatur arban qoyar ebügen bayatur (1例)」、同じくbayaturの項目の4番目にある「10年長12勇者arban aqamad arban qoyar bayatur (1例)」、arslangの項目の3番目の「12年長者12獅子arban qoyar aqamad arban qoyar arslang (1例)」、abayaの項目の4番目の「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya (5例)」、同じくabayaの項目の5番目の「12年長者12オジarban qoyar aqamad arban qoyar abaya (1例)」といった表現である。1事例のみあるものを例外とみなすと、5例出現しているabayaの項目の4番目の「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya」という表現を検討する必要があることになる。

「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya」は、「オジabaya」を伴う諸表現のひとつであるが、この事例をよくみると、その3例は「10arba (n)」と「年長の12オジaqamad arban qoyar abaya」の2行に分かれていることが観察される。このような叙述の仕方は、「年長の12オジaqamad arban qoyar abaya」というべきところを言い間違えたという可能性を示しているように思われる。もしそうであるとすると、「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya (5例)」という表現は、abaya (オジ) を用いる表現のうちの「年長の12オジaqamad arban qoyar abaya (4例)」に準じる事例ということになる。

問題は、なぜ「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya (5例)」というような奇妙な表現となったかということである。これは次のように考えられる。まず、「オジabaya」の用いられる事例すべてをみると、「12オジarban qoyar abaya (7例)」という表現の頻度が多い。この事実から、「12オジarban qoyar abaya (7例)」という安定した表現があって、この表現に「年長」もしくは「年長者」という意を表すaqamadという語が付加されるときにもこの表現がまず発話されてしまう傾向があり、その結果「10年長者12オジarba (n) aqamad arban qoyar abaya (5例)」という奇妙な表現になっ

てしまうのではないかと推測される。つまり、「12オジ arban qoyar abaya (7例)」に影響されて、「12 arban qoyar」の最初の語すなわち数字の十の位である「10 arban」が「年長のaqamad」という語よりも前に出てきてしまうということである。

以上のように説明できるとすれば、「オジ abaya」の代わりに「勇者 bayatur」という語が用いられている「10年長者12勇者 arban aqamad arban qoyar bayatur (1例)」という表現も同様に説明することができる。すなわち、「12勇者 arban qoyar bayatur」という安定した表現があるために、「年長の aqamad」という語が付加される場合に、「12勇者 arban qoyar bayatur」の最初の語「12 arban qoyar」の十の位である「10 arban」が先に発音されてしまったということである。

残る例外2つも同様に説明できる。そのひとつは、「オジ abaya」の項目の最後の「12年長者12獅子 arban qoyar aqamad arban qoyar arslang (1例)」である。この場合、「年長の12獅子 aqamad arban qoyar arslang」と言うつもりであったのを、「年長の aqamad」よりも先に「12獅子 arban qoya arslang」の「12 arban qoyar」を言ってしまったということである。もうひとつは、bayaturの項目の3番目の「12勇者12老勇者 arban qoyar bayatur arban qoyar ebügen bayatur (1例)」という表現であるが、これは前者の変形と解することができる。

こうした理解にもとづけば、「10 arba (n)」と「年長の12オジ aqamad arban qoyar abaya」とが1行内におさまっている事例——すなわち表記上において完全に一塊の句になっている事例——が2例みられるが、これらは言い間違えとみなすことになる。

以上の44事例から、“12勇者”の表現は次のように形式化して表すことができる。

$$[\text{aqamad}] \text{ arban qoyar} \left\{ \begin{array}{l} \text{bayatur}[\text{uud}] \\ \text{arslang}[\text{uud}] \\ \text{abaya} \end{array} \right\}$$

[] 内の語は場合によって付加されたりされなかったりするという意味である。また、{ } 内はそこに列挙された語群のひとつが選択されるということを意味している。形式化されたことで注意を引くのは、「オジ abaya」には複数形の[uud]が付加されることがないという事実である。このことには意味があり、それについては後で詳細に触れることになる。

ところで、アリンピルの幾つかの章には、こうした“12勇者”関連の表現が全く現われないということがある。具体的に列挙すれば、第1章～第6章、第13章、第16

章の17章中8つの章である。すなわち、およそ半分の章にしか“12勇者”は出現していないということになる。出現する章ごとの内訳をみると、第7章では3回、第8章では3回、第9章では3回、第10章では3回、第11章では7回、第12章では1回、第14章では1回、第15章では4回、第17章では19回であり、最終章の第17章に集中して出現していることが観察される。第17章以外では第11章に7回とあり2番目に頻度が多い。第17章に集中している理由は、この章においてジャングルをはじめとする老勇者たちが死去するという内容と関わっており、とくにここで語り手が“12勇者”を「12人勇者」と理解していることと関連しているのであろうと推測される。

7.2 章ごとにみた“12勇者”

表10で指摘した“12勇者”の3つのヴァリエーションの現われ方を章ごとに観察すれば、次の表11のようになる。これによって、3つのヴァリエーションが章による違いと関連しているのか、また、ある特定の箇所に見られている表現が次の近接する箇所に影響するのかどうかということを検討してみたい。表中の近似性の項目では、108行以内の間隔で現われている場合に「近」とし、それ以上の間隔で現われている場合に「遠」とした。ただし、ここで108行というのはあくまでも目安のもので、これは1頁1段27行上下段で構成されているテキストの見開き2頁に収まる範囲ということになる。

表 11 章ごとにみた“12勇者”の表現

章	表現		箇所	近似性
7	arslang (獅子)	aqamad arban qoyar arslang-uud	[1]	1と2→近
			[2]	
	bayatur (勇者)	arban qoyar bayatur	[3]	
8	arslang (獅子)	aqamad arban qoyar arslang	[4]	4と5→近
			[5]	
	abaya (オジ)	arban aqamad arban qoyar abaya	[6]	
	abaya (オジ)	aqamad arban qoyar abaya	[7]	
9	kümün (人)	arban qoyarqan kümün	[8]	8と9→近
			[9]	
10	abaya (オジ)	arban qoyar abaya bayatur	[10]	10と11→近
			[11]	
			[12]	11と12→遠

11	bayatur (勇者)	aqamad arban qoyar bayatur	[13]	
	abaya (オジ)	arban qoyar abaya	[14]	14と15→近
		aqamad arban qoyar abaya	[15]	15と16→遠
			[16]	16と17→遠
		arban qoyar abaya	[17]	17と18→近
			[18]	18と19→遠
		[19]		
12	arslang (獅子)	aqamad arban qoyar arslang-uud	[20]	
14	arslang (獅子)	aqamad arban qoyar arslang-uud	[21]	
15	bayatur (勇者)	arban qoyar bayatur-uud	[22]	
	abaya (オジ)	arban aqamad arban qoyar abaya	[23]	23と24→近
			[24]	24と25→遠
	arban qoyar abaya	[25]		
17	arslang (獅子)	aqamad arban qoyar arslang	[26]	26と27→近
		aqamad arban qoyar arslang-uud	[27]	27と28→近
		arban qoyar arslang	[28]	28と29→近
		aqamad arban qoyar arslang	[29]	
	abaya (オジ)	arba(n) aqamad arban qoyar abaya	[30]	
		arba(n) aqamad arban qoyar abaya	[35]	35と36→近
		aqamad arban qoyar abaya	[36]	
		arban qoyar aqamad arban qoyar abaya	[38]	
bayatur (勇者)	aqamad arban qoyar bayatur-uud	[31]	31と32→近	
	arban aqamad arban qoyar bayatur	[32]	32と33→近	
	arban qoyar bayatur-uud	[33]	33と34→近	
		[34]		
	aqamad arban qoyar bayatur	[37]		
		[39]		
	arban qoyar bayatur arban qoyar ebügen bayatur	[40]	39と40→近	
	arban qoyar bayatur	[41]	40と41→近	
		[42]	41と42→遠	
		[43]	42～44→近	
		[44]		

3種類の“12勇者”の現われ方について以上からいえることは、それが章ごとに異なるわけではないということである。ただし、同じ表現が2回以上存在する場合、それらが位置的に近接している頻度は高い。これは、一度口にした表現が次に影響して現われる傾向が存在するというを示している。しかし、19事例という最も多い

事例をもつ第17章をみると、単数・複数といった微妙な違いを入れれば12種類も存在しており、この事実をみれば、章ごとに一律の表現の仕方があるわけではないといわねばならない。

7.3 数詞とは異なる“12勇者”の「12」

前述のように、アリンピルのテキストにおける“12勇者”という表現について、第1章—厳密に言えば《ジャンガルの最初の章 *jingyar-un ekin bülüg*》—以外に12人の勇者の名前がすべて語られることは一度もない。この事実は、一般に自明とされている“12勇者”の「12」を「12人」というような人数を表す数詞として理解することが果たして妥当かという疑問を引き起こしている。これと関連づけて述べるなら、次のような事柄に注意すべきであろう。

それは、もし“12勇者”を「12人の勇者」と解するのであれば、ホンゴルという勇者が自分以外の勇者たちに言及する場合、彼は「11勇者」と発言しなければならないということである。しかし、ホンゴルが「11勇者」という表現を用いることは一度もなく、常に“12勇者”という表現が用いられていることが観察される。具体的にこうした事例を挙げるなら、[6], [7], [11], [14], [15], [16], [17], [18], [30]の9例ということになる。なお、これらの事例における“12勇者”の「勇者」にはすべて *abaya* (オジ) という語が用いられており、*bayatur* (勇者) や *arslang* (獅子) は用いられていない。

ホンゴル以外では、アルタン・チェージの発話のなかにおいて、“12勇者”という表現が用いられている [31] のような事例がある。アルタン・チェージが前述のとおり右の座席の第1席に座っている勇者として安定していることを考慮すれば、この場面でアルタン・チェージ本人が語った発言に賛同した勇者は「11勇者」のはずであるが、「年長の12獅子」となっている。

発話者が“12勇者”に言及するために発話者自身が“12勇者”の「12」に含まれなくなる事例は、ホンゴルやアルタン・チェージのほか、タルガン・ゲンベ（もしくはグゼーン・ゲンベ）という勇者やボル・マンナイという勇者にも事例が認められる。前者の事例は [4] と [5]、後者の事例は [20] である。序章（第1章）の席次において、タルガン・ゲンベが右の第2席、ボル・マンナイが右の第4席にそれぞれ座る勇者であると紹介されていることを考慮すれば、“12勇者”の「12」が「12人」である場合、「11人」となる箇所であるが、ここでも“12勇者”の表現が用いられている。ちなみに、事例における“12勇者”の「勇者」にはすべて *arslang* (獅子) が用

いられている。

以上が、序章（第1章）の12人の席次に登場している勇者の発話のなかに現われる“12勇者”の表現例である。このほか、状況的に「12人」と叙述すべきではない〔2〕、〔12〕、〔21〕、〔31〕においても、“12勇者”が用いられている。〔2〕では、ホンゴルの婚姻を勇者たちが賛同する場面であり、この場合、断定はできないながらも、ホンゴル本人と一緒に賛同したとは考えられないため、12人のなかにホンゴルを入れない方がよいと思われる。〔12〕の場合、グゼーン・ゲンベの発言に対する“12勇者”の反応であるので、ここにはグゼーン・ゲンベを入れないのが妥当であろう。〔21〕の場合、ホンゴルが不在中の“12勇者”の状況説明であるので、12人のなかにホンゴルを数えるべきでないだろう。〔31〕の場合、アルタン・チェージの発言に対する“12勇者”の反応を描写した箇所であるので、12人のなかに当然アルタン・チェージは入っていないものと考えられる。ちなみに、これらの事例における“12勇者”の「勇者」にはarslang（獅子）とbayatur（勇者）が用いられており、abaya（オジ）は用いられていない。

以上の考察を整理すると、少なくとも17事例においては、“12勇者”の「12」は人数というよりも、12人から構成されている、ある特定の集団を表す固有名詞として用いられているといえる。そうすると、“12勇者”と対で用いられる「8千勇者」もまた、固有名詞として用いられているということになる。しかし、興味深いことに、この「8千勇者」に関しては、一般的に固有名詞として理解されている。ただし、それ以外の事例については、人数を表す数詞として解しても、12人から構成されている、ある特定の集団を表す固有名詞と解しても、どれほどの差異があるかを判断することは難しい。ただし、この場合、当該箇所に関わっている勇者別に、次の表12のように区分けすることができる。

表 12 “12勇者”の表現が関連する勇者

	関連している勇者	当該事例の番号
1	ホンゴル	〔3〕〔19〕〔22〕〔26〕〔27〕〔28〕
2	アルタン・チェージ	〔1〕〔8〕〔9〕〔23〕〔24〕〔25〕
3	ホンゴルとアルタン・チェージが 関連しない	〔10〕〔13〕〔32〕〔33〕〔34〕〔35〕〔36〕〔37〕〔38〕 〔39〕〔40〕〔41〕〔42〕〔43〕〔44〕

表12のように、“12勇者”の「12」を数詞と固有名詞のどちらに解しても、ホンゴ

ルとアルタン・チェージに関わっている箇所とそうでない箇所とに区別することができるということは何を意味しているのでしょうか。この意味を検討するために、“12勇者”という語で指示されている具体的な勇者は誰かという視点からこの問題を検討してみることにしたい。

表12の1のホンゴルに関わる箇所の場合、“12勇者”とホンゴルとが並列して叙述されている事例が〔3〕,〔19〕,〔22〕,〔26〕,〔27〕,〔28〕というように6例あり、これらは“12勇者”のなかでホンゴルが強調されている事例と考えることができる。

次に、2のアルタン・チェージに関わる箇所の場合、まず〔1〕では、“12勇者”は「12獅子たち」という表現となっているが、ここではジャンガルの発話にアルタン・チェージが返答しているので、結果的にはアルタン・チェージを指していたとみなしてもよいであろう。〔8〕と〔9〕では、「アルタン・チェージ率いる12人」とあるので、アルタン・チェージを強調していることがわかる。この表現においては“12勇者”の“勇者”にkümün(人)という語が用られている。〔23〕,〔24〕,〔25〕の3例の場合、ひとつの脈絡のなかで出現しているのでまとめてみておきたい。〔23〕では、ジャンガルが自分の息子に名前を授けてくれるようにアルタン・チェージに依頼し、アルタン・チェージが名前を与えている。〔24〕はその後続の部分であり、名前を授かったジャンガルの息子の発言にアルタン・チェージが返答している箇所である。〔25〕では、ジャンガルの息子がアルタン・チェージに教示された武器を調達して天幕に入ってくる時に用いられ、アルタン・チェージには言及されていないが、それまでの展開からみて、アルタン・チェージの存在が想定されていることは明らかである。

最後に、ホンゴルやアルタン・チェージに関連していないその他の15例の場合である。残念ながら、これらにおいては具体的に指示している勇者を特定することはできない。

以上の考察から、“12勇者”として具体的に指示しているのがホンゴルかアルタン・チェージだということを確認したことになる。この事実は、ホンゴルが『ジャンガル』の最も花形の勇者であり、アルタン・チェージがカルムイクジャンガルと新疆ジャンガルすべてに唯一共通する席次をもつ人物で、かつ右の第1席に座する最も位の高い勇者であることを想起すれば、それほど奇異な結果ではないといえる。

考察から結論すべきことは、“12勇者”を「12人」と理解することは難しいということである。そもそも、12人に満たない人数の勇者が席次で紹介されていることや、その席次にしても各伝承間で全く一致していない状況を考慮に入れるなら、“12勇者”の「12」は、人数を表す数詞としてではなく、「12」と呼ばれる集団を表す固有

名詞として用いられていると考えるのが妥当であるということになる。しかも、固有名詞とみなす場合に、必ずしも「12」と命名された理由を「12人から構成された」点に求める必要がないらしいことが理解される。実際、アリンピルのテキストの序章には、確かに12人の勇者の名前が序章で登場するが、実際には名前の重複している勇者を除外すると11人になるわけであるし、また、ジョーナイ氏のテキストの場合、勇者10人の名前が序章の席次で紹介されているからである。このように、どちらのテキストでも、この集団は実際に12人から構成されていないのである。

7.4 abaya(オジ)を用いる“12勇者”

ここでひとつ指摘すべきことと思われるのは、アルタン・チェージを指す用法のなかで、bayatur(勇者)を用いる“12勇者”の事例が見当たらないことである。アリンピルの全編をよく観察すると、「オジabaya」という語は、“12勇者”の表現に用いられるほか、もうひとつの用法でしか現われていないことがわかる。もうひとつの用法とは、アルタン・チェージを「オジ」と呼ぶ用法である。例を挙げれば、第17章の363頁下段6行目でホンゴルがアルタン・チェージにaltan čegeji babai abaya mini!(アルタン・チェージ・ババイ・オジ!)と呼びかけているような用法である⁴⁷⁾。

つまり、このことは、“12勇者”に「オジ」という語が用いられる場合、限定的にアルタン・チェージを指す可能性を示唆している。だが、「勇者bayatur」の代わりに「オジabaya」を用いる〔24〕においては、「12オジ」があるのに、「アルタン・チェージよ!」とも呼びかける表現がみえているので、一見矛盾しているようにみえる。とはいえ、この台詞に答えてやるのがアルタン・チェージであるところをみると、例外ではないとみなすべきであろう。これについて考察するため、abaya(オジ)が用いられている18事例、すなわち、〔6〕,〔7〕,〔10〕,〔11〕,〔12〕,〔14〕,〔15〕,〔16〕,〔17〕,〔18〕,〔19〕,〔23〕,〔24〕,〔25〕,〔30〕,〔35〕,〔36〕,〔37〕を以下検討してみることにしたい。

前述のように、18例中半分の9例、〔6〕,〔7〕,〔11〕,〔14〕,〔15〕,〔16〕,〔17〕,〔18〕,〔30〕はホンゴルの発言のなかで用いられている。この場合、「12オジ」はアルタン・チェージを指示しているとみなしてもよいように思われる。とくに、ホンゴルの側からアルタン・チェージを「父方のオジ」を指すabayaと呼ぶことは、アリンピルの第3章の内容から無理なく接続しうる。第3章では、ジャングルがハーンになる以前の幼少の頃の出来事が語られているが、ホンゴルの父プフ・ムンゲン・シグシルゲは息子のライバルとなりそうなジャングルを亡き者にするため、アルタン・チェージの馬群を強奪させる難題を課す。ジャングルはこの難題を遂行できないが、アルタン・

チェージがジャンガルを将来のハーンと認めることにより、ブフ・ムンゲン・シグシルゲがジャンガル殺害を断念するという展開になっている。カルムイクジャンガルのエーリヤン・オヴランの場合にも、展開は若干異なるが、同様な内容が見える。そこにおいて、ジャンガルは2度アルタン・チェージの馬群をブフ・ムンゲン・シグシルゲの命令で追わせられており、1度目は失敗するものの2度目に成功することによって、アルタン・チェージを支配下に組み入れるという展開になっている。

新疆ジャンガルにも、カルムイクジャンガルにも明確に述べられてはいないが、ブフ・ムンゲン・シグシルゲがジャンガルにアルタン・チェージの馬群を攻撃させていることや、アルタン・チェージがジャンガルの傘下に入ってからブフ・ムンゲン・シグシルゲもジャンガルに従っていることを考え合わせると、アルタン・チェージはブフ・ムンゲン・シグシルゲの所属する集団における長老であることをうかがわせている。そうすると、ホンゴルがアルタン・チェージを *abaya* (父方のオジ) と呼ぶことは理にかなっているといえよう。したがって、アリンピルのテキストにおける *abaya* の初出が第7章のホンゴルの婚姻譚であり、ここでアルタン・チェージがホンゴルの娶るべき嫁について意見を述べていることを、ホンゴルの父たるブフ・ムンゲン・シグシルゲの代わりに行為とみても大過ないものと思われる。

abaya (オジ) という語を用いて“12勇者”を表現している3例は、ホンゴルの息子であるホシヨーン・オラーンの発話のなかでみられ、[35]、[36]、[37] がそれに該当する。[35] は、ヤスン・エルケン・バートルというジャンガル陣営に降った勇者がホシヨーン・オラーンに対して言う発話のなかに現われている。これにすぐ後続する [36] は、ホシヨーン・オラーンがヤスン・エルケン・バートルに返答する発話のなかで、そして [37] は、ホシヨーン・オラーンの裁量で王の位に就けた少年に語る発話のなかで、それぞれ用いられている。ホンゴルがアルタン・チェージを *abaya* (オジ) と呼ぶことが理にかなっているとすれば、ホンゴルの息子ホシヨーン・オラーンがアルタン・チェージを「オジ」と呼んでも差し支えない⁴⁸⁾。

これを敷衍すれば、[19] においてホンゴルの配下になったエグデック・ツァガン勇者が味方の勇者にホンゴルに従うように勧める発話のなかにおける「12オジ」も、アルタン・チェージを指示しているとみてよいように思われる。また、ホンゴルとジャンガルが「義兄弟」であることを考えると、アルタン・チェージはホンゴルだけでなく、ジャンガルからみても *abaya* (オジ) となる。[23] はこうした例に該当するものと説明できる。ここではジャンガルが自分の息子の名前を授けてくれるようアルタン・チェージに請うている。ジャンガルがアルタン・チェージに *abaya* (オジ)

と呼ぶことができるのであれば、ジャングルの息子もまたアルタン・チェージをそのように呼べることは論を待たないであろう。〔24〕や〔25〕はそうした事例に該当するものと説明できる。前者の〔24〕では、アルタン・チェージから名前を授けられたジャングルの息子の発話に対してアルタン・チェージが返答しており、後者の〔25〕では、ジャングルの息子がアルタン・チェージに教示された武器をもって宮殿に入ってくる場面で用いられている。〔25〕の場合、アルタン・チェージには直接言及されていないが、アルタン・チェージの存在が想定されている場面である。

abaya (オジ) で“12勇者”を表現している最後の2例は〔10〕と〔12〕で、ここでは「ジャングルの統率する“12勇者”」という定型句が核になっていると考えられる。これらはabaya (オジ) でなくともbayatur (勇者) や arslang (獅子) で代替することのできる事例といえる。

以上でabaya (オジ) で“12勇者”を表現している18事例をすべて検討したことになる。最後に検討した〔10〕や〔12〕の例をみると、abaya (オジ) を用いた“12勇者”が常にアルタン・チェージを指示しているとはいえない。だが、ここで指摘すべきことは、“12勇者”の表現に揺れがあることから、口頭伝承の動態性という面を考察の視野に入れなければならないということである。動態性という観点から見逃せないように思われるのは、アリンピル氏のテキストにおいて、アルタン・チェージが一度も他の勇者に対して「12オジ」と呼びかけることがないということである。この事実は、口頭伝承の動態性を考慮に入れると充分意味あることのように思われる。これと関連づけて注意すべきことは、abaya (オジ) という語が用いられる場合、一度もこの語に複数形が現われないことである。“12勇者”の表現を形式化して示した箇所をもう一度振り返れば、そこにおいて「勇者」や「獅子」には複数形があるのに、「オジ」にはないことが確認される。

問題は、「12オジabaya」という表現でアルタン・チェージを指示しているとみなすと、ホンゴルを強調する意としての“12勇者”という考え方がうまく接合しなくなることである。もし両者が共存しうる論理を立てるとすれば、“12勇者”の“勇者”には「勇者bayatur」、「arslang獅子」、「オジabaya」の3通りの言い方があることを考慮に入れ、「オジabaya」が用いられているときにはアルタン・チェージと関係あるものとみなし、そうでないときはアルタン・チェージとは無関係とみなすということになるだろう。

すでに行った考察から、“12勇者”の「12」は、「12人」といった数詞ではなく、実際は12人以下で構成されている、人数とは無関係の「12」と呼ばれる集団という意

味の固有名詞として用いられていると考えられるので、*abaya*（オジ）の議論は次のように収斂させるのが妥当であろう。すなわち、“12勇者”の「12」は「アルタン・チェージを念頭に置いた集団」と「アルタン・チェージを念頭に置かない集団」という2つの集団を表すことができるということである。そして、“勇者”に「*abaya* オジ」が用いられるさいに、アルタン・チェージその人を指示しようということになる。

7.5 小 括

これまでの議論を整理すると、次のようになる。一般に、“12勇者”の「12」は「12人」という人数を表す数詞として解されている。アリンピル氏という伝承者にしても「12人」と解していたらしく、席次の人数の示し方が端的にそれを表わしているといえる。だが、実際にそれが用いられた環境を検討すると、44事例のうち17事例が固有名詞として用いられていることが理解される。すなわち、“12勇者”の「12」は、「数詞」か「固有名詞」かのどちらかとして解釈される。

「12」を「固有名詞」とみなす場合、12人で構成されていてもよいが、基本的に「12」は人数とは関係のない「12」と呼ばれる集団を表していることになる。この集団には、「アルタン・チェージを念頭に置いた集団」と「アルタン・チェージを念頭に置かない集団」という2通りが考えられる。さらに、“12勇者”の“勇者”には *abaya*（オジ）が用いられることがあり、アルタン・チェージが他者に対して一度もこの言葉を用いていないことや、*abaya*（オジ）が複数形で一度も現われていないことを考慮に入れると、「アルタン・チェージを念頭においた集団」は、アルタン・チェージその人を指すことも可能であることが導かれる。

8 カルムイクジャンガルにおける“12勇者”の表現

8.1 エーリヤン・オヴランの10章における“12勇者”

“12勇者”の「12」を固有名詞と解してカルムイクジャンガルに目を向けると、カルムイクで最も多くの章を語った語り手であるエーリヤン・オヴランの語った序の席次において、“12勇者”として5人の勇者の名前しか挙げられていないことは奇異なことではなくなる。だが、それは人数としての用法を否定しているわけではない。実際、対象テキストを語ったアリンピル氏が人数と理解していたのと同様に、実際に当人が語っている語りの実態とは別に、エーリヤン・オヴランもまた“12勇者”を「12

人」と解していた痕跡が認められる。だがそれを確認する前に、エーリヤン・オヴランの“12勇者”の表現にどれくらいの偏差があるかをみておきたい。

なお、丸括弧内の章数と頁はカルムイクジャングル25章本にもとづいている。カルムイクジャングル25章本は2巻本であるので、以下においては第1巻をI、第2巻をIIと表記することにする。

表 13 エーリヤン・オヴランにおける勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所
“6千12勇者”	「6千12勇者baat'r」	第8話：I/393頁, I/401頁, I/404頁 第9話：I/406頁, I/415頁 第10話：I/417頁, I/418頁, I/423頁 第13話：II/89頁2回, II/90頁 第14話：II/107頁, II/108頁2回
	「6千12勇者たちbaat'rmud」	第7話：I/123頁
	「6千12自身bij」	第7話：I/385頁, I/386頁2回, I/391頁 第8話：I/393～394頁, I/395頁, I/400頁, I/402頁, I/405頁 第9話：I/414頁, I/415頁 第11話：II/11頁, II/24頁 第12話：II/36頁2回 第13話：II/76頁, II/91頁 第14話：II/92頁, II/95頁 第15話：II/126頁
	「6千12獅子arsl'ň」	第15話：II/109頁
	「6千12猪bod'ň」	第11話：II/6頁
	「6千12猪たちbod'ňgud」	第15話：II/110頁
	「6千12」	第13話：II/90～91頁
“12勇者”	「12勇士baat'r」	第8話：I/403頁 第15話：II/115頁
	「12猪 bod'ň」	第7話：I/384頁 第8話：I/396頁, I/404頁 第10話：I/440頁
	「12獅子 arsl'ň」	第11話：II/7頁
	「12自身bij」	第9話：I/411頁

“12勇者”	「12重臣sään」	第11話：II/23頁 第12話：II/28頁 第13話：II/91頁
	「12人間küün」	第8話：I/396頁
	「12」	第8話：I/396頁 第10話：I/418頁
	「12番目の猪bod'ñ」	第8話：I/396頁
	「11猪bod'ñ」	第8話：I/396頁, I/397頁2回
	「13でarv'n yorvul'n」	第8話：I/404頁
“32勇者”	「32猪bod'ñ」	第12話：II/65頁, II/66頁, II/69頁
	「32自身bij」	第12話：II/66頁, II/69頁

“12勇者”を「12人」と人数として理解している痕跡は、カルムイクジャンガル25章本の第8話“アルスランギーン・アラク・オラーン・ホンゴルが命がけでアラク・マンジのボーラル・アイフ・ドクシン・マンナ王を征伐し、1千1年の間、聖なる君主ジャンガルの支配下に入れた章”において認められる⁴⁹⁾。

この章において、ジャンガルは自分のもとに来た敵王マンナ王の使者に、ジャンガルの駿馬、ジャンガルの后シャブダル、ミンヤン、サナルの駿馬、ホンゴルの引渡しを要求される。ジャンガルは後のシャブダルとホンゴルの処遇は決めかねるが、その他は引き渡すことを承認する。この決定に対しホンゴルが異を唱えると、ジャンガルが立腹し、ホンゴルを捕らえるよう「12ボドン（猪）」に呼びかける。問題は次の場面である。これに対し、「11ボドン（猪）」が義兄弟の誓約により、ジャンガルの命令に従おうと立ち上がる。すると、この挙動に対して、「12人目のボドン（猪）」のサナルが「おまえたち11ボドン（猪）を放り投げるぞ」と言って反対する。これを聞いて「11ボドン（猪）」たちは引き下がる。

この場面で「11ボドン（猪）」という表現が出現していることから、「12ボドン（猪）」の「12」が数詞として用いられていることは明らかである。この部分はジャンガルの翻訳者たちを悩ませた箇所であるらしく、1993年に新疆人民出版社より2巻本として出版された漢訳本『江格尔——漢文全訳本』の第1巻の訳（黒勒・丁师浩1993a: 558-559）、あるいは1995年に東洋文庫より刊行された邦訳の『ジャンガル』における注釈はそれを物語っている（若松1995: 104-105）。前者においては、ジャンガルの命令に10ボドン（猪）が立ち上がり、11人目のボドン（猪）であるサナルが反対したというように、原文の数字を前者の数字については「11」から「10」に、後者の

数字については「12」から「11」に校訂している。この校訂の事情は漢訳本そのものからは理解できないが、後者の若松寛氏による邦訳ジャンガルにおける注釈（二）から推測することができる。引用すると次のようになる。

古くからテュルク、モンゴル遊牧民の間では、義兄弟の誓いをして、互いに助け合う習慣があった。その誓いの当事者を「アング」と呼ぶ。続く文意によると、アングの仲間は十二人いるが、その一人サナルは立ち上がらなかったのだから、この時立ち上がったのは、ホンゴルとサナルを除く十人でなければならない。『江格爾（一）』三五〇頁では、十人が立ち上がり、十一人目のサナルがもの申した、に作っている。（若松 1995: 105）

邦訳ジャンガルの注釈は、漢訳本の校訂の事情を的確に説明しているものと考えられる。漢訳者だけでなく、注釈の説明をみる限り、邦訳者もまた、“12勇者”の「12」を「12人」という数詞に解していることになる。ただし、邦訳ジャンガルの注釈で挙げられる『江格爾（一）』は、1988年と1989年に内蒙古少数民族古籍編委會・内蒙古社会科学院文学研究所合編、内蒙古人民出版社より刊行された2巻本の漢訳本であって、先に言及した1993年に新疆人民出版社より2巻本として出版された漢訳本『江格爾－漢文全訳本』とは異なるものである。1993年に出された漢訳もこの箇所について同じ校訂がなされていることをみると、内蒙古で出された1988年度版を踏襲したものと考えられる⁵⁰⁾。

このように、どちらの漢訳本にしても原文で最初に出てくる「11ボドン（猪）」を「誤り」とみなしていることになるのであるが、実は原文を変えずにこの部分を次のようにも解釈することができる。すなわち、ホンゴルを捕らえよというジャンガルの命令に立ち上がった勇者たちが「11ボドン（猪）」で、それに反対するサナルを「12番目のボドン（猪）」と言っていることをそのまま受け取って、ここでの「12ボドン（猪）」のなかにはホンゴルが含まれていなかったとする解釈を採るのである。

この問題をさらに検討するために、マンナ王と戦うホンゴルの助太刀にジャンガルが「12ボドン（猪）」と一緒にやってくる場面をみてみよう。ここには「11」ではないが「13」という数字が現われている。ここでジャンガルは「ホンゴルと一緒に13で」マンナ王を殺したとある（I/404頁）。「13」という数字が出てくることから、当然ながら“12勇者”の「12」は数詞として用いられているということになる。1993年の漢訳本573頁においてはこの「13」は訳出されておらず、意識によってうまくこの問題を回避している⁵¹⁾。邦訳ジャンガルにおいては、先の解釈との整合性を図るために、ホンゴルを助太刀にきた「12ボドン（猪）」と訳出しつつも、注釈においては「実数はホンゴルを除く十一人である」と断りを入れている。同じく先の解釈との整

合性を図るために、「13」という数字を注釈において、「この人数は十二猪勇者とジャングルを合わせたものであろう」と推測している（若松 1995: 113）。こうした解釈が出てくる背景には、ホンゴルという『ジャングル』における花形勇者を“12勇者”のなかに数えねばならないという心理が働いているようである。

だが、叙述されていることをそのままに受け取る場合、ホンゴルを助太刀した「12ポドン（猪）」のなかにホンゴルは含まれないと考えることになる。したがって、「13」という数字は、ホンゴルを含まない「12ポドン（猪）」にホンゴルを加えた「13」と数えることになる。これは、「ホンゴルと一緒に13で」と明示された叙述とも呼応することになる。この解釈の特徴は、ホンゴルを“12勇者”のなかに数えないということである。

こうした解釈のいずれが妥当であるかということは当該箇所のみ注目した限りでは明らかではない。しかし、この章にはもう1箇所“12勇者”の表現があり、この箇所では明らかに“12勇者”の表現にホンゴルが入っていない（I/403頁）。なぜなら、この場面においてはホンゴルの背に突き刺さった矢を「力強い12勇者」が引き抜いてやったと語られているからである。このほか、この章においては“12勇者”ではなく、「6千12勇者」という表現が7回現われているが、このうち少なくとも4回はホンゴルがそのなかに入っていないと考えられる。

詳細にみよう。まずその1回目は、ホンゴルがマンナ王との戦いで苦戦している様子を知った「6千12勇者」がジャングルと協議するという場面である（I/400頁）。この「6千12勇者」にホンゴルが含まれていないことは、“12勇者”の「12」を数詞と解する限り、明らかである。2回目は、ホンゴルを救出するためにジャングルが「6千12勇者」を引き連れてマンナ王のもとに出陣するという場面である（I/401頁）。先の指摘と同様に、ここで「6千12勇者」にホンゴルが含まれていないことは明らかである。3回目は、1回目や2回目の事例と全く同様に、ジャングルがこの「6千12勇者」をマンナ王のもとに実際に引き連れていったという場面である（I/402頁）。そして最後の4回目は、ジャングルがマンナ王を槍で突き刺したときに、「6千12勇者」が山頂から一斉に歓声をあげたという場面である（I/404頁）。この場面ではまだホンゴルは救助されていないので、ホンゴルをこの「6千12勇者」のなかに数えることはできない。その他の3回の実例については論じるための条件が整っていないが、“12勇者”関連の表現にホンゴルが含まれていない可能性はないとはいえない。

以上から留意すべきことは、次の3つの事柄である。ひとつには、“12勇者”の「12」の変形であると考えられる「11」や「13」という数字が出てきたとしても、そ

れが出現している当該箇所だけで判断すべきではないということである。またひとつには、伝承者がたとえ“12勇者”の「12」を数詞と解していたとしても、固有名詞である場合もあるということである。そしてもうひとつは、ジャングルにおける花形勇者ホンゴルを“12勇者”のなかに入れない方が原文を変えないで解釈できるという場合があるということである。

とくに最後に挙げた事柄は重大なように思われる。なぜなら、一般に“12勇者”の「12」は人数を表す数詞とみなされてきただけでなく、その際にホンゴルが12人の勇者のなかに入っていないことは全く考えられてこなかったからである。だが、実は、今挙げた章以外にも、「12」が人数を表す数詞であるとみなして、その際にホンゴルが入っていないと考えられる例があるのである。

たとえば、第7話“アルタイ・オラーン・ホンゴルがアチ・ドートの息子アリヤー・モンフライを捕らえた章”において、ホンゴルがアリヤー・モンフライを槍で突き刺し、人馬もろともに「6千12勇者たち」の方に投げ捨てた場面がそれである（I/391頁）。人数の観点からみれば、ここでの「6千12勇者たち」にホンゴルが含まれていないことは明らかである。同様の事例は、第12話のホンゴルの婚姻譚においても観察される。それは、ホンゴルの様子を見て「6千12勇者」が賞賛するという叙述である。これは2回現われている（II/36頁）。ここでみられている当人のホンゴルがこの「6千12勇者」のなかに入っていないことは明らかである。

また、ホンゴルが“12勇者”のなかにならぬ事例は、カルムイクジャングル25章本の第14話“トゥブド・ボンバ王の末裔トゥブシン・シルヒの孫（姉妹の子？）トゥメン・ブフ・ムンゲン・シグシルゲの長子、シルテイ・ザンダン后が22歳の年に生んだアルスランギーン・バザク・オラーン・ホンゴル勇者がハル・ジルガン王と戦って勝利した章”にもみられる。それは、ホンゴルとハル・ジルガン王とが和解した後でジャングルが「6千12勇者」を引き連れてくるという場面である（II/107頁）。ここでは、当然ながら「6千12勇者」のなかに入っていない。

以上から指摘すべきことと思われるのは、語り手が“12勇者”の「12」の代わりに「11」や「13」というように人数を表す数詞として語っているとしても、それは局所的な処置であって、別の箇所においては全く踏襲されていないということである。したがって、このような語り手の局所的な処置とは、実際には語り手の個人的な解釈をむしろ表している箇所であると理解することになる。ホンゴルだけに焦点を当てて、「12」が人数を表す数詞もしくは人数と関連のある固有名詞であると解する場合、ホンゴルが12人のなかに入っていない状況を、ひとつには、ホンゴルはそもそも12

人のなかに入っていなかったとみなすことになる。もうひとつには、12人から構成されている「12」と呼ばれている集団であるとみなすことになり、ホンゴルが状況的に入っていなくとも何ら問題はないということになる。

実は、エーリヤン・オヴランのテキストにおいて、“12勇者”の「12」を数詞もしくは人数と関連のある固有名詞として解す場合、ホンゴルだけでなく、ミンヤンやサナル、サワルといった3人についても同様のことが観察される。以下、その箇所についてみておくことにしよう。

ミンヤンの場合、こうした事例は4例みられる。エーリヤン・オヴランの語った10章にはミンヤンが主に活躍する2つの章が含まれているが、ミンヤンの事例はその2つの章に現われている。まず、第10話の“聖なるジャンガル王の重臣エルフ・トグ王の息子オルチロンギーン・サイハン・ミンヤンがジャンガル王に使われてアルタン・トゥルク王のアルタン・シャル・ツォーホル馬群を連れてきた章”に1例ある。これは、敵陣に出発するミンヤンを「6千12勇者」が見送るという場面である（I/423頁）。ここでミンヤンは見送られる側にあり、人数の観点からみれば、「6千12勇者たち」のなかに当然含まれないはずである。第11話の“名高いエルフ・トグ王の息子オルチロンギーン・サイハン・ミンヤンがジャンガルに使われてフチテイ・フルメン王を生け捕りにしてきた章”には3例ある。1例目は、敵王を生け捕りにしてくる勇者としてジャンガルに指名されたミンヤンがジャンガルに言う台詞のなかで出現している（II/7頁）。ミンヤンは、かつて「尊い12アルスラン（獅子）」を従えたジャンガルが自分と戦ったことに言及している。むろん、ここで「尊い12アルスラン（獅子）」のなかにミンヤンは含まれない。2例目は、第10話における事例と同様、ミンヤンが敵陣に出発する際に「6千12勇者」が見送る場面である（II/11頁）。むろん、ここにミンヤンは含まれない。3例目は、ジャンガルたちのもとに帰還したミンヤンを「12重臣」が迎える場面である（II/23頁）。当然、ここも「12重臣」にミンヤンは含まれない。

以上はミンヤンが“12勇者”に含まれない事例であるが、エーリヤン・オヴランの語る勇者の席次にミンヤンの席が厳密には述べられていないことを想起すれば、こうした事例を出すのが妥当かどうかという問題はある。しかし、2編においてミンヤンが主要勇者の位置を占めていることを重視すれば、問題なからう。

次に、サナルの場合である。サナルはエーリヤン・オヴランの席次における左の第3に座する勇者と明示されているので、この人物が“12勇者”のなかに入らない事例を検討するのは妥当である。この事例は全部で4例あり、サナルが活躍する第13

話 “聖主ジャングルに使われてボリンガリーン・ドクシン・ハル・サナルがフデル・ザールのザーン・タイジ王の強力な怪物国を攻めてジャングルの領地に加えた章” に現われている。1例目は、敵陣に出発しようとするサナルに「6千12ビー（自身）bij」が見送る場面である（II/76頁）。これまでにみた同様の例であるが、見送られるサナルが「6千12自身」にいないことは確かである。2例目と3例目は、サナルを救出するためにジャングルが「6千12バートル（勇者）baat`r」と出発する場面である（II/89頁）。ここにもサナルが含まれないことは明らかである。4例目は、サナルの救出のためにいち早く駆けつけたサワルがサナルと出会って抱擁しているところに「6千12勇者」が到着するという場面である（II/90頁）。ここでは、サナルが「6千12勇者」のなかに入っていないだけでなく、サワルもまた入っていないはずである。

サワル単独で“12勇者”に入っていない例としては、1例観察される（I/411頁）。ここで敵のシャルグルの3人の王はサワルさえいなければ「12ビー（自身）bij」に太刀打ちできると語っている。この「12ビー（自身）」にサワルが含まれていないのは明かである。

以上はサナルやサワルが“12勇者”に入っていない事例である。こうしたホンゴル、ミンヤン、サナル、サワルが“12勇者”の「12」が人数を表す数詞ではなく、少なくとも、12人で構成されている「12」と呼ばれる集団という意味の固有名詞として用いられていることを示している。ただし、以上に挙げた事例は、明らかに固有名詞であることを自ら証明しているような事例であって、それ以外の事例について、両者の区別はできない。

8.2 アルタン・チェージとの関連でみた“12勇者”

次に、新疆ジャングルの考察との比較で、エーリヤン・オヴランの語りのなかに、固有名詞の用法として、人数とは関係のない「12」と呼ばれる集団を指し示す用法と、「12」と呼ばれる特定の人物を指し示す用法の2つがあるかどうかを検討したい。これらはアルタン・チェージとの関連で“12勇者”の表現を探ることを意味する。

この場合、アルタン・チェージとの関連で確実に示すことができる事例は、10章中においてわずか2例しか見当たらない。その1例は、第7話“アルタイ・オラーン・ホンゴルがアチ・ドートの息子アリヤー・モンフライを捕らえた章”において、ジャングルが自分の馬群を奪っていったアリヤー・モンフライを追跡するよう「12ボドン（猪）」に命じて、アルタン・チェージがそれに返答している場面である（I/384-385頁）。これは、“12勇者”として具体的にアルタン・チェージを指している場面とす

ることができる。もう1例は、第15話の“至高の聖なる君主ジャンガルの若き頃の王子バートル・ハル・ジルガン、フンヘーン・アルタン・チェージのアリヤー・ションホル、アルスランギーン・アラク・オラーン・ホンゴルのホショーン・オラーンの3人が行軍して強力な勇者バドミーン・オラーンを生け捕りにしてきた章”に現われている(II/110頁)。そこにおいて、ジャンガルは若き頃のバドミーン・オラーンとの対戦を回想し、その際にジャンガルは負けたにも関わらず見逃してくれたバドミーン・オラーンの処遇をめぐって「6千12ボドン(猪)たち」に相談している。それに返答しているのがアルタン・チェージであるところからみると、結果的にこの「6千12ボドン(猪)たち」はアルタン・チェージを指していたということになる⁵²⁾。

ただし、エーリヤン・オヴランやそれを含む25章本のカルムイクジャンガルには、新疆ジャンガルのようにアルタン・チェージを「アバガ(オジ)」と呼ぶ例がないだけでなく、“12勇者”の“勇者”の表現に「アバガ(オジ)」という語を用いる例も見受けられない。それゆえ、カルムイクジャンガルにおいて“12勇者”を直接にアルタン・チェージに結びつけることは難しいということになる。

エーリヤン・オヴランの『ジャンガル』において少なくともいえることは、“12勇者”の「12」が、12人から構成されていてもよいが、必ずしも12人から構成されている必要のない「12」と呼ばれる集団を表す固有名詞であると解釈できることである。さらに指摘しておくべきことあるとすれば、第12話の婚姻譚において出現している「32ボドン(猪)」もしくは「32ビー(自身)」という表現の存在である(II/65頁, II/66頁2回, II/69頁2回)。この「32ボドン(猪)」が左右に16人ずつ配されているらしいことは、第7話におけるアリヤー・モンフライの章の結末部で、ジャンガルの宮殿にやってきたアリヤー・モンフライがアルスラン(獅子)とボドン(猪)たち10(人?)をまたぎ、5(人?)に平手打ちを食わせて右の主席に座っていたアルタン・チェージの次に座ったという叙述から推測される(I/392頁)⁵³⁾。なぜなら、この叙述からみると、アリヤー・モンフライはアルタン・チェージの横に座ったと考えられ、そうすると、最初はアルタン・チェージを含めて計16人いたということになるからである。

ここで問うべきことがあるとすれば、“12勇者”と「35ボドン(猪)」もしくは「35ビー(自身)」がどのように関連しているのかということである。こうした“35勇者”の例は、他のカルムイクジャンガルに若干の語句において差異を伴いながらも現われていることが観察される。次節ではこうした問題を含めて、エーリヤン・オヴラン以外のカルムイクジャンガルにおける勇者表現の状況を観察してみたい。

8.3 エーリヤン・オヴラン以外のカルムイクジャングルにおける勇者表現

エーリヤン・オヴラン以外のカルムイクジャングルにおける勇者表現を25章本に沿って以下記述することにする。第1話～第3話はバガ・ドルベト地方の章、第4話と第5話はバガ・ツォーホル・トルグート地方の章である。第6話～第15話まではエーリヤン・オヴランの語った章で、これについては前節で扱った。第16話～第21話はハル・ホス・トルグート地方のバーサンギーン・モーフブーン Bas'ňya Muköväünä が語った章である。第22話と第23話はイフ・ツォーホル・トルグート地方のシャヴァリーン・ダワン Šavalin Davan が語った章である。第24話と第25話はバガ・ドルベト地方のバルダリーン・ナサンヒーン Bald'ra Nas'ňkiin が語った章である。

第1話 オト・ツァガーン怪物をジャングルが征伐した章 ut' cayan maňy'siigě žaňy'r döräcülëgsën böläg

この章には“12勇者”表現が3例、そのほかの勇者表現としては“35勇者”が「35ボドン（猪）」と「35ビー（自身）」という2通りの形で現われている。そしてこの“35勇者”の左右には「17ボドン」（I/65頁, I/66頁2回）もしくは「17ビー」（I/85頁）が配されている。表で示せば、次のようになる。

表 14 カルムイクジャングル25章本第1話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12大臣の息子 sāāni kövü」	I/45頁	1
	「12イェルデン jelděň」	I/69頁, I/70頁	2
“35勇者”	「35ボドン（猪）」	I/52頁, I/53頁, I/80頁, I/87頁, I/88頁2回, I/90頁	7
	「35ビー（自身）」	I/85頁, I/89頁	2
“35勇者”の左右に いる“17勇者”	「17ボドン」	I/65頁, I/66頁2回	3
	「17ビー」	I/85頁	1

なおこの章には表向き“6千12勇者”といった表現はみられないが、グンベ、アルタン・チェージ、ハプティン・ウング・ピエ、ホンゴルに私的な3千勇者がいるということに言及されている。

“12勇者”の事例についてみておこう。

- ① (I/45頁) 宮殿のハタウチ (戸と側壁の接合部分) にホンゴル率いる「12大臣の息子sääni kövü」の絵が描かれているという叙述である。
- ② (I/69頁) ホンゴルが酔って、ジャンガルのそばに「12イエルデンjeldën」のなかにホンゴルがいると聞けば敵も近づかないのだとアルタン・チェージに豪語する場面である。
- ③ (I/70頁) ②に後続する場面で、ホンゴルが豪語するのを聞いて、アルタン・チェージが実際には敵のオルト・ツァガーンの使者がホンゴルを「12イエルデンjeldën」のなかから首に耐えられないほど重い鎖をつないで引っ張っていくためにジャンガルの宮殿に接近していることを伝える場面である。

これら3例での「12」は、数詞と固有名詞のどちらの用法でも解することができるように思われる。指摘しておくべきことは、この章では「35ボドン (猪)」もしくは「35ビー (自身)」の例が“12勇者”よりも頻出していることが観察されることである。そして、その際には、「ジャンガル率いる35ボドン」もしくは「ジャンガル率いる35ビー」という表現として現われている。この事実から、「35」というのは左右に17人ずつで計34人にジャンガルを足した数字であると理解してよさそうである。

この章で指摘すべきことは、“12勇者”と“35勇者”の表現が混合して用いられているということである。つまり、エーリヤン・オヴランにおけるホンゴルの婚姻譚について指摘した“12勇者”と“35勇者”の問題がここでもみられ、上の事例は語り手自身がはっきりした違いを認識していなかったのではないかと思わせる。なお、エーリヤン・オヴランとの比較でいえば、この章には“6千12勇者”という表現は一度も現われない。

第2話 フレル・エルデネ怪物王をジャンガルが征伐した章 kūrēl erdēni mañy's qaag' žaňy'r dōräcülēgsēn bōlēg

勇者表現を表で示せば、次のようになる。

表 15 カルムイクジャングル25章本第2話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12大臣sään」	I/92頁	1
	「12ボドン（猪）bod'ñ」	I/92頁	1
“35勇者”	「35ボドン（猪）」	I/97頁, I/98頁, I/138頁	3
“17勇者”	「左の17ボドン」	I/107頁, I/108頁	2

“12勇者”について詳しくみてみよう。

- ① (I/92頁) 第1話における①の事例と近似するもので、ジャングルの宮殿のハタウチにホンゴル率いる「12大臣sään」が描かれているという描写部分である。
- ② (I/92頁) ①に後続する場面で、この描かれた「12ボドン（猪）bod'ñ」が戦闘の姿でりっぱに描かれているという叙述である。

この2例の「12」は、数詞としても固有名詞としても解しうる。また「35ボドン」という表現は3例とも「聖君率いる35ボドン」という表現で現われている。これは先の第1話における“35勇者”の用いられ方と近似している。第1話と同様に「左の17ボドン」という表現が現われている点を見ると、第1話と同様に、この「35」は左右に17で計34にジャングルを足した数字であると理解できる。また第1話と同じく、“12勇者”と“35勇者”との間にどのような関係があるのかはここでも不明である。エーリヤン・オヴランとの比較でいえば、第1話同様この章にも“6千12勇者”という表現は一度も現われない。

第3話 荒ぶるシャル・グルグ怪物王をドート・オラーン・ショブショールが征伐した章 dogš'n šar' gürgě mañy's qaag' duut' ulan šovšur döräcülëgsën bölēg

勇者表現を表にすれば、次のようになる。

表 16 カルムイクジャングル25章本第3話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12大臣の息子sääni kövü」	I/139頁	1
“35勇者”	「35ボドン（猪）」	I/164頁, I/167頁, I/173頁2回, I/180頁, I/186頁, I/191頁, I/193頁3回, I/200頁	11
“17勇者”	「17ボドン」	I/159頁2回, I/160頁	3

唯一現われている“12勇者”の表現は、第1話の①と同様の例である。すなわち「ホンゴル率いる12大臣の息子」の絵が描かれているというもので、“12勇者”の「12」は数詞、固有名詞のうちどちらにでも解釈しうる。この章では席次の紹介のさいに、右4人が紹介された後に「最後の権利のところまで、17勇者が円陣になって座して ad'g erkën kürtélě, arv'n dolan bod'ñ d'ñy'ralad」という表現がみえ、左についても同様に、左の3人が紹介された後に同じ表現が繰り返されている(II/160頁)。こうした「17勇者」の用いられ方から、第1話や第2話と同様に、「35ボドン(猪)」の「35」は左右に17ずつの計34にジャンガルを足した数字であることがわかる。

整理すると、この章では席次の紹介において直接「35ボドン」について物語っていること、そして“12勇者”については戸口の彫刻の箇所でのみ言及されていることになる。このことから、“12勇者”と「35ボドン」について次のようにいえるかもしれない。それは、勇者は12名ではなく、むしろジャンガルを除いて34名いるということである。つまり、この章からみる限り、“12勇者”を同定する作業というのは全く意味をなさないことになる。なお、第1話～第3話と同様にエーリヤン・オヴランの語りとは異なり、この章には「6千12勇者」という表現は一度も現われない。

第4話 7世代から以降揺るがないドクシン・ハル・キナスがアルスランギーン・アラク・オラーン・ホンゴルを生け捕りにした章 *dolan üjäsën naaran ködläd uga dogs'n qar' kiněs arsl'ñgiin ar'g ulan qoñy'riigě ämdär kelě bäreğsën bölěg*

この章における勇者表現を整理すれば、次のようになる。

表 17 カルムイクジャンガル25章本第4話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12勇者」 ⁵⁴⁾	I/253頁, I/280頁, I/281頁	3
“6千12勇者”	「6千12勇者」	I/220頁, I/232頁2回, I/235頁, I/240頁, I/246頁, I/248頁, I/249頁, I/253頁, I/257頁, I/258頁, I/263頁, I/269頁, I/276頁, I/277頁, I/301頁	16
	「6千12ビー(自身)bij」	I/233頁, I/250頁, I/258頁, I/286頁, I/302頁, I/303頁	6

	「6千12」	I/224頁, I/243頁, I/252頁, I/275頁	4
	「12, 6千arv'n qoj'r zurvan miñyën」	I/289頁	1
	「13, 6千」	I/277頁	1
“6千勇者”	「6千勇者」	I/287頁	1

表からみると、圧倒的多数の事例が“6千12勇者”という表現ということになる。そして「右の, 3千勇者のなかからbaruni yurv'n miñyën, baat'riin dotrasni」という表現がみえるので (I/249頁), “6千12勇者”の“6千”は左右に3千ずつ配置されているということになる。なおこの章には“35勇者”の表現は一度も現われない。

以下, 「12勇者」の3例を見ておこう。

- ① (I/253頁) 「12勇者」表現はホンゴルが敵陣に出発する前にジャングルに3度拝礼した後に次のように述べる箇所で現われている。

ödriin kelën 昼間の言葉

sööni züüdën bol'gs'n boyd' mini! 夜の夢となりし聖君よ!

üüriin arv'n qoj'r baat'r mini! ひとつの巢の我が12勇者よ!

dogš'n mañy'siin or' zörqëdän kürbëbi! 荒ぶる怪物の国を目指すことになった俺は

Nëe küñkë noj'n čeeži さあ, フンヘーン・ノヨン・チェージよ

küctä qaani elči 強力な王の使者は

ali cagt' nadla qary'q' bolna? いつ俺と会おうのだ?

ald'l uga ääldëži kelži ögiči! 間違いなく俺に言ってくれ!

ここでは数詞でも固有名詞でもどちらにも読める。

- ② (I/280頁) ホンゴル救出のため敵のハル・キナス領に出陣するさいに“12勇者”の馬が一斉に出発したという場面で用いられている。ここでホンゴルは含まれないのは明らかであるので, “12勇者”の「12」は特定の集団を表す固有名詞として用いられていることになる。この場合, 「12」と呼ばれる集団は, 12人で構成されていてもよいし, いなくともよい。

- ③ (I/281頁) ジャングルがグンベの馬が見当たらないと言ったことに答えるアルタン・チェージの言葉のなかで用いられている。アルタン・チェージはサワルと

サナル以外の馬には追ついたと言う。

ald'r noj'n bogd' mini 名高き聖なる領主よ
 urži ödër yal üdlä 一昨日真昼に
 toosiini ald'v bi (馬の立ち上げる) 砂埃を見失った俺は
 arv'n qoj'r baat'riinin 12勇者の
 külgüdiini küčën davad odv' 駿馬たちに追いついて先頭で走った

ここでの“12勇者”にはホンゴルとサナルとサナルの3人の勇者が含まれていないことが明らかであるので、“12勇者”の「12」は、数詞ではなく、特定の集団を表す固有名詞として用いられているということになる。一方、“6千12勇者”の事例は27例あるが、このうち、人数ではなく固有名詞と考えられる事例は12例認められる(I/233頁, I/235頁, I/249頁, 258頁2回, I/269頁, I/275頁, I/276頁, I/277頁, I/286頁, I/287頁, I/303頁)。これらの事例での状況からみて、ホンゴルが入っていないのは9例ある。また、ホンゴルのほかサナルとサナルの3人が含まれていない例が1例ある(I/286頁)。このほか、アルタン・チュージとグンベ、そしてジルガンの3人が含まれていない例が1例みられる(I/287頁)。

注目すべきことは、この章に「6千13勇者」という表現が出てくることである(I/277頁)。これは、ジャンガルたちがホンゴルの救出に向かうときに、サナルの馬が異様に速いので、サナルがジャンガルに競争しながら敵陣に向かうことを提案し、ジャンガルがそれを承諾する次の場面で用いられている。

arsl'ñ kündë yart' sav'riin アルスラン・フンド・ガルト・サナルの
 arñz'l' qurd'n kürëñ mörëñ アランザル・ホルダン・フレン馬は
 arv'n yurv'n 13
 zuryan miñyën baat'rmudýyn dot'rni 6千勇者たちのなかで
 am'ndan küči ögël uga 口輪を引っ張らないで
 öö dot'r' 森のなかを
 očin metë ösräd jovna 火花のように飛んで進んでいく

ここで「6千13勇者たち」というのは、馬を競争させながら敵陣に乗り込もうと提案するサナル以外の「6千12勇者たち」とサナルを足した数字であると推測される。なぜなら、サナルは『ジャンガル』における主要な勇者であると一般に考えられているが、この章の場合、サナルは前半部分においてジャンガル側に新たに組み込まれた勇者として描かれていることを考慮すると、新参者として勘定に入っていない可能性があるためである。勇者の席次においても、ホンゴルの席次はあるがサナルの席次は

与えられていないということに注意する必要がある。したがって、「6千13勇者」はサウルを加えた“6千12勇者”ということになる。この場合の“6千12勇者”は、そのなかにホンゴルが含まれていないので、特定の集団を表す固有名詞の用法だということになる。将来的に問うべきことは、サウルが“6千12勇者”のなかに入っている章と本章とがどのように関連しているかであろう。

第5話 アサル・オラーン・ホンゴルがドクシン・シャル怪物王を生け捕りにしてきた章 as'r ulan qoñy'r dogš'n šar' mañy's qaag' ämdär kelé bärži avči irëgsën bölëg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 18 カルムイクジャングル25章本第5話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“6千12勇者”	「6千12獅子たち」	I/343頁	1
	「6千12勇者」	I/339頁, I/342頁, I/344頁, I/347頁, I/349頁, I/352頁, I/353頁	7
	「6千12勇者たち」	I/344頁2回複数形, I/345頁複	3
	「12, 6千ビー (自身) bij」	I/349頁	1
?	「8千勇者」	I/350頁	1

表からみると、この章では“6千12勇者”という表現がかなり安定して用いられていることが理解される。この章には一度だけ「8千勇者」と表現されている箇所があるが、頻度より考えれば、「6千」の語り間違えである可能性が高い。I/312頁によれば、「6千12勇者」という表現の「6千」は左右に3千ずつ配置されている。

「6千12勇者」の事例中の9例にはホンゴルが含まれていないことが観察されるので、これらは数詞ではなく、ある特定の集団を表す固有名詞として用いられていると考えられる。ただし、この章にはいわゆる勇者の席次を紹介する叙述がないため、ホンゴルを含むか否かで人数の用法か総称の用法かを判断することの妥当性を問う必要があるかもしれない。

第16話 ジャングル自身が第一の政権を取った章 žaňy'riin bijinni türün törän avs'n bölëg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 19 カルムイクジャンガル25章本第16話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12アングィăṅgě」	II/128頁2回	2
	「12タングチtaṅy'č」	II/128頁, II/130頁	2
	「12ボドンbod'ñ」	II/147頁, II/158頁, II/162頁, II/166頁2回	5
?	「11ビー (自身) bij」	II/169頁, II/171頁	2
“6千勇者”	「6千勇者」	II/139頁, II/147頁, II/158頁, II/162頁, II/166頁2回	6

表のように、この章では主に“12勇者”と“6千勇者”の2つの表現が出現している。“12勇者”には「12アングィăṅgě」, 「12タングチtaṅy'č」, 「12ボドンbod'ñ」の3種類が用いられている。「12ボドン」が用いられる場合には、実は常に“6千勇者”が対になって現われていることが観察され、「6千勇者」が単独で出現するのは1回限りである (II/139頁)。すなわち、「12ボドン」が用いられる場合、実質的には“6千12勇者”という形で出現しているということになる。したがって、「12アングィ」と「12タングチ」そして「12ボドン」の3つは一見“12勇者”の同様の表現であるように見えるが、実際には前者の2つと「12ボドン」とは別のカテゴリーに入れるのがよいということになる。このような角度から表19を作成しなおすと次の表20ようになる。以下の章では、この表20のように作成することにした。

表 20 “6千12勇者”の一部と考えられる“12勇者”を“6千12勇者”として数える場合の勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12アングィăṅgě」	II/128頁2回	2
	「12タングチtaṅy'č」	II/128頁, II/130頁	2
?	「黄色の6千勇者自身で, 選り抜きの11自身で」	II/169頁	1
?	「11ビー (自身) bij」	II/171頁	1
“6千12勇者”	「12ボドンbod'ñ」	II/147頁, II/158頁, II/162頁, II/166頁2回	5
“6千勇者”	「6千勇者」	II/139頁	1

ところで、「12アング」、「12タングチ」、「6千12勇者」といった表現が人数を表す数詞として用いられているのか、「12」で表される特定の集団を表す固有名詞として用いられているのかを判断することは難しい。むしろこの章で問題となるのは、表で2回出現している「11ビー（自身）bij」という表現である（II/169頁とII/171頁）。2回のうち最初のもは“6千勇者”と対で現われており、表ではそれを表すために、この2つを別々の項目に入れておいた。後者の方は、単独で用いられている。その最初の例は、サワルが敵の配下に入ってしまう前に自分たちの側に引き入れようとアルタン・チェージが言う場面において用いられている（II/169頁）。

šaran zuryan miňyĕn baat'r bijären 黄色の6千勇者自身で
šald'g arv'n negĕn bijären 精鋭の11自身で

ここで補足しておくべきことは、『ジャングル』のなかで最も流布しているのがエーリャン・オヴランの語りであるために、サワルという勇者について、『ジャングル』における主要な勇者というイメージが一般的に強く存在しているということである。しかし、この章で初めてサワルはジャングル陣営に入り、しかも引用文の段階ではサワルがまだジャングル陣営に入っていない段階であることを考え合わせると、「11勇者」となっているのは、サワルを含んでいないからだという見方ができるであろう。しかしこの問題を考えるためには、もうひとつの場面を参照にする必要がある。それは、サワル征伐に行ったホンゴルがジャングルの後に起こされて次のように言っている場面である（II/171頁）。

arv'n negĕn bod'ñ bold'gni 11ボドン（猪）というのは
arv'n caĕan qury'nam'm mini 俺の10の白い指で
imrĕlyĕndĕ irĕgsĕn älmĕrmüd bišĕjĕ? ひねりつぶすためにやってきた輩ではないのか？

このホンゴルの発言からみると、「11勇者」と言ったのは、ホンゴルを含めなかった可能性もあることが理解される。この2つの可能性のどちらに信憑性があるかについてはにわかには判断しかねるが、ここでいえるのは次のことである。それは、サワルにしてもホンゴルにしても、両者とも『ジャングル』における主要な勇者であって、“12勇者”の「12」が人数を表す数詞である場合には、どちらも勘定に入っているも奇異とはしない勇者だということである。

これとの関連でこの章で指摘すべきことは、勇者の席次についての提示の仕方である。ここでは席次の叙述が3回現われるが、サワルがジャングル陣営に入った段階における3度目の叙述に初めてサワルに言及されており、左のドゴイラー（円陣）を統

率した旨が述べられている (II/180頁)。この表現は、3回の席次の叙述にすべて現われている右のドゴイラー (円陣) を統率したホンゴルについての表現と対になったものと考えられる。これらの表現だけを見ると、ホンゴルは右の第1席、サワルは左の第1席を占めたように見えるが、実際はアルタン・チェージが右を統率し、グンベが左を統率したと明確に述べられている (II/180頁)。しかも、アルタン・チェージやグンベについてのことは、ホンゴルとサワルが右と左のドゴイラー (円陣) を統率したという表現のすぐ直前に語られている (すなわち同じ箇所に見られている)。それゆえ問題は、アルタン・チェージが右を統率することと、ホンゴルが右のドゴイラーを統率することにどのような違いがあるのかということが定かではないということである。先の「11勇者」の問題は、こうした席次の問題とも関連づけて考察の必要があるように思われる。

第17話 シャル・ビルメス王のドーニー・ネルテイ兜, 襲撃するや打ちのめす剣の2つをホンゴルが取ってきた章 šar' birmës qaana duuni nertä duulq', dovt'iq'la cäkeldëg üldë qojriigë qoñy'riin avči irsën bөлëg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 21 カルムイクジャンガル25章本第17話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12ボドン」	II/191頁	1
	「12ボドンたち」	II/187頁	1
“6千12勇者”	「6千12」	II/183頁	1
	「6千ビーbij 12ボドンたちbod'ngud」	II/186頁	1

ここで挙げた事例は、すべて状況的にホンゴルを含んでいないと考えられるので、「12」は数詞ではなく、固有名詞として用いられていると考えられる。なお、この章に提示されている席次は第16話に準じる。

第18話 後 (北) 方角にいるシャル・ケルメン王の、珊瑚のたてがみをもち、真珠の尾をもつ、美しい鼻筋に白い毛の入っている茶の馬群をホンゴルが追った章 ar' üzëgtë bäädëg šar' kärmën qaana šur dältä , suvs'n süültä sääqën kürën

yalz'n adug' qoñy'riin köögsën bölg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 22 カルムイクジャングル25章本第21話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12大臣の息子たち säani kövüd」	II /204頁	1
	「12ボドンたち」	II /205頁	1
“6千12勇者”	「黄色の6千勇者たちよ、 選り抜きの 12ボドンたちよ」	II /204頁	1
	「巢の12ボドン、 黄色の6千勇者に」	II /208頁	1
	「黄色の6千勇者 自身で、選り抜きの 12ボドンとともに」	II /215頁	1
	「12大臣の息子たち säani kövüd, 黄色の6千勇者たちと」	II /208頁	1

“12勇者”の表現として、この章では「12大臣の息子たちsäani kövüd」と「12ボドンたち」という2種類の表現が現われている。だが、“6千12勇者”において用いられる「12ボドン」の3例が常に「6千勇者」と対に現われていること、そして、「12大臣の息子たち」は単独でも現われているが、“6千12勇者”の“12勇者”としても用いられていることをみれば、“12勇者”と見えている表現の背後には、“6千12勇者”という定型的語句の存在があることをうかがわせている。

“6千12勇者”の4例中3例（II /208頁2回および215頁）の“12勇者”には状況的にホンゴルが含まれていないので、これは固有名詞として用いられているということになる。なお、この章における席次の示し方は第16話や第17話に準じるものとなっている。また、“6千勇者”と対になっていない「12ボドンたち」は、ジャングルの呼びかけの台詞に次のように応対している（II /205頁）。

arv'n qoj'r bod'ngud mini bol'n 我が12勇者たちおよび
 alt'n čeeži övgën bol'n アルタン・チェージ老および
 cuyar tävži ögiitë みなでしきたり通りに行え

この表現の場合、「12ボドンたち」にはアルタン・チェージが含まれていないと考えられる。アルタン・チェージを含まない“12勇者”表現が存在することは、新疆ジャンガルの考察との関連でみれば重要な事例となる。だが、この事例において、アルタン・チェージを「12ボドンたち」のなかに数えないのは、「およびbol'n」という1語があるためであって、単なる呼びかけの形式にしていたとすれば、「12ボドンたち」に数えるということになる。この場合、アルタン・チェージにも「および」という語が付加されており、文意が曖昧になっているので、この違いは微妙な差と理解しなければならないだろう。この事例の前には「12ボドンたちよ」と呼びかけるジャンガルの言葉があることを考慮に入れば(II/204頁)、「および」というのは、単なる言い間違えであった可能性が充分ある。したがって、この事例は“12勇者”のなかにアルタン・チェージを含まない積極的事例とはなっていない。

第19話 5つの国(地方)で抜きん出たタク・ビルメス王の、藻の繁茂する湖の岸に自然に育った7万の選り抜き馬をサナルが襲撃し略奪してきた章 *tav'n or' yar'gs'n tak' birmēs qaana, zam'gta nuuriin kövädě zajadar öšëgsën dolan saj' tunžirmudyÿgě sanlyÿn dogd'lulži kööži avči irëgsën bölëg*

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 23 カルムイクジャンガル25章本第19話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12ボドン」	II /222頁, II /227頁, II /246頁, II /251頁	4
	「12怪物王の息子たち mañy's qaani kövüd」	II /237頁	1
“6千12勇者”	「黄色の6千勇者中 から、選り抜きの 12ボドンたち中から」	II /219頁2回, II /220頁, II /221頁, II /221-222 頁, II /230頁	6
	「巢の12ボドンたち および, 黄色の6千勇者たちは」	II /227頁	1

表22から、“12勇者”の表現は計5例、“6千12勇者”の表現が計7例あることになる。この章での特徴は、“勇者”表現において、12例のなかの1例以外すべて「12ボド

ン（たち）」を用いていることである。そして、その11例中の7例が“6千勇者”と対になって現われている。

これらのうち、特定の集団を指す固有名詞として用いられていると考えられるのは、サナルが、敵陣へ乗り込む前にジャングルや「12ボドン（猪）たち」と楽しんでから行く、と発言する場面で用いられる事例である（II/227頁）。サナル自身が発言しているのであるから、この「12ボドン」にサナルが入っていないことは明らかであろう。サナルをジャングルたちが見送る場面における「12ボドンたち」も、出陣するサナル自身が入っていないので、「12」は固有名詞として用いられているということになる（II/227頁）。ここではアルタン・チェージもまた含まれていないと考えられるが、アルタン・チェージが“12勇者”のなかに含まれないことは、新疆ジャングルの考察との関連で重要である。それゆえこの場面を以下に引用しておこう。

ezēn noj'n bogd' zañy'r bol'n 主君たる領主である聖なるジャングルおよび
alt'n küñkä čeeži övgēn bol'n アルタン・クンケ・チェージ老および
üürin arv'n qoj'r bod'ngud bol'n 巢の12ボドン（猪）たちおよび
šaran zuryan miñyēn baat'rmudni 黄色の6千勇者たちは
ut' ulan buur'l külgiini 「オト・オラーン・ボーラル駿馬の
sañnadni nar' uryaži 耳のあいだの毛に陽を照らせて
sans'n üülän kücäži 思い〔自分の目的〕を遂げて
säaqēn mendē iriič! 無事に来い！」

この事例において、問題の箇所は「およびbol'n」という1語のために、アルタン・チェージが“12勇者”のなかに数えられないということになっている。それゆえ、第21話でも述べたように、「および」というのは、単なる言い間違いであった可能性がある。こうした事例は、「巢の12ボドン／アルタン・クンケ・チェージ老および…」となっている事例にも同様のことが指摘できる（II/251頁）。したがって、この2例は“12勇者”の中にアルタン・チェージを含まない積極的事例とはなっていない。

また、サナルが含まれない事例は「12怪物王の息子たち」にもいえるので、これもまた特定の集団を指す固有名詞として用いられた“12勇者”の「12」であるということになる⁵⁵⁾。

第20話 アヨ・マンザン・ボーラルに乗った、アイフ・マンナ王の火花となったオランタイ・ナルニー・ゲレルという勇者がジャングルの特別な5つのものを要求しに来た章aju manzan buur'lta ääqē mañna qaani očin bol'gs'n ulanta narni

gerĕl gidĕg baat'ri žaňy'raqna šižtā tav'n jum' surži irĕgsĕn bōlēg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 24 カルムイクジャンガル25章本第20話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12タングチtaňy'ĕ」	II /258頁	1
	「12ボドン」	II /282頁	1
“6千12勇者”	「巢の12ボドンよ、黄色の6千勇者よ」	II /263頁	1
	「巢の12ボドンは、黄色の6千勇者とともに」	II /281頁	1
	「黄色の6千勇者自身で、選り抜きの12ボドンたちとともに」	II /261頁	1
?	「7千勇者たち」	II /258頁2回, II /259頁2回	4

表から、この章では、“12勇者”と“6千12勇者”という2通りの表現形式があるということがわかる。“勇者”という表現として「ボドン」が用いられるのは4例あり、そのなかの3例が「6千勇者」という表現と対に現われている。つまり、「ボドン」が単独で“12表現”として現われていたとしても、その背後には“6千12勇者”という定型句の存在があることを暗示させている。

数詞ではなく特定の集団を表す固有名詞として用いられていると考えられる事例は、“6千勇者”と対にされない“12勇者”の事例においてみられる (II /282頁)。これは、ホンゴルがジャンガルとその他の勇者に激怒している場面である。むろん状況から判断して、この「12ボドン」にホンゴルは含まれていないものと考えられる。なお、この章における席次の提示の仕方は第16話、第17話、第18話に準じるものとなっている。

この章において注目すべきは、敵陣の勇者についても“12勇者”という表現が用いられていることである (II /264頁, II /271頁, II /273頁4回, II /275頁2回)。しかも敵陣においても「アルタン・クンケ・チェージalt'n kūŋkā čeeži」という「アルタン・チェージ」に対応する人物が存在していることは特筆すべきことである (II /274頁)。この用法が偶然ではないとすれば、「アルタン・チェージ」という名前は固有名詞ではなく渾名であると解することになる。なお、「6千勇者」という数字が「7千勇者」

藤井 英雄叙事詩『ジャングル』における“12勇者”

といかなる関係にあるかは今後の課題である。ひとつだけいえることは、「7千勇者」というのはカルムイクジャンガルのなかでこの章にのみ登場する数字であるということである。

第21話 ホンゴルが9嫁夜叉の国に行って吸われた章 qoñy'riin jisēn berē jagcana or'nd'
oči šimūlsēn bōlēg

この章においては一度も“12勇者”の表現は現われない。

第22話 アランザル栗毛駿馬を盗んできたことについての章 ar'nz'lyyn qurd'n
zeerdiigē qulqa avсна tusk' bōlēg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 25 カルムイクジャンガル25章本第22話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12ボドン」	II /296頁	1
	「12」	II /307頁2回	2
	「11ボドン」	II /307頁	1

表のように、この章では唯一“12勇者”の表現が存在している。このほかに、勇者ではないが、「33ドゴイラー（円陣 duγu）」という表現が1度登場している（II /308頁）。この数字が“32勇者”や“35勇者”と関係があるのか否かはにはわかには判断しかねる。勇者表現について他の章との対比で述べれば、この章には“6千勇者”や“6千12勇者”という表現は現われない。

この章で最も注意を引くのは、「11ボドン（猪）」という表現である。これは、ジャンガルが危難にあっているホンゴルを「11ボドン」とともに助太刀に来ると語る場面で用いられている。ここではホンゴルを除外したために、“12勇者”が「11ボドン」となっているものと推測される。すなわち、ここでは“12勇者”は人数を表す数詞として用いられているということになる。この数詞としての用法は、すぐ後続する叙述にも踏襲されていると考えられる。そこでは「アラク・オラーン・ホンゴルの、ザンダン・ゾル后から生まれた息子と、12を統率して」とある（II /307頁）。ここではホ

ンゴルの代わりにその息子が登場しているために、先の「11勇者」が「12」となったということになる。すなわち、この「12」は人数を表す数詞だということになる。

だが詳細にみれば、実はこの数詞はそれほどすっきり用いられているとはいえない。なぜなら、今述べた「12」の箇所ของすぐ後には、「聖主ジャンガル様が、12とともに、ブフ・ムンゲン・シグシルゲとともに、アラク・オラーン・ホンゴルの、後ろに残してきた息子と一緒に戦った」とあるからである(II/307頁)⁵⁶。ブフ・ムンゲン・シグシルゲは、前述のごとく、ホンゴルの父親である。問題は、人数を表す数詞であったとする先に述べた2つの用法に沿うなら、ここでは「12」ではなく「13」となるはずだという点にある。ここではブフ・ムンゲン・シグシルゲが加わっており、明らかに1人多くなっているからである。つまり、「11勇者」の用法とそれに近接する2つの「12」の用法がうまく噛み合っていない。

この他に一度現われている“12勇者”表現は、ジャンガルがモンホーライに盗まれた自分の馬を誰が取り戻しに行くかを12ボドンに尋ね、これに対してホンゴルがそれを取り戻しに行くことになるという場面で現われている(II/296頁)。文脈からみると、「12ボドン」のなかにはホンゴルが含まれていると考えられる。ただし、この「12ボドン」の「12」が数詞なのか固有名詞であるのかは判断しかねる。もし、これを固有名詞と理解するのであれば、先の「11勇者」の用法とそれに後続する2つの「12」の用法との齟齬について、固有名詞の扱いであったものを数詞として語り手が解したためであるということになる。補足すべきことは、この章では勇者の席次についての紹介がなされていないということである。つまり、“12勇者”のなかにホンゴルが含まれるものとしての取り扱いについては一考を要するかもしれない。

第23話 ケー・シャル・ツォーホル馬に乗ったケルミンの息子モンフライと戦った章
 kee šar' cooq'r mörtä kermin kövün monqu'ala däälēldēgsēn bōlēg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 26 カルムイクジャンガル25章本第23話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“12勇者”	「12ボドン(猪) bod'ñ」	II/312頁, II/313頁	2
	「12ビー(自身) bij」	II/315頁	1

表のように、“12勇者”の表現は、「12ボドン（猪）」と「12ビー（自身）bij」という2つの形で現われている。注意を引くのは、これらの3例すべてが“6千勇者”と対にならないばかりでなく、この章には“6千12勇者”という表現が一度も現われていないことである。ただし、第22話でも登場した「33ドゴイラー（円陣）duyu」という表現は3例みえる（II/309頁，II/312頁，II/317頁）。「33ドゴイラー」が“32勇者”や“35勇者”と関連しているのかどうかについては、ここでも判断しかねる。3例観察される“12勇者”のうちその1例は、ジャングルの馬群を強奪したモンホーライをジャングルたちが追跡する場面に発されるジャングルの台詞において現われている（II/315頁）。ここにおいて、ジャングルは敵一人を追っているのだから“12ビー（自身）bij”で戦うよりも「一人一人行って戦おう nežādār orad, bāārē bārēldějē!」と呼びかけている。この表現から「12ビー（自身）bij」が複数いることは明らかで、したがって人数を表す数詞として用いられている可能性が高いといえる。

他方、この章では、固有名詞として用いられている例があるかどうかは判断しかねる。ちなみに、この章には勇者の席次の叙述がみられない。

第24話 聖なるジャングル様がアイフ・ドクシン・マンナ王と場所を奪い合った章

ald'r bogd' žaňy'raq'n ääqē dogš'n maňna qaanla bāārē bārēlděgsēn bölēg

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 27 カルムイクジャングル25章本第24話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“6千12勇者”	「6千12」	II/318頁, II/323頁, II/330頁, II/331頁, II/334頁	5
	「6千12バトル（勇者）」	II/334頁, II/337頁	2

“12勇者”表現が単独で現われず常に“6千勇者”という表現と対になって登場していることをみれば、この章では“6千12勇者”という一塊の語句が存在していることが暗示されている。“6千勇者”が単独で一度も現われないことは、そのよい傍証となっている。ただし、この“6千12勇者”の「12」についていえば、本章ではそれが現われている箇所の文脈の性格から、数詞なのか固有名詞なのかを判断するのは難しい。なお、この章には「42ドゴイラー（円陣）」という数字が出現し（II/319頁）、

これが先の章に出現していた「33ドゴイラー（円陣）」と関係しているのか否かという点も、今後検討の必要がある。

本論のテーマに関係し、また他の章との対比で指摘すべきことと考えられるのは、この章でアルタン・チェージに与えられている席次の位置についてである。アルタン・チェージの席次が右の第1席として安定していることについて前述したが、ここでは右ではなく、左の第1席に座っていることが観察される。これはカルムイクジャンガルで唯一の事例となっている。このことは、エーリヤン・オヴランの語る勇者の席次において曖昧にしか語られなかったミンヤンが右の第3席に座っていることと合わせて特筆すべきことである。

第25話 勇者オラーン・ホンゴルがアウランガ王と場所を奪い合った章 *baat'r ulan qoňy'r avl'ňy' qaanla bääre bäreldëgsën bölëg*

この章における勇者表現を示せば、次のようになる。

表 28 カルムイクジャンガル25章本第25話における勇者表現

表現	具体的表現	当該箇所	事例数
“35勇者”	「35勇者たち」	II/354頁, II/357頁, II/399頁	3
	「35ボドン（猪）」	II/356頁	1

この章には“12勇者”の表現は一度も現われない代わりに、“35勇者”という表現が4回現われている。だが、この“35勇者”について、本論でこれまで論じてきたようなやり方で数詞か固有名詞かを論じることは難しい。第24話と同様に、この章について指摘すべきことは、アルタン・チェージに与えられている席次が右の第1席ではなく、また第24章における左の第1席でもなく、左の第2席だという点である。アルタン・チェージに対するこうした席次の与えられ方は、カルムイクジャンガルにおいて唯一の事例である。このことは、カルムイクジャンガルにおいて初出の、それゆえ一度も席次を与えられなかったダラー・ダラー・セルデン *daraa daraa sel'dëňg* という勇者に右の第2席という席次が与えられていることと合わせて今後検討すべき課題といえる。

8.4 小 括

前節で扱った第1話～第5話はエーリヤン・オヴランよりも以前に採録された無名の伝承者の古いジャングルの記録であり、その他はエーリヤン・オヴラン以降に記録されたもので、どの語り手が語ったかが明確にわかっているものである。興味深いことは、エーリヤン・オヴラン以前の5つの記録から次のようなことが指摘できることである。それは、第1話～第3話では、“6千12勇者”という表現はないものの“35勇者”の表現があり、第4話や第5話では、“6千12勇者”という表現はあるけれども“35勇者”の表現はないということである。つまり、両者の表現はひとつの章に共存することはない。さらに詳細にみると、同じオイラト（西モンゴル）系モンゴル人といっても、第1話～第3話はドルベト集団の間で採録されたものであり、第4話と第5話はトルゲート集団の間で採録されたものだという違いが認められる。つまり、この事実から、“6千12勇者”と“35勇者”がひとつの章のなかで共存しないことの原因を、こうした伝承集団の違いに求める可能性がある。

この観点からエーリヤン・オヴランの語りをみてみよう。エーリヤン・オヴランの場合、圧倒的多数は“6千12勇者”という表現が現われているが、“35勇者”も出現していることが観察される。すなわち、“6千12勇者”と“35勇者”の表現が混在している。この事実からみれば、“6千12勇者”がトルゲート伝承で、“35勇者”がドルベト伝承であるとはいえないことになる。しかし、よくみれば、エーリヤン・オヴランの語りにおいては“35勇者”はホンゴルの婚姻譚である第12話にのみ現われていることに注意する必要があるように思われる。とくにこの章は、他の章が千行に満たないのに対して1607行という対照的に際立って長いものになっている点で注意を引いている⁵⁷⁾。問題は、「35ポドン（猪）」という表現がみえる同じ章に“6千12勇者”という表現も現われていることである。とはいえ、エーリヤン・オヴランはドルベト集団の出身であるから、先の議論に沿うと、“6千12勇者”ではなく、“35勇者”の表現が多くあっていいはずである。にもかかわらず、彼の圧倒的多数の章での勇者表現は“6千12勇者”の表現になっている。このことから、エーリヤン・オヴランの語りにおいて長さの点で際立っているホンゴルの婚姻譚はドルベト系の伝承で、その他はトルゲート系の伝承である可能性があるということになる。

ここで補足すべきことは、次のことである。それは、エーリヤン・オヴラン以前に採集されたという意味で古い伝承の状況を見ると、“12勇者”という表現はむしろ少数で、多くは“6千12勇者”という表現で現われていることである。このことをを考

慮に入れれば、エーリヤン・オヴランの語りにおける“12勇者”と“35勇者”との関係は、“6千12勇者”と“35勇者”との関係に移行させて論じる方が適切かもしれないということになる。これに関連して述べるなら、カルムイクジャンガル25章本の第1話において、“12勇者”と“35勇者”の表現が混乱して用いられていた事例を想起する必要があるかもしれない。なぜなら、この章においては“6千12勇者”という表現が一度も現われていなかったからである。つまり、“6千12勇者”という表現がもしあった場合、両者の混乱は起きなかったのではないかと推測されるのである。

“6千12勇者”の表現がトルグートに関係し、“35勇者”がドルベトに関係しているのではないかという推論は、第16話～第25話についても「概ね」できるように思われる。「概ね」というのは、以下の事情による。まず、トルグートで採集された第16話～第23話の8話の場合、“6千12勇者”という表現はあっても、“35勇者”は一度も現われないのに対して、ドルベトの伝承である第25話には“6千12勇者”の表現はなく、“35勇者”という表現が4回(Ⅱ/354頁, Ⅱ/356頁, Ⅱ/357頁, Ⅱ/399頁)出現していることが観察されるため、先の対応関係を仮定することができる。問題は第24話と第25話である。

第24話の場合、ドルベトに伝承されたということから、“35勇者”の出現が予期される章であるが、実際には“6千12勇者”という表現こそあれ、“35勇者”は一度も現われていない。それゆえ第24話は一見例外のようにみえる。だが、この章の内容がトルグートの伝承である第4話や第20話と関連していることは明らかであるので、この伝承はトルグートから持ち込まれた可能性が高いということになる(したがって例外ではないことになる)。これに関連して述べれば、第24話と第25話はドルベトの同一人物によって語られているにも関わらず、席次で紹介される勇者の順序は全く異なっていることが観察されることを付け加えておきたい。もし両者がももとの伝承集団を異にしていたと考えれば、このことはそれほど驚くべきことではないことになる。つまり、第24話はトルグート伝承、第25話はドルベト伝承と考えるのである。

ただし、この第24話と第25話はアルタン・チェージを唯一左側の第1席(第24話)や第2席(第25話)につかせている点で、明らかにカルムイクジャンガルにおける例外的章となっている。この事情は今後明らかにされる必要がある。したがって、“6千12勇者”はトルグート系で“35勇者”がドルベト系であるというのは、現時点では一応の目安に留めておくべき事柄であるということになる。

いずれにせよ、カルムイクジャンガルでは、“6千12勇者”が“12勇者”よりも定型句として安定しており、“12勇者”が突出していないことは重要な特徴といえる。

9 カルムイクジャンガルと新疆ジャンガルの考察からみた“12勇者”

9.1 カルムイクジャンガルの考察の新疆ジャンガルへの適用

カルムイクジャンガルにおける勇者表現を整理した段階で、もう一度新疆ジャンガルにおける“12勇者”表現を眺めると、どのようなことがいえるであろうか。カルムイクジャンガルで“12勇者”よりも“6千12勇者”が主流であったということをふまえてアリンピル氏のテキストに立ち戻るならば、アリンピル氏のテキストの場合、“6千12勇者”ではなく“8千12勇者”という表現が“12勇者”とは比較にならないほど頻出していることが観察される。アリンピルの語りについて具体的にみよう。先にみたように、およそ半数の章においてしか“12勇者”関連の表現が現われていないということを思い出すと、新疆ジャンガルにおいても“12勇者”というのは、少なくとも頻出する表現ではないといえそうである。“8千12勇者”（アリンピルの場合“6千12勇者”の“6千”は“8千”である）は、“12勇者”の出現している章においても存在しており、多くの場合、「アルズ酒の8千勇者（たち）araġa-yin naiman mingyan bayatur-uud」という表現で現われていることが観察される。具体的にみれば次の表のようになる。

表 29 章ごとにみた“8千勇者”と“12勇者”との関係

章	“8千勇者”の現われる事例数	“12勇者”と対に現われる事例数
1	12 ⁵⁸⁾	なし
2	なし	なし
3	1	なし
4	17	なし
5	6	なし
6	10	なし
7	11	3
8	13	2
9	13	2
10	18	2
11	17	6

12	10	1
13	14	なし
14	1	1
15	17	2
16	13	なし
17	19	4
事例数の合計	192	23

すなわち、「8千勇者（たち）」は計192例出現しており、その約8分の1の23例が“12勇者”と対に現われているということになる。すると、アリンピルの語りの場合、「8千勇者（たち）」が単独で用いられている事例数は、192から23を引いた169例となり、“12勇者”が用いられている44事例の約4倍の出現率をもっているということになる。

こうした新疆ジャンガルのアリンピルのテキスト状況をカルムイクジャンガルと比較すると、勇者表現は主に“8千勇者（たち）”と“12勇者”の2つの形態で現われているということになる。ただし補足すべきことは、出現率が低いとはいえ、アリンピル氏の語りには“6千12勇者”に対応する“8千12勇者”という表現が存在しており、カルムイクジャンガルと共通する表現形態をもっていることである。それゆえ、新疆ジャンガルにおいて席次を12人に近い人数に設定している点によく現われている“12勇者”へのこだわりの背景として、カルムイクジャンガルでは頻出するのが“6千12勇者”という一塊の表現であるのに対して、新疆ジャンガルのアリンピルの場合、“8千12勇者”が“8千勇者”と“12勇者”に分離してしまっていることが影響したのではないかと推測することができる。つまり、ひとかたまりの表現が分離したために、“12勇者”の存在が際立って意識されるようになったのではないかということである。

こうした視点から眺めるならば、“12勇者”の「12」が人数を表す数詞であると解して一人一人の名前を同定する作業の根拠が失われることになる。とはいえ、ここで指摘すべきことと思われるのは、たとえ“8千12勇者”を対象にすえたとしても、同様の分析となることである。なぜなら、先に記述したアリンピルの“12勇者”の幾つかの事例をもう一度よく眺めれば、厳密な形ではないが“12勇者”が“8千勇者（たち）”と対になって出現している事例がみえるからである。既述の44事例のうちそうした事例は〔1〕～〔6〕,〔8〕～〔10〕,〔12〕～〔15〕,〔17〕～〔21〕,〔23〕～〔29〕,

[32], [35] ~ [37], [42] の計30例存在することになり、全事例数のおよそ7割を占めている。こうした状況から、“8千12勇者”を想定することは無理なことではなく、その場合、“12勇者”の考察はそのまま“8千12勇者”の考察と重なっていく。

9.2 新疆ジャンガルの考察のカルムイクジャンガルへの適用

これとは反対に、新疆ジャンガルの考察をカルムイクジャンガルに持ち込むと、どのようなことがいえるであろうか。その前に新疆ジャンガルで明らかになったことを確認しておけば、以下の3つに要約できる。

1. “12勇者”の「12」は、人数を表す数詞ではなく、「12」と呼ばれる集団を指す固有名詞として用いられている。「12」と呼ばれる集団を構成する成員の数は、12人であってもよいが、必ずしも12人である必要はなく、基本的に人数とは無関係である。
2. 「12」が固有名詞として用いられる場合、「アルタン・チェージを念頭におく集団」もしくは「アルタン・チェージを念頭に置かない集団」といった2通りの集団の意味を想定できる。
3. “12勇者”の“勇者”にabayaオジが用いられる場合、アルタン・チェージという個人名称の代わりに用いられている可能性がある。

前述のように、カルムイクジャンガルにおいては“6千12勇者”という表現が“12勇者”よりも頻出しており、また、この“6千12勇者”は“6千”と“12勇者”に分離されうる。新疆ジャンガルの考察を参考にすると、カルムイクジャンガルの“6千12勇者”の成立背景についての見方を一新させることになる。すなわち、それは、新疆ジャンガルを通して“6千12勇者”の“12勇者”にアルタン・チェージの影を透かしみることである。この観点からみれば、カルムイクジャンガルにおけるアルタン・チェージが“12勇者”のなかに入っていない事例は確かに存在していたものの、よく検討してみると非常に不安定な用いられ方がされていたことは意味あることとして浮かび上がってくることになる。

それでは、“12勇者”の問題を「勇者の席次」の問題と絡めるとどのようなことがいえるだろうか。これについていえば、新疆ジャンガルでは“12勇者”の「12」が数詞として扱われていることは、直接的に席次の勇者の数が12人かそれに近い数で示されている点に如実に反映されているといえ、これはカルムイクジャンガルには

存在しない新疆ジャンガルの特徴といえる。むしろ、カルムイクジャンガルにおいても、“12勇者”を人数として解している痕跡はみられるものの、席次に言及される勇者とは完全に無関係なものとして伝承されていることが読み取れる。

“12勇者”の「12」について、新疆ジャンガルとカルムイクジャンガルに共通点があるとすれば、それは、数詞と固有名詞の用法が現象的には共存している点にある。両者について敢えて論理的な先後関係を想定してみる場合、「12人」と人数と解されていた数詞が「12」という固有名詞に変化したのか、逆に「12」という固有名詞がまずあって、それが次第に「12人」という人数を表す数詞として理解されるようになったのかを問うことになる。この場合、人数を表す数詞として解する方がより自然であり、アリンピル氏個人のなかでも「12人」の名前に齟齬がみられ、また語り手ごとに席次の人数と勇者の名前がほとんど一致していない状況を考え合わせると、後者の流れの方が伝承の実態に合致するものと考えられる。

10 隠喩としての“12勇者”

以上の議論を振り返ってみると、議論を最も複雑にしていた原因は、“6千12勇者”（もしくは“8千12勇者”）が「6千」（もしくは「8千」）と「12」とに分離可能であることから、この「12」について背後にある“6千12勇者”（もしくは“8千12勇者”）という表現を重視すべきであるのか、それとも分離可能であることを重視すべきであるのかを判断することが難しい点にあったといえるであろう。

ここまでの考察における意義は、「勇者の席次」を考慮に入れつつも、“12勇者”表現を直接それとは関連づけずに、“12勇者”表現が叙述のなかで具体的にどう用いられるかという面から論じたということにある。これは、「勇者の席次」が局部的に現われる不安定な箇所であるという認識にもとづいている。こうした考察は、『ジャンガル』における主要登場人物が誰であるのかというテーマに大きく関わっているが、素朴に自明視されている主要登場人物を「12人」とみなす見方に異議を唱える結果となった。とくに、本論で対象にすえたテキストは、主要勇者を「12人」として序の部分で明確に提示しており、またこれが新疆ジャンガルにおける現在のところ最も信頼できるテキストであることから、このことはより説得的に示されたと考える。

したがって、この結論にもとづけば、『ジャンガル』に述べられる「勇者の席次」は“12勇者”の問題とは切り離して考えるべきだということになる。これに関連づ

けて述べるならば、「勇者の席次」を叙述全体からみた場合、カルムイクジャングルにしても、新疆ジャングルにしても、章によって主に活躍している勇者の名前が席次に述べられないことや、主要な（と一般に考えられる）勇者でも席次に述べられない勇者が存在しているということが散見される。このことは、「勇者の席次」が一般に考えられているような単なる「勇者の紹介」とは異なる意味をもっている可能性を示唆するものといえる。たとえば、カルムイクジャングル25章本の第4話の〈ハル・キナスの章〉にはサナルというジャングル側の勇者がかなり活躍しているにも関わらず、この人物に席次は与えられていない。『ジャングル』に親しんだことのある者ならば、サナルがジャングル勇者のなかでホンゴルやサウルに匹敵する勇者であることを知っている。それゆえ、この事実が真に意味する物語上の意義を問う必要があるように思われる。

これに関連して指摘できることは、カルムイクのエーリヤン・オヴランの序においては、2つの章で主要勇者として語っているミンヤンという勇者に席次が与えられていないということである。左右の席に座る勇者の人数は同数であろうという憶測にもとづけば、席次の紹介がある直前にミンヤンが登場していることを考慮に入れて、勇者が座るべきなのに空席となっている右の第3席にミンヤンが配置されることが含意されているのだと考えるべきなのかもしれない。だが、この序が必ず各章が語られる前に語られる部分であることを考えると、ミンヤンが第3席に座る勇者として明示されないのも、やや不可解の観がある。それゆえ、今後の課題としては、勇者の叙述と章における勇者の活躍状況の相関関係を記述検討する必要があるように思われる。

以上の考察で興味深く思われるのは、ジャングルの側近にいる勇者でも武将というよりは知将ともいうべきアルタン・チェージの存在がクローズアップされたことであるといえるだろう。この段階で、冒頭に述べたアルタン・チェージの席次だけが新疆ジャングルとカルムイクジャングルに共通して安定しているという現象を振り返ってみると、興味深い。それは、アルタン・チェージが“12勇者”そのものである可能性と呼応しているからにほかならない。ここで生じる素朴な疑問は、なぜアルタン・チェージが「12」という数字で非明示的に表される必要があったのかということであろう。次節以降は、これについて考察していくことにしたい。

11 「12」が選択された理由

11.1 「12」と対比すべき数字

この問題を考える場合、「12」で表されねばならなかった（と考えられる）真意を知るためには、それと対比される何らかの語との関連で述べる必要があるように思われる。「12」が表向き数詞である数字であることから、ここで参考になると思われるのは、同じく表向きは数詞であるような数字である。その数詞とは「13」である可能性が高いのではなかと推測される。このような推測は、次のようなモンゴルにおける重要な儀礼を参照すると了解しうるものとなる。それは、内蒙古自治区の西部、黄河の大湾曲内に位置するオルドス地域におけるアラク・スウルデの儀礼における「13」という数詞の用いられ方である。周知のように、オルドスにおいてはチンギス・ハーンとその一族を対象とする祭祀が「八つの白い天幕」に関連する儀礼として数百年にわたって施行されてきた。この地域においては「八つの白い天幕」の祭祀以外にも複数の祭祀が存在し、アラク・スウルデは「八つの白い天幕」の儀礼とチンギス・ハーンの軍神ハラ・スウルデの儀礼を除けば最大級の祭祀儀礼であるとされている（楊 2001: 103）。この儀礼は平時にも祭祀儀礼がおこなわれているが、最も重要なものは12年に一度の寅年に盛大におこなわれる大祭である。

興味深いことに、現地においてはこの12年に一度の寅年を「13年に（一度の）寅年」というように語られるということである。これは偶然ではなく、オルドスにおける祭祀について研究をおこなったサインジャルガル氏とシャラルダイ氏の著作にも見えているほか（Sayinjiryal・Šaraldai 1983: 338）、楊海英氏の論文に頻出して述べられていることから明らかである（楊 2001: 84, 85, 87, 90, 98, 103）。干支は12年周期でめぐること考えれば、ここでは「12」というべきところを敢えて「13」と述べていることが理解される。祭祀の主宰者については、現在のところ、チンギス・ハーンの弟ジョチ・ハサルとする見解と、チンギス・ハーンの末子トロイ・エズンとする見解の2通りがあり定説をみていないが、いずれにしてもチンギス・ハーン一族である点からみて、この「13」は「12」よりも聖なる数字として用いられているのではないかと推測される。このことは、モンゴルの精神文化においては「13」を「12」よりも優位に置くことをうかがわせている。

「12」と「13」の対比と、後者を前者よりも優位にあるものと価値づけるチンギ

ス・ハーンに関連する祭祀の事例を本論の“12勇者”論に引きつけると、ここでなぜアルタン・チェージは「12」であって「13」ではなかったのかという疑問を引き起こすことになろう。強調すべきことは、「13」は唯一オールドスにおいて神聖な数字というわけではなく、英雄叙事詩においても聖なる数字として用いられていることである。とくに、オイラト（西モンゴル）英雄叙事詩においては、しばしば「主人公」が敵との戦いの前に「アルタイに13の香を燻らす」儀礼的行為をおこなっていることを指摘しておく必要がある。この表現は、アリンピルのジャングル・テキストでは不在であるが、一般に現実の地名である「アルタイ」と同義に解されている「孔雀アルタイtoyus altai」という表現がジャングルの故地として現われるので、この欠落はもしかしたら意味のある欠落かもしれない。

さらに、ここで指摘すべきことと思われるのは、「12」と対比されるべき数字として「13」が候補に挙がり、「11」が候補から漏れるという理由である。これについていえば、「11」は、モンゴル文化において一般に象徴的価値を担わされていない数字であるといわねばならない。『ジャングル』以外の英雄叙事詩においても「11」という数字は、前述のように、「12」のヴァリエントである以上の意味をもたされていない。また、アリンピルのテキストにも「11」は現われない。したがって、「12」と対比されるべき数字としては、「11」ではなく、「13」ということになる⁵⁹⁾。

11.2 アリンピルの17章本における「13」に関連する表現

「11」を候補から外したとしても、以上のような「12」と「13」の関係の述べ方は外在論的なものであり、この問題を厳密に扱おうとするなら、“12勇者”の問題を扱ったのと同様に、内在論的な方法論、すなわちテキスト内部においておこなう必要がある⁶⁰⁾。その場合、まずアリンピルのテキストにおいて「13」がどのように用いられているかを検討する必要がある。以下の表は、最初の章（第1章）から17章までの章および巻末の「ジャングルとホンゴルの讃歌」に登場する「13」の用いられる事例とそれに関わっている人物、そしてそのテキスト内部での位置と事例数を整理したものである。

表 30 アリンピルの17章本における「13」と関連する表現

	表現	当該表現に関連する人物	該当箇所	事例数 (94例)
最初の章	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	27頁上段2行目	3
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	30頁上段8行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ミンヤン	30頁上段21行目	
第2章	arban yurban soyuya (13牙)	ブフ・ムンゲン・シグシルゲ ※ホンゴルの父	41頁上段2行目	1
第3章	arban yurban soyuya (13牙)	アルタン・チェージ	58頁下段8行目	2
	arban yurban soyuya (13牙)	ザンダン・ゲーシ・エージ ※ホンゴルの母	60頁下段26行目	
第4章	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	64頁下段14行目	3
	arban yurban soyuya (13牙)	ホンゴル	70頁下段18行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ジャンガルor(and)ナチン・シオンホル・バートル	71頁下段27行目	
第5章	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ハーン・フブーン・ハンガル タイ・ウズウ ※敵の名前	77頁下段4行目	3
	arban yurba jil (13年)	エズン・シルヒ・アーヴ ※ジャンガルの祖先	80頁下段8行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	81頁下段4行目	
第7章	arban yurban soyuya (13牙)	アルタン・チェージ	95頁上段22行目	9
	arban yurban soyuya (13牙)	ジャンガル	95頁下段20行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホンゴル	104頁下段20行 目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ホンゴル	106頁上段16行目	
	arban yurba jil (13年)	ホンゴル	123頁上段25行目	
	arban yurba jil (13年)	ホンゴル	124頁上段23行目	
	arban yurba jil (13年)	ホンゴル	124頁下段14行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ブフ・ムンゲン・シグシルゲ	130頁上段1行目	
	arban yurba jil (13年)	ブフ・ツァガーン ※この人物は婚姻のさいのライバルであり、13年は明かにホンゴルに対比されている	130頁下段6行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	135頁上段6行目	
第8章	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	135頁上段22行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	135頁下段14行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホンゴル	138頁上段23行目	

第8章	arban yurban soyuyā (13牙)	シャル・エレーン・ハルツガイ ※ホンゴルが自分の手下にした敵の勇者	140頁下段15行目	8
	arban yurban soyuyā (13牙)	ホンゴルor(and)シャル・エレーン・ハルツガイ	148頁下段4行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	151頁上段7行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	フチ・イフテイ・アルタン・ソヨー ※敵の名前	151頁下段21行目	
第9章	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングル	173頁下段20行目	9
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	アガイ・シャブダル ※ジャングルの妻	175頁上段9行目	
	arban yurban kümün (13人)	グゼーン・グンベ	180頁上段2行目	
	arban yurban kümün (13人)	グゼーン・グンベ	180頁下段14行目	
	arban yurban birman (13バラモン)	グゼーン・グンベ	180頁下段18行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングル	181頁上段22行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	185頁下段25行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングル	187頁上段12行目	
第10章	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ゴナン・オラーン・ショブショール ※アルタン・チェージの息子	189頁下段15行目	7
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホンゴル	202頁上段8行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	208頁上段22行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	8千勇者 ※この8千勇者には「ジャングル率いる」という修飾語句がついている	212頁下段27行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	215頁上段4行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	215頁下段1行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングルとホンゴル	225頁上段16行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	230頁上段4行目	
第11章	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングル	233上段7行目	9
	arban yurban soyuyā (13牙)	ジャングル	234頁下段19行目	
	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	236頁下段19行目	
	arban yurban qayayul egüde (13ハガゴル扉)	ホンゴル	242頁下段27行目	
	arban gurba qoyuslaju ebkeged ([金の投げ縄を]13折りに畳んで)	ホンゴル	247頁下段2行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	ホンゴル	248頁上段12行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホンゴル	255頁上段6行目	
	arban yurban soyuyā (13牙)	ホンゴル	255頁下段8行目	

第12章	arban yurban soyuya (13牙)	アルタン・チェージ	262頁上段25行目	5
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ナラン・オラーン・バートル※敵の名前	267頁上段25行目	
	arban yurban luu-yin dayu (13龍の声)	ホンゴル	270頁下段15行目	
	arban yurban čakilyan (13龍の電光)	ホンゴル	270頁下段17行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ドクシン・ハル・サナル	272頁上段18行目	
第13章	arban yurban soyuya (13牙)	ホンゴル	275頁下段18行目	6
	arban yurban soyuya (13牙)	ジャンガル	281頁上段4行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ドクシン・ハル・サナル	281頁下段7行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ドクシン・ハル・サナル	287頁下段27行目	
	arban yurban qubilday (13変身する)	ホンゴル	291頁上段12行目	
第14章	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ドクシン・ハル・サナル	292頁下段2行目	8
	arban yurban qubilday (13変身する)	ホンゴル	295頁下段22行目	
	arban yurban soyuya (13牙)	ホンゴル	303頁上段3行目	
	arban yurban soyuyatu (13牙付き)	アルバン・ゴルバン・ソヨート (13牙付き) ※敵の名前	306頁下段22行目	
	arban yurban toluwayitu (13頭付き)	アルバン・ゴルバン・トルゴイト (13頭付き) ※敵の名前	306頁下段23行目	
	arban yurban soyuyatu (13牙付き)	13牙付き	307頁上段23行目	
	arban yurban toluwayitu (13頭付き)	13頭付き	307頁上段24行目	
	arban yurban soyuyatu (13牙付き)	13牙付き	308頁上段1行目	
第15章	arban yurban toluwayitu (13頭付き)	13頭付き	308頁上段2行目	7
	arban yurban soyuya (13牙)	ジャンガル	309頁上段8行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	アトガル・ハル・フブーン ※ジャンガルの息子として生まれるが実はジャンガルの敵エルゲー・ムンゲン・テバクを倒すために転生したジャンガルのオジである故アラシャン・ゲレルであることが物語で最終的に明かされている	325頁下段12行目	
	arban yurban qourtan (13害敵)		335頁上段2行目	
	arban yurban jiling (13矢)	天の使者とジャンガル	335頁上段3行目	
	arban yurban jiling (13矢)	※天の使者がジャンガルに13矢を与える。このとき、	336頁上段21行目	
	arban yurban jiling (13矢)	天の使者がジャンガルに13害敵がいることに言及する	336頁上段22行目	
第16章	arban yurban qourtan (13害敵)		336頁上段25行目	1
	arban yurban jiling (13矢)		336頁上段27行目	
第16章	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ジャンガルとアルタン・チェージとホンゴル3人の息子	346頁下段3行目	

第17章	arban yurban soyuqa (13牙)	ジャングル	361頁下段14行目	12
	arban yurban soyuqa (13牙)	ホンゴル	362頁上段17行目	
	arban yurban soyuqa (13牙)	アルタン・チェージ	363頁下段10行目	
	arban yurban soyuqa (13牙)	アルタン・チェージ	364頁上段19行目	
	arban yurban soyuqa (13牙)	8千勇者 ※これはジャングルに率いられたというような修飾語句が付されていない単独の表現として現われている。	364頁下段10行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホンゴル	367頁上段26行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホション・オラーン ※ホンゴルの息子	370頁下段19行目	
	arban yurban (13)	※敵のことを指しているらしいが、この敵に立ち向かうのがアルタン・チェージの息子であるアリヤ・ションホル	372頁上段6行目	
	arban yurban qas egüde (13玉扉)	ホション・オラーン	372頁下段23行目	
	arban yurban soyuqa (13牙)	ホション・オラーン	375頁上段10行目	
arban yurban qas egüde (13玉扉)	スヌンケイ ※敵の名前	382頁上段10行目		
arban yurban egüde (13玉扉)	ホンゴル	384頁下段7行目		
ジャングルとホンゴルの讃歌	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	390頁下段21行目	1

上記の表を頻出する表現順に配列しなおし、かつ当該表現に関わっている勇者の頻度順に内訳を示せば、次表になる。ただし、若干の表現はそのヴァリエーションと考えられる頻出する表現と同じグループに入れて▲の記号をつけて表し、当該表現に関わっている勇者の欄にも付した。また回数が同数のものは同じ順位を与えた。

表 31 「13」と関連する表現の種類・関わる勇者・頻度

順位	表現	当該表現に関わっている勇者	回数 (計94例)
1 (35例)	arban yurban soyuqa (13牙)	ジャンガル	9
		ホンゴル	7
		アルタン・チェージ	5
		ブフ・ムンゲン・シグシルゲ	2
		8千勇者 ※この8千勇者に「ジャンガル率いる」という修飾語句がついているものとそうでない例が一つずつあり	2
		ドクシン・ハル・サナル	2
		ミンヤン	1
		ホショーン・オラーン ※ホンゴルの息子	1
		ザンダン・ゲーシ・エージ ※ホンゴルの母	1
		シャル・エレーン・ハルツガイ ※ホンゴルの手下になる勇者	1
		ジャンガルor(and)ホンゴル	1
		ジャンガルとナチン・シオンホル・バートル	1
		ジャンガルor(and)シャル・エレーン・ハルツガイ	1
		フチ・イフテイ・アルタン・ソヨー ※敵の名前	1
		2 (18例)	arban yurban qas egüde (13玉扉)
ホショーン・オラーン ※ホンゴルの息子	2		
▲arban yurban qayayul egüde (13ハガゴル扉)	ドクシン・ハル・サナル		2
	アトガル・ハル・フブーン ※ジャンガルの仮の息子		1
	ゴナン・オラーン・シヨブシヨール ※ジャンガルの息子		1
	ジャンガルとホンゴルとアルタン・チェージの3人の息子		1
	アガイ・シャブダル ※ジャンガルの妻		1
	ハンガルタイ・ウズウ ※敵の名前		1
	ナラン・オラーン・バートル ※敵の名前		1
	スヌンケイ ※敵の名前		1

3 (17例)	arban yurba qubilday (13変身する)	ホンゴル	17
4 (5例)	arban yurban jil (13年)	ホンゴル	4
		エズン・シルヒ・アーヴ ※ジャンガルの祖先	1
5 (4例)	arban yurban jiling (13矢)	天の使者とジャンガル ※天の使者がジャンガルに13矢を渡す	4
6 (3例)	arban yurban kümün (13人) ▲arban yurban birman (13バラモン)	グゼーン・ゲンベ (内1回▲あり)	3
6 (3例)	arban yurban soyuyatu (13牙付き)	13牙付き (敵)	3
6 (3例)	arban yurban toluyayitu (13頭付き)	13頭付き (敵)	3
7 (2例)	arban yurban luu-yin dayu (13龍の 声) ▲arban yurban luu-yin čakilγan (13龍の電光) ※どちらを主とし従としてもか まわない	ホンゴル	2
8 (1例)	arban yurban (敵)	敵のことらしいが詳細は不明 ※この敵にアリヤー・ションホルが立ち 向かう	1
8 (1例)	arban yurban qoyuslaǰu ebkeged (〔金の投げ縄を〕13折り畳んで)	ホンゴル	1

上記の表をみると、表現として頻出している上位3位はarban yurban soyuyatu (13牙)の35例, arban yurban qas egüde (13玉扉)の18例, arban yurba qubilday (13変身する)の17例である。1位のarban yurban soyuyatu (13牙)は2位, 3位の表現の約2倍現われる点からみれば、圧倒的な頻度を誇っているといえる。だが、当該表現に関わっている勇者の内訳の頻度をみる場合、1位のarban yurban soyuyatu (13牙)が14種類に変化していること、また3位のarban yurban qas egüde (13玉扉)にしても10種類に変化していることに対比すれば、2位にあるarban yurba qubilday (13変身する)には全く変身形がみられず、ホンゴル勇者が常に関わっていることが示されている。この点で安定した定型句といえる。そして、この表現は例外なく次のような一連の句で構成されていることが観察される。

ayčim-un jaγur-a-du 一瞬にして
arban yurba qubilday 13変身する
ami ni biye-dü ügei 生命が身体にない

ayuu yeke kücütei 大いなる力強き

asar ulayan qongyur bayatur アサル・オラーン・ホンゴル勇者

この句における「13変身する」という表現は、「生命が身体にない」という表現とあいまって謎めいているが、本論の問題に照らし合わされる場合、暗示的なものになっているように思われる。というのも、この「13」の入った句が常にホンゴルに結びつけられているとすると、「13」はホンゴルの隠喩となっている可能性を指し示すからである。すると、アルタン・チェージの隠喩である可能性が高い「12」は、ホンゴルの隠喩である可能性の高い「13」と対比されているということになる。

アリンピルの3つのヴァリエントで座席をみた場合、ホンゴルは2つのテキストで左の第1席、もうひとつのテキスト（本論で使用しているテキスト）で左の第2席を占めているので、ホンゴルの座席は安定しているとはいいがたい。とはいえ、左の第1席、第2席という高位の座席を占めていることは動かしがたい事実である。それゆえ、ホンゴルを「13」にみたてるとは、右の座席の第1席として安定していて、「12」で表されていると考えられるアルタン・チェージに対比される場合、左のホンゴルを右のアルタン・チェージよりも上位に置く姿勢が示されることになる。これは、現実の生活世界において、右の座席が左の座席よりも上位に置かれることを考慮に入れると、意味のあることである。なぜなら、この隠喩で示される左右の座席の上下関係は、生活世界における上下関係を逆転させたものになっているからである。

だが、ここで問題は、もしそのような見方が許されるなら、頻度数が第1位にある arban yurban soyuya (13牙) における勇者の内訳で上位の3位につけているアルタン・チェージの事例が5例もあることをどのように説明するかという問題が立ち現われてくる。実際、このアルタン・チェージの事例以外にも関連する勇者がいること、そしてまた「13」が用いられるその他の表現にも関連する勇者がいることを考慮に入れると、「13」をホンゴルの隠喩と判定するにはさらに詳細な議論を要しているといわねばならない。それゆえ、以下、これについて考察してみたい。

11.3 「13」が指示する勇者

まず、口頭伝承の動態性を考慮に入れて、1例しかない事例を無視はしないが重視しない方針を採りたい。そうすると、最も頻度の多い事例である「13牙」において議論の俎上に挙がってくるのは、ジャンガル9例、ホンゴル7例、アルタン・チェージ5例、ブフ・ムンゲン・シグシルゲと8千勇者とドクシン・ハル・サナルの各2例ず

つということになる。ただし、1例しかないが、ジャングルとホンゴル両方が関わっている事例が存在していることを考えれば、潜在的には、ジャングルは9例にこの1例足した10例、ホンゴルは7例にこの1例足した8例とみなすことができる。同様に、1例しかない事例のうちの2例（ジャングルとナチン・シヨンホル・バトルの事例およびジャングルとシャル・エレーン・ハルツガイの事例）がさらにジャングルに関わっているので、この2例を10例に足して12例としてよいだろう。さらに、「8千勇者」の場合、「ジャングル率いる」という修飾語句がついものが1例あるので、ジャングルの事例にこれも含めて計13例としてよいだろう。すると、この2例の「8千勇者」は1例となり考察から除外されることになる。整理すると、1位のジャングルが12例、2位のホンゴルが8例、3位のアルタン・チェージが5例、プフ・ムンゲン・シグシゲ（ホンゴルの父）とドクシン・ハル・サナルが2例ずつということになる。

先に触れたように、ここにはアルタン・チェージが5例あるため、「13」をホンゴルに結びつけることを躊躇させるのであるが、これを論じるには、頻度で7位につけている *arban yurban luu-yin dayu*（13龍の声）と *arban yurban luu-yin čakilyan*（13龍の電光）の2例を参照にする必要があるように思われる。両者ともホンゴルに関わっているのであるが、この表現を *arban yurban soyuya*（13牙）についてのホンゴルの事例のひとつである303頁上段3行目付近の語句と比べると、重大なことが暗示されているのである。303頁上段3行目付近の語句は次のようになっている。

asar ulayan qongyur ni アサル・オラーン・ホンゴルは
luu kebtei kürjinged 龍のごとくゴロゴロと鳴って
arban yurban soyuya ni tačiginayad 13牙がキリキリと鳴って

この場面の描写をみると、頻度で7位につけている *arban yurban luu-yin dayu*（13龍の声）と *arban yurban luu-yin čakilyan*（13龍の電光）の2例は、もともと頻度で1位につけている *arban yurban soyuya*（13牙）の表現の「13」が「龍のごとくゴロゴロ鳴って」の「龍」に連合された結果出てきたものである可能性を示している。そうすると、*arban yurban soyuya*（13牙）の表現はホンゴルと元来結合していた可能性が高いということになる。とはいえ、龍の表現と結びついた *arban yurban soyuya*（13牙）はこの2箇所だけに現われているので、その他33事例の *arban yurban soyuya*（13牙）の箇所がどのようになっているかを以下の表に示してみたい。

表 32 龍の表現と結びついていない arban yurban soyuyā (13牙) の表現

通し番号 章	表現	人物	当該箇所
No.1 最初の章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū ni eriyegčiregsen 大きな黒目がにごって	ミンヤン	30頁上段8行目～ 9行目
No.2 第2章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan čay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ブフ・ムンゲン・シ グシルゲ	41頁上段2行目～ 4行目
No.3 第3章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidūn dūribkiged 大きな黒目がちらちらとして	アルタン・チェージ	58頁下段8行目～ 9行目
No.4 第3章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū-eče ni 大きな黒目から rasiyan qara nilbusun sačuydayad 聖水の黒涙がこぼれて	ザンダン・グーシ・ エージ	60頁下段26行目～ 61頁上段1行目
No.5 第4章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がきりきりと鳴って asar qara nidū ni būriyegčireged 大きな黒目がとろんとして	ホンゴル	70頁下段18行目～ 19行目
No.6 第4章	dakin arban yurban soyuyā ni qargiyad 再び13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan čay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ジャングルとナチ ン・シヨンホル・ バートル	71頁下段27行目～ 72頁上段2行目
No.7 第7章	arban yurban soyuyā mini qargiyad 私の13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū-ber-iyen 大きな黒目を qarban qaliyaysan čay-tu mini 私が射ぬくように見つめたとき	アルタン・チェージ	95頁上段22行目～ 24行目
No.8 第7章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū ni eriyegčireged 大きな黒目がにごって	ジャングル	95頁下段20行目～ 21行目
No.9 第7章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidū ni eriyegčireged 大きな黒目がにごって	ホンゴル	106頁上段16行目 ～17行目

No.10 第7章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan çay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ブフ・ムンゲン・シ グシルゲ	130頁上段1行目～ 3行目
No.11 第8章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-eçe ni 大きな黒目から rasiyan qara nilbusun saçuydayad 聖水の黒涙がこぼれて	シャル・エレーン・ ハルツガイ	140頁下段15行目 ～17行目
No.12 第8章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan çay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ホンゴルor(and) シャ ル・エレーン・ハル ツガイ	148頁下段4行目～ 6行目
No.13 第9章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni eriyegçireged 大きな黒目がにごって	ジャングル	181頁上段22行目 ～23行目
No.14 第9章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-eçe ni 大きな黒目から rasiyan qara nilbusun saçuydayad 聖水の黒涙がこぼれて	ジャングル	187頁上段12行目 ～14行目
No.15 第10章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan çay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ジャングル率いる8 千勇者	212頁下段27行目 ～213頁上段2行 目
No.16 第10章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen qoyayula 大きな黒目で二人で qarban qaliyaysan çay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ジャングルとホンゴ ル	225頁上段16行目 ～18行目
No.17 第11章	arban yurban soyuyā mini qargiyad 私の13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen 大きな黒目で qarban qaliyaysan çay-tu mini 私が射ぬくように見つめたとき	ジャングル	233頁上段7行目～ 9行目

No.18 第11章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がギリギリ鳴って asar qara nidü ni ergiče-ber大きな黒目がぐるりと araja-yin naiman mingyan bayatur-uud-iyān アルズ酒の8千勇者たちを yurban dakiyad 3度 ergigülün qaliyaşsan čay-tu ギョロリと見つめたとき	ジャンガル	234頁下段19行目 ～23行目
No.19 第11章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen大きな黒目で qarban qaliyaşsan čay-tu 射ぬくように見つめたとき	ホンゴル	248頁上段12行目 ～14行目
No.20 第11章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged 大きな黒目がにごって	ホンゴル	255頁下段8行目～ 9行目
No.21 第11章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen大きな黒目で qarban qaliyaşsan čay-tu 射ぬくように見つめたとき	アルタン・チェージ	262頁上段25行目 ～27行目
No.22 第12章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がギリギリ鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged 大きな黒目がにごって	ドクシン・ハル・サナル	272頁上段18行目 ～19行目
No.23 第12章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged aldal 大きな黒目がにごって、まちがい	ホンゴル	275頁下段18行目 ～19行目
No.24 第13章	arban yurban soyuyā ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidün-ü-ben ergiče-ber 大きな黒目をぐるりと araja-yin naiman mingyan bayatur-uud-iyān アルズ酒の8千勇者たちを asar qara nidün-ü-ben ergiče-ber 大きな黒目をぐるりと qaliyaju ireged 見つめてくると	ジャンガル	281頁上段4行目～ 8行目
No.25 第13章	arban yurban soyuyā ni tačiginayad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged大きな黒目がにごって	ドクシン・ハル・サナル	281行目下段7行目 ～8行目

No.26 第14章	arban yurban soyuqa ni tačiginayad 13牙がキリキリと鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged eriyegčireged 大きな黒目がにごって, にごって	ホンゴル	303頁上段3行目～ 4行目
No.27 第14章	arban yurban soyuqa ni tačiginayad 13牙がキリキリと鳴って asar qara nidü ni eriyegčireged 大きな黒目がにごって	ジャングル	309頁上段8行目～ 9行目
No.28 第17章	arban yurban soyuqa ni tačiginayad 13牙がキリキリと鳴って asar qara nidü ni büriyegčireged 大きな黒目がとろんとして	ジャングル	361頁下段14行目 ～15行目
No.29 第17章	arban yurban soyuqa ni tačiginayad 13牙がキリキリと鳴って asar qara nidü ni büriyegčireged 大きな黒目がとろんとして	ホンゴル	362頁上段17行目 ～18行目
No.30 第17章	arban yurban soyuqa ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni büriyegčireged 大きな黒目がとろんとして	アルタン・チェージ	363頁下段10行目 ～11行目
No.31 第17章	arban yurban soyuqa ni tačiginaba 13牙がキリキリと鳴った asar qara nidü ni büriyegčirebe 大きな黒目がとろんとした	アルタン・チェージ	364頁上段19行目 ～20行目
No.32 第17章	arban yurban soyuqa ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü ni büriyegčireged 大きな黒目がとろんとして	8千勇者	364頁下段10行目 ～11行目
No.33 第17章	arban yurban soyuqa ni qargiyad 13牙がギリギリと鳴って asar qara nidü-ber-iyen 大きな黒目で qusi Yun ulayan köbegün ホション・オ ラン息子が qarban qaliyaşan çay-tu 射ぬくように見 つめたとき	ホション・オラ ン	375頁上段10行目 ～13行目

以下、上の表を参考にしながら、頻度の多い表現順に、考察を進めていくことにしたい。

●第1位 arban yurban soyuqa (13牙) の場合

上記の表から、それぞれに幾つかのヴァリエントをもちつつも、33例の arban yurban soyuqa (13牙) は大きく3つのタイプに分かれることが観察される。それはNo.1のタイ

プ、No.2のタイプ、そしてNo.4のタイプである。これらはほとんど定型句として利用されていることがわかる。ただし、No.18とNo.24以外はNo.1とNo.2のタイプのどちらにも似ているが、完全には定型句にはなっていないといえる。こうした違いはあるが、arban yurban luu-yin dayu（13龍の声）とarban yurban luu-yin čakilyan（13龍の電光）の2例と比較した場合、上記の33例には大きな共通点がある。それは、これらがすべて「齒」に関する句と「眼」に関する句との対句的組み合わせであるということである。

以上により、もともと「ホンゴル」と「13牙」とが結びつけられていたものの、次第に別の勇者にも付されるようになった理由が推察できるようになる。つまり、「齒」と「眼」の対句性が定型句としての地位を固めていくなかで、ホンゴルと「13牙」の結びつきが薄くなり、最終的にはジャンガルやアルタン・チェージなどの主要な勇者にも「13牙」の表現が結びつけられるようになったのではないかということである。とはいえ、この定型句が完全なる地位を確立するに至っていない場合は、「齒」と「眼」の対句がひとつのタイプだけではなく3つのタイプがあって複雑であることと、ひとつのタイプ内においても用いられる語が微妙に異なることに現われているように思われる。おそらく、No.18やNo.24などの事例は、これらが確固たる定型句ではないことの証拠となっているのである。また、だからこそ2例という少なきではあっても、「ホンゴル」と「13牙」との結びつきの痕跡がわずかに残っているのであろう。これらのことは口頭伝承の共時的様態をよく表しているといえよう⁶¹⁾。

●第2位arban yurban qas egüde（13玉扉）の場合

arban yurban qas egüde（13玉扉）の場合、18例中1例しかない事例を除くと、この扉を開く行為をおこなう人物が、ホンゴルとなっているのが7例、ホション・オラーンとなっているのが2例、そして同じくドクシン・ハル・サナルとなっているのが2例ある。ここから、ホンゴルに関わっているものが多いといえる。ホション・オラーンはホンゴルの息子であるので、ホション・オラーンの事例はホンゴルの延長上にあるものとして理解して大過ないものと思われる。問題は、ドクシン・ハル・サナルの2例であろう。実は、このことは、先の「13牙」の事例についての状況とパラレルになっている。すなわち、「13牙」の場合、ブフ・ムンゲン・シグシルゲとドクシン・ハル・サナルの事例が2例ずつあり、そこにおいてはブフ・ムンゲン・シグシルゲはホンゴルの父なのでホンゴルの延長上で考えられるが、ドクシン・ハル・サナルの2例は直接説明できないのである。サナルはジャンガル陣営でも主要な勇者であるが、サナルと対でしばしば登場するサワルがいずれの表においても現われないた

め、「13牙」と「13玉扉」に関連するサナルの2例は何か理由があるものと推測される。これについては、グゼーン・ゲンベについて検討する際に触れることにしたい。

●第3位 *arban yurba qubilday* (13変身) の場合

前述のように17例中すべてホンゴルに関わる。

●第4位 *arban yurban jil* (13年) の場合

arban yurban jil (13年) は5例ある。このうちの4例はホンゴルに関連しているので、「ホンゴル」と「13」の結びつきを肯定するものとなっている。

●第5位 *arban yurban jiling* (13矢) の場合

arban yurban jiling (13矢) は4例ある。すべて「天の使者とジャングル」に関わっており、ホンゴルに関わっていないので、これは「ホンゴル」と「13」の結びつきを肯定する例にはなっていない。ただし、これについては、次の *arban yurban kümün* [birman] (13人 [バラモン]) の場合を考察した後で触れることにしたい。

●第6位 *arban yurban kümün* [birman] (13人 [バラモン]) の場合

arban yurban kümün [birman] (13人 [バラモン]) は3例ある。すべてグゼーン・ゲンベに関わって登場していることが観察されるので、ここでも「ホンゴル」と「13」の結びつきを示唆していないということになる。しかし、グゼーン・ゲンベが「13」で表されることは、アルタン・チェージとの関係で考えると意味がある。なぜなら、アリンピルの17章本テキストの冒頭部において、グゼーン・ゲンベは右の第1席を占めるアルタン・チェージの次の席、すなわち右の第2席を占めているからである。アリンピルの3つのヴァリエントにおいてグゼーン・ゲンベの席次は共通しており、安定したものと考えられる。それゆえ、「13」と標識づけることにより、このグゼーン・ゲンベを表向きグゼーン・ゲンベよりも地位が高い第1席の「12」で標識づけされているアルタン・チェージよりも上位に位置づけさせることになる。つまり、ここには表向きの席次の序列が、隠喩では逆転されている可能性がある。

グゼーン・ゲンベの議論をふまえると、宙吊りしておいたドクシン・ハル・サナルの問題を関連づけて論じることができるようになる。というのも、サナルは右の第2席のグゼーン・ゲンベの次の席、すなわち右の第3席に座っているからである。サナルの席次もまたアリンピルの3つのヴァリエントで一致しているので、安定したもの

だと考えられる。つまり、グゼーン・グンベやサナルが「13」に標識づけられる背景には、右の座席における隠された席次争いを見て取ることができる。

以上をまとめると、ホンゴルが「13」で標識づけられる場合には、ホンゴルとアルタン・チェージとの左右の座席争いを、グゼーン・グンベやサナルが「13」で標識づけられる場合には、同じ右の座席におけるグゼーン・グンベやサナルとアルタン・チェージとの上下の座席争いを示唆していることになる。

ここで問題は、「13」がホンゴルだけでなく、グゼーン・グンベやサナルの隠喻にも用いられているとすると、ひとつの数字が複数の勇者と対応することになり、隠喻を弱めることになるのではないかと思われる点である。この観点から指摘しておくべきことは、「13」に関連づけられるグゼーン・グンベが17章本の第9章でしか現れないということであろう。そして、この第9章は「シャル・グルグの章」であり、これは、内容的な近似性をみると、カルムイクジャンガルにも存在している「シャル・グルグの章」とヴァリアント関係にあるものと考えられる。既述のように、カルムイクジャンガルの「シャル・グルグの章」はトルゲート系ではなく、ドルベト系の伝承である可能性が高い。

カルムイクジャンガルの「シャル・グルグの章」場合、アリンピルの「最初の章」における席次とは異なり、前述のように、グンベは左の席の第1席に座しており、ホンゴルは第2席を占めている。この場合、グンベが「13」で標識づけられるとすると、グンベは「12」で標識づけられるアルタン・チェージと左右の座席の上下関係を争っているということになる。

これらを整理すると、アリンピルのテキストの場合には、グンベは同じ右の座席内においてアルタン・チェージと座席を競っているのであるが、カルムイクジャンガルの場合、左右の座席の上下関係を競っていることになる。

アリンピルのテキストとカルムイクジャンガルのテキストとの対比から暗示されていることは、当該伝承がトルゲート系かドルベト系かによって、「13」で標識づけられる勇者が異なるという可能性である。そうすると、次のようなことが問題になってくる。それは、カルムイクジャンガルのホンゴルの婚姻譚がドルベト系である可能性を前述の考察で論じた以上、アリンピルのテキストにおける第7章のホンゴルの婚姻譚についてもドルベト系の伝承である可能性が浮上してくることである。つまり、第7章のホンゴルの婚姻譚において、「13」で標識づけられるのはグンベであることが期待されるのに、実際はそうなっていないことである。しかし、カルムイクジャンガルおよび新疆ジャンガルともに、ホンゴルの婚姻譚にグンベは登場していないので、

實際上、その齟齬は表面には現われないことになる。この問題はさらに考察する必要があるが、少なくともここで重要なことは、同一の章において「13」で標識づけられる勇者が1人であって、複数存在しないという点であろう。すると、むしろ確かめる必要があることは、第9章の「シャル・グルグの章」とその他の章で、「13」での標識づけに関してグゼーン・ゲンベとホンゴルの競合がみられないかどうかである。

これをみるために、アリンピルのテキスト第9章の「シャル・グルグの章」において、「13」で標識づけられる勇者が複数存在しないかどうかを検討すると、この章においては「13」がゲンベに関連づけられ以上、ホンゴルが「13」に関連づけられてはならないのであるが、ホンゴルに関連づけられる「13変身」の事例が1例観察される。つまり矛盾が生じていることになる。とはいえ、たしかに「13変身」という表現はホンゴルの描写に安定して用いられるものではあるが、この表現が物語の展開に果たす役割はとくに認められないことを指摘しておきたい。いずれにしても、1例しかないので無視することができる。

これに対して、グゼーン・ゲンベの事例は物語の展開と関わっていることが観察される。したがって、「シャル・グルグの章」において矛盾を生じさせている「13変身」の1例は、他の章における慣用的用法の影響であるとみなすことができるように思われる。この事例とは逆に、第9章以外の章において、「13」で標識づけられる勇者はホンゴルしかいないということが観察されるので、問題はない。

ところで、カルムイクジャングルにおいては「シャル・グルグの章」でサナルには席次が与えられていないので、サナルについては何ともいいがたい。

●第5位arbanŷurban jiling (13矢) の場合

この「13矢」は、頻度第6位の「13害敵」を討たせるため、天の使者がジャングルに贈るものである。このことを重視すると、「13矢」と「13害敵」の2つは密接に関わっていることが推測される。「13矢」の事例は第15章にのみ出現しており、当該章にはホンゴルに結びつけられる13関連の語が一度も出現しない。すると、「13矢」の場合、ホンゴルやゲンベ以外に「13害敵」と呼ばれる人物がいる可能性を示している。しかし、ここでの「13害敵」の「13」については、「12勇者」と同様の問題がある。すなわち、これが数詞であるのか固有名詞であるのかをすぐに判断できない。このことを重視すれば、この「13害敵」をホンゴルの隠喩とみなすこともできる。

とくに、この章においては次のような内容があることを指摘する必要がある。当該章では、ジャングルのオジの転生でジャングルの息子として生まれるアトガル・ハ

ル・フブーンが、ジャンガルの敵であるエルグー・ムンゲン・テバクを討った後、ホルモスタ天に射殺される。これに対して、ホンゴルはホルモスタ天の仕打ちに怒り、報復の戦いを挑もうとする。天の使者の説明によれば、アトガル・ハル・フブーンはエルグー・ムンゲン・テバクを征伐するためにだけ転生したジャンガルのオジであるので、天によって抹殺されるのは宿命である。この展開から暗示されているホンゴルとホルモスタ天の対立性を重視すれば、ホンゴルを「13害敵」とすることは奇異なことではない。ここでホンゴルを隠喩で表す背景には、ホンゴルがジャンガルの片腕的存在であり、かつアル=ボムビーン=オロンの救世主的勇者である表層の印象に大きく反しているという事情があるように思われる。

ちなみに、この「13矢」が「一本一本の矢nige nige jiling」と表現されている点からみて、伝承者自身は「12勇者」と同様に、これを数詞として解釈していることが理解される。

●第6位arban yurban soyuyatu (13牙付き) の場合

「13害敵」の議論の延長上で考えれば、敵の名前として登場する「13牙付き」という人物がホンゴルを指示している可能性はあるとみてよい。とくに、「13牙付き」と頻度第1位の「13牙」の2つは近似しており、頻度第1位の「13牙」がホンゴルを示している可能性が高かったことを考慮に入れれば、「13牙付き」という敵をホンゴルの隠喩としてみなすことは、可能性として高いように思われる。前述と同様に、ここでホンゴルを隠喩で表す背景には、ホンゴルがジャンガルの片腕的存在であり、かつアル=ボムビーン=オロンの救世主的勇者である表層の印象に大きく反しているという事情があるように思われる。

ところで、同じく敵の名前として登場している「13頭付き」は、「13牙付き」と常に対句的に叙述されており、一見別人のような取り扱いであるが、両者を同格とみなして実際は同一人物を指すと考えることもできる。アリンピルが勇者を複数形で語っているところをみると、伝承者は別人として理解していることになる。だが、この問題を論じるには、「13牙付き」と「13頭付き」が後続の部分でいつのまにか何らの説明もないまま「35頭付きのゴドマン黒怪物」と「25頭のホトホル黒怪物」に変換されている事情を知る必要があるだろう。

●第6位arban yurban toluwayitu (13頭付き) の場合

前述の「13牙付き」の項を参照。

● 第7位 *arban yurban luu-yin dayu* (13龍の声) の場合

頻度1位の「13牙」の項を参照。

● 第7位 *arban yurban qourtan* (13害敵) の場合

頻度第5位 *arban yurban jiling* (13矢) の場合の項を参照。

以上、口頭伝承の動態性を考慮に入れて、2例以上ある「13」関連の表現をすべて検討した。その結果、「13」で標識づけられる勇者として挙げうるのは、ホンゴルとグゼーン・グンベということになる。しかし、この2人の勇者が同じ章で同時に標識づけられるということではなく、グゼーン・グンベは「シャル・グルグの章」のみで標識づけられている。敵の勇者を指示する際に「13」が付されている場合にはまだまだ議論の余地があるものの、先に言及したオルドス地方のアラク・スウルデ祭祀について、次のようなことを参考のために補足しておきたい。ホルツバートル氏およびウズム氏によると、「寅の年から寅の年までの13年に西南の方角に黒山羊の妖魔敵が出てくる」ので、この儀礼は黒山羊の妖魔敵を征伐するために出陣するという意味が込められているという (Qurčabayatur・Üjem 1991: 82)。明言されていないが、これは現地からの聞き取り情報にもとづくものらしい。こうした情報にもとづくと、祭祀における「13年」という表現は神聖な年でもあるが、同時に敵とも結びつけることができるものとなっているのである。

12 17章本における“12勇者”以外の「12」関連の表現

以上、アリンビルの17章本における「13」のついた表現をすべて検討した。この「13」は、“12人勇者”の「12」との関連で候補に入れられた数字であった。振り返ってみると、「12」のつく表現については“12勇者”しか考察しなかったので、以下においては、“12勇者”以外の「12」関連の表現をみておきたい。

「12」は次の4通りの用法のみ現われている。それは、*arban qoyar isitei bilig-ün sira čoqor ildü* (12突起付きの陰陽の黄縞剣)、*arban qoyar alda bilig-ün sira čoqor ildü* (12尋の陰陽の黄縞剣)、*arban qoyar jil* (12年)、*arban qoyar sara* (12ヶ月) である。最初の「12突起付きの陰陽の黄縞剣」は計22例、*arban qoyar alda bilig-ün sira čoqor ildü* (12尋の陰陽の黄縞剣) は1例、「12年」は2例、「12ヶ月」は1例ある。前後の表現から、「12突起付きの陰陽の黄縞剣」と「12尋の陰陽の黄縞剣」、そして「12年」と「12ヶ月」は

それぞれ互いにヴァリエーション関係にあることがわかる。それゆえ、「12」は「13」よりも限定されて用いられているということになる。とくに、「12突起付きの陰陽の黄縞剣」が主要な事例であるということになる。次表においては章ごとに提示することにした。

- arban qoyar isitei bilig-ün sira čoqor ildü (12突起付きの陰陽の黄縞剣),
arban qoyar alda bilig-ün sira čoqor ildü (12尋の陰陽の黄縞剣) の場合

表 33 章ごとにみた「12突起付きの陰陽の黄縞剣」と「12尋の陰陽の黄縞剣」

章	人物	当該箇所
最初の章	ホンゴル ※ホンゴルの息子であるホション・オラーンの説明においてホンゴルに関連づけられて言及されている	34頁下段8～9行目
第3章	ホンゴル ※ホンゴルがジャンガルの矢を抜いてくれるように母に頼むさいに言及されている	60頁下段14～15行目
第4章	ホンゴル ※ホンゴルがサワル征伐に行くさいの描写箇所で用いられている	71頁上段17～18行目
第6章	ホンゴル ※ホンゴルがアリヤー・モンフライという敵を征伐するさいの描写箇所で用いられている	89頁下段25～26行目
	ホンゴル ※ホンゴルがアリヤー・モンフライという敵を切るときに用いている	90頁上段9～10行目
	アリヤー・モンフライ ※アリヤー・モンフライがホンゴルを切るときに用いている	90頁上段16～17行目
第7章	ホンゴル ※ホンゴルがトゥムル・プスという婚姻のライバルを切るときに用いている	102頁上段1～2行目
第8章	ホンゴル ※ホンゴルがサンサル・ハル・パートルを切るときに用いている	147頁下段22～23行目
	ホンゴル ※フルフリート・アルタン・ソヨーの軍隊と戦うときに用いている	154頁上段20～21行目
第9章	ジャンガル ※ジャンガルが息子の臍の尾を切るのに用いている	176頁下段19～20行目
第10章	ジャンガル ※ジャンガルがホンゴルを救出するために用いている	224頁上段21～22行目
	ジャンガル ※ジャンガルがホンゴルを救出するために用いている	224頁下段18～19行目

第11章	ジャンガルとホンゴル ※ジャンガルがホンゴルに渡す	241頁上段3～4行目
	ジャンガルとホンゴル ※ジャンガルがホンゴルに渡す	241頁上段18～19行目
	ジャンガルとホンゴル ※ジャンガルがホンゴルに渡した剣であることを明記している	245頁下段15～16行目
第13章	サナルとホンゴル ※サナルが出陣する際にホンゴルがもっていくように与えている	283頁下段20～21行目
	サナル ※サナルが使っているが、ホンゴルが与えたと明記している	286頁上段19～20行目
	サナル ※サナルが使っているが、ホンゴルが与えたと明記している	286頁上段27～下段1行目
第14章	ホンゴル ※ホンゴルが味方に引き入れたハーン・シール・フブーンと一緒に13牙付き・13頭付きという敵と戦うときに用いている	308頁上段17～18行目
	ホンゴル ※同上	308頁上段25～26行目
第16章	ホンゴル ※ホンゴルの修飾語のなかで用いられている	342頁上段17～18行目
	ホション・オラーン ※ホション・オラーンはホンゴルの息子。ホション・オラーンがトゥムル・プスを切るときに用いている	353頁下段12～13行目
第17章	ホション・オラーン ※ホション・オラーンが敵のスヌンケイを切るときに用いている	376頁下段21～22行目

上の表から剣を用いている勇者の出現頻度を整理すれば、ホンゴルが11例、ジャンガルが6例、サナルが3例、ホション・オラーンが2例あることになる。ここで、ホンゴルとホション・オラーンは父子関係にあり、ホション・オラーンの用いている剣が明らかにホンゴルから譲られたものであることを考慮に入れるなら、ホション・オラーンの例はホンゴルの事例に入れてよいものと思われる。また、表中にも書き込んだように、サナルの3例において、この剣はホンゴルが与えていることが明示されているので、これもホンゴルの事例に入れてよいであろう。そうすると、ホンゴルの事例が計16事例ということになる。

例外は、第6章で出現するアリヤー・モンフライという敵が「12突起付きの陰陽の黄縞剣」を用いている事例である。これは、語りの行為における「語り間違え」によ

るものか、もしくは物語的意義が課せられたものかは現段階では判断できない。ここで重要なこととして指摘しておくべきことは、この剣に関わる勇者が同一の章において混乱しているということが、この事例以外は全くみられないということである。すなわち、ジャングルに関わっている事例は、第9章、第10章、第11章にのみ出現しており、この3つの章においてはホンゴルに関わる事例は出現しない。反対に、ジャングルに関わっている事例以外は、ひとつの例外以外すべてホンゴルに関わっていることが観察されるのである。このように、語りの秩序というものが確かに存在していることが理解される。つまり、ホンゴル系とジャングル系の2種があるということであり、これについては伝承筋の問題を考察する必要があるかもしれない。

本論に引きつけた場合に問題になってくるのは、「12勇者」以外に頻出する「12突起付きの陰陽の黄縞剣」がアルタン・チェージに関わらないで、ホンゴルかジャングルに関わるということである。つまり、「13」の表現についての考察結果をみれば、「13」の付された表現はすべてホンゴルに関わっていることが限りなく示唆されたので、「12突起付きの陰陽の黄縞剣」の場合、アルタン・チェージに関わるべきことが期待されることになるのに、実際にはそうはなっていないのである。この場合、とくに問題になるのは、「12」という数字がホンゴルに関連することになると、ホンゴルに関連する「13」との差異がなくなってしまうことにある。

しかし、ここで想起すべきことは、最も頻度数の多い「12突起付きの陰陽の黄縞剣」が常に敵を討つための道具であるということである。このことから、「12」の用例は、「13」の場合とは異なっている方がむしろ合理的であるという視点もたらされる。少なくとも、「12勇者」がアルタン・チェージであって、「12突起付きの陰陽の黄縞剣」を用いる勇者がホンゴルであるということは、「13」で標識づけられているホンゴルが「12」で標識づけられているアルタン・チェージよりも上位にあることと合致することになるのである。この場合、ホンゴル以外でジャングルが「12突起付きの陰陽の黄縞剣」を用いていることは、ジャングルの地位を考えれば不思議なことではない。とはいえ、ジャングル系とホンゴル系は共存していないことを考えると、これについては今後考察する必要があるだろう。

● arban qoyar jil (12年) と arban qoyar sara (12ヶ月) の場合

この2つの表現は、第5章のハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウの章にすべて出現している。ハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウは、ジャングルの敵として登場し、この章はジャングル側からみると、この人物を征伐する内容となってい

る。そして、これらの表現は常にこの人物が騎乗する馬に関する修飾句のなかに現われている。具体的な表現は次のようになっている。

表 34 「12年」と「12ヶ月」の用いられる箇所

章	表現	当該箇所
5章	arban qoyar jil-dü (12年に) ayta külüg-ün sinji-ber güyüdeg (去勢駿馬の徴で駆ける) ayangya-yin sumun-du (稲妻の矢に) güyičegdel-ügei-ber güyüdeg (追いつかれないまま駆ける)	77頁上段20～24行目
	arban qoyar jil-eče üleküle-ben (12年を過ぎると) ayungya-yin sumun-du (稲妻の矢に) güyičegdel-ügei-ber güyüdeg (追いつかれないまま駆ける)	78頁上段11～14行目
	ayta külüg-ün sinji-ber (去勢駿馬の徴で) arban qoyar sara-du güyüdeg (12ヶ月駆ける) tegün-eče-ben üleküle-ben (それよりも過ぎると) ayangya-yin sumun-du (稲妻の矢に) güyüdeg (駆ける)	79頁上段27～下段4行目

「12年」と「12ヶ月」という2つの形があるが、前後の語句が近似しているので、どちらかの語が定型であることが推測される。これらの事例は第5章のみに出現しており、この章においてはarban qoyar isitei bilig-ün sira čoqor ildü (12突起付きの陰陽の黄縞剣) やarban qoyar alda bilig-ün sira čoqor ildü (12尋の陰陽の黄縞剣) はみられない。このことが第5章の伝承筋が他と異なることを暗示しているかどうかを知るためには、「12突起付きの陰陽の黄縞剣」もしくは「12尋の陰陽の黄縞剣」や、「12年」もしくは「12ヶ月」のどちらの事例も現われない2章、12章、15章の意味を理解しなければならない。しかし、これを検討するためには、少なくとも本論とは別の角度からのアプローチが必要であろう。

「12年」と「12ヶ月」の「12」は、ハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウの馬に付されているので、この扱いをどうするかという問題がある。すなわち、馬自体を独立した存在として別カテゴリーとして扱うか、あるいは、勇者の附属物として勇者のカテゴリーに入れて扱うかという2通りの視点が採りうる。モンゴル英雄叙事詩においては馬は女性の、とくに非正妻の隠喩として読み込むと物語がよりよく理解されるものとなることがあることを考えると(藤井 2001: 290-296)、独立したカテゴリーのなかで扱うことになる。しかし、『ジャングル』の場合、全体的に馬の役割が後退していることが観察されるので、隠喩ではなく動物として扱い、勇者の附属物として

解釈するという視点も十分に採りうる⁶²⁾。

馬を勇者のカテゴリーに入れる場合、「12」をジャンガルの敵であるハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウに関連づけることになる。だが、ここでは逆に、馬を隠喩として読み込んだ場合、そうしなかった場合とどのように違うかということが明らかではない。

本論の勇者論に引きつけて馬を勇者のカテゴリーに入れる場合、指摘すべきことと思われるのは、この敵は最終的にジャンガルに槍で突き刺さされて抹殺させられており、この人物に致命傷を負わせているのがアルタン・チェージだということである。アルタン・チェージが「12」で標識づけられることを考えると、敵のハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウが「12」で表され、かつアルタン・チェージに致命傷を負わせられるということは意味をもつことになる。「13」で標識づけられると考えられるホンゴルはハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウを霧に迷わせるなどして戦いに貢献しているとはいえ、部分的な役割しか果たしていないことが観察される。アルタン・チェージが敵に致命傷を負わせるのは、17章本でジャンガルに服属する第3章でジャンガルに致命傷を負わせる以外にみられないことを考えると、この章でアルタン・チェージが同じ「12」の隠喩をもつハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウに致命傷を負わせることは重要な意味をもつことを推測させる。

この場合、次の2通りの解釈が可能であるように思われる。ひとつは、アルタン・チェージとハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウが「12」の隠喩をめぐって競合するために戦っているという解釈である。もうひとつは、アルタン・チェージとハーン・フブーン・ハンガルタイ・ウズウを同一人物とする解釈である。後者は、「13」の隠喩にはホンゴルとグゼーン・ゲンベの両方があるが、両者が同一の章で競合することがないということを参照にすれば、採りうる解釈である。また、モンゴル英雄叙事詩には表層的に名前が異なっても隠喩で同一視させて自滅的に抹殺させる方法が採られることがあるので（藤井 2001: 19-47）、これを参照にしても大いにありうる解釈としなければならない。

それゆえ、この路線でさらに議論を進める場合、次のようになる。「13」は第9章以外においては「ホンゴル」の隠喩になっているので、この章においてホンゴルを「13」とすると、ホンゴルはアルタン・チェージを殺害することに直接的に関わっていないが、間接的には関わっているということになる。ここでアルタン・チェージを「12」とし、ホンゴルを「13」とする隠喩の配置には、表向き語られている左右の座席における上下関係の逆転が意図されていることを想起すると、ホンゴルがアルタ

ン・チェージの殺害に消極的にしか関わっていないことは符合する。なぜなら、この隠喩の配置は「敵対」を表すのではなく、「味方における上下関係」を表しているからである。

だが、この問題を論じるためには、馬を馬自身のカテゴリーに入れる場合には解釈が妥当ではないことが示される必要があるので、これについてはさらなる議論が要されることになる。

13 「12」と「13」の隠喩の配置が示す隠喩

以上、口頭伝承の動態性をかながみ、2例以上ある「13」と「12」に関連する表現をすべて検討した。結論として述べるなら、「13」は「シャル・グルグの章」以外はホンゴルを指示する固有名詞として用いられている可能性が高いといえる。敵の勇者を指示する際に「13」が付されている場合には議論の余地があるものの、ホンゴルとして解釈する可能性が大きいということが明かにされた。一方、「シャル・グルグの章」においては、「13」はグゼーン・ゲンベの固有名詞となっている可能性が高い。この結論が得られた段階で重要なことは、次のことである。すなわち、前述の「12」と呼ばれる集団には「アルタン・チェージを念頭に置く集団」と「アルタン・チェージを念頭に置かない集団」という2つの集団があると述べたが、ホンゴルかグゼーン・ゲンベが「13」で示されるということによって、この後者の可能性が限りなく消えることである。つまり、「12」がアルタン・チェージと密接に関わっている可能性が高まるということである。

ここで考えるべきことは、通常は数詞として受け取られる「12」や「13」がある特定の勇者を表すための固有名詞として用いられるということが真に意味することである。「12」や「13」が数詞ではなく固有名詞であるとしても、明確な名前をもつアルタン・チェージやホンゴルやグゼーン・ゲンベといった勇者の代わりに用いられるということは、「12」と「13」を固有名詞というよりも、むしろ固有名詞を隠蔽するために用いられた勇者の隠喩であるとみなすのが妥当であろう。

そして、「13」という隠喩で表される勇者はホンゴルかグゼーン・ゲンベのどちらかであって、両者が同一の章で競合することはみられない。この背景には、伝承筋の違い、最もありえそうなことは、トルグート系の伝承かドルベット系の伝承かという違いがあるものと推測される。いずれにせよ、アルタン・チェージを「12」、ホンゴルやグゼーン・ゲンベを「13」とそれぞれ表すということには、アルタン・チェージよ

りもホンゴルやグゼーン・グンベを上位に置かせようとする意図が認められる。

「12」や「13」といった隠喩がわざわざ創られた背景には、「12」と「13」という2つの隠喩の配置が示すさらなる隠喩が関係しているものと考えられる。この2つの隠喩の配置が示すさらなる隠喩とは、ホンゴルやグゼーン・グンベが通常彼らよりも上位に置かれて認識されているアルタン・チェージよりも上位に置かれるということである。そうすると、隠喩の問題は「秩序の転倒」の問題と密接に関わっているということになる。重要なことは、「12」の用いられ方だけから「12」という固有名詞の真の隠喩性を導き出すことができず、それと対比される別の数字、この場合「13」という近接する数字との関係性によって浮き彫りにすることができるということである。

これと同時に、この2つの数字の上下関係とそれに対応する勇者の上下関係が表層で語られている勇者の上下関係と反対になっている配置から、表向きホンゴルやグゼーン・グンベがアルタン・チェージよりも地位的に上であるのはタブーだと理解されていること、そしてこのタブーが聴き手（読み手）における受容の問題と関係しているらしいことが推測されてくる。この受容の問題は、当該社会のなかにおいてなぜこの英雄叙事詩が形成されたのかという根本的問題と密接に関わっているものと予想される。

14 フォーミュラ・モデルと心性史—結びにかえて

一般に、口頭伝承における動態性について、M. パリやA. ロードが提唱したフォーミュラ・モデルは、「決まり文句」を多用する口頭伝承のメカニズムを示したものと考えられている。モンゴル英雄叙事詩が「決まり文句」の観点から眺められるとき、長短に関係しない頻出表現というものを想定している場合が多いように思われる。そしてこの場合、頻出表現としては、ひとつのヴァージョンに頻出するものと、多くのヴァージョンに頻出するものという2種類が認められる。だが、フォーミュラ・モデルは単なる「決まり文句」研究ではなく、あくまでもある特定の韻律的環境のもとにおける表現を意味しており、さらにこれは1行の音節数が決まっていることを前提としている。モンゴル英雄叙事詩の場合、1行の音節数が定まっておらず、また明確に区切られる一定の旋律ももっていないので、こうしたフォーミュラ・モデルをすぐに適用することはできない（藤井 2001: 195-278）。

フォーミュラ・モデルは口頭伝承の語りの産出メカニズムを解明しようとする目論みから提起されたものであり、A. ロードがM. パリよりも推し進めたのは、このメ

カニズムの解明が、いかに「新たな句」を生み出す原動力になるかという方向であった。すなわち、既知のものよりも未知のものを創出する方法論的側面が重要視されていたといえる。このことは、口頭伝承が動態性をもつことと抱き合わせにされて、口頭伝承の創作性という側面をアピールすることになった。やや残念なことに思われるのは、このフォーミュラ・モデル研究が強烈なインパクトを与えたために、口頭伝承で語られる言葉があたかも定型的表現の臨機応変な組み合わせ——その本質的に意味しているところは口頭伝承における言葉のほぼ完全に近い自由自在性——であるかのような偏った印象を作り出すことになったことである。

本論との関連で指摘すべきことは、口頭伝承の創作性を理論化しようとしたA. ロードが、創作的側面だけでなく、モンゴル英雄叙事詩にみられるような語句の固定性にも留意していたことである（もっともA. ロード自身はモンゴル英雄叙事詩を全く想定していなかった）。強調しておくべきことと思われるのは、この語句の固定性が周縁的な問題としてではなく、A. ロードのフォーミュラ・モデル論の中心的議論において形を変えながら常に扱われていたことである。ロードが次のように語っていることは、このことの端的な表明であると受け取れる。

語り手たちはそのような連を『装飾』というように言い、事実、主人公や馬などひとつの歌を装飾する自分たちの手腕を自慢するが、このような表現には強い儀礼的香りがある。それらは無差別には用いられていないように見受けられる。(Lord 1971: 88)

こうした点を確認したうえで、口頭伝承の動態性という場合、次のような2つの意を想定すべきように思われる。ひとつは、創作性の観点から伝承者が作り変えていく面である。もうひとつは、もともと固定化されていたものが忘却されていくプロセスのなかで語句や内容が変化するという面である。ただし、両者は理論的にも現象的にも共存しうる。近年記録されているモンゴル英雄叙事詩の場合、口頭伝承の動態性としては、後者の性質のものであると考えられる。このことは、筆者がこれまでのフィールド調査で出会った伝承者やインフォーマントたちの発言が明かしている。彼らの言にもとづけば、彼らは伝承を自分たち自身で創作するものとは考えておらず、実際に伝承されたものが以前の伝承者の語りを忠実に再現してはなくても、当該伝承者の語りをそのままの形で伝承できると信じている。彼らが叙事詩の語り手になるような人間の素質として必ず第1に「記憶力」を挙げることは、このことを物語っている（藤井 2001: 265）。

したがって、このような見方からすれば、口頭伝承における動態性は、記憶力の低

下により生じる不慮の事態ということになる。これに関連づけて指摘すべきことは、伝承者が英雄叙事詩を歴史とみなしているということである。実際のところ、『ジャンガル』の伝承の場合、伝承者たちは叙事詩をモンゴルの歴史を語ったものとして理解してきた。つまり、伝承はたとえ現在に語られているものであっても、伝承の内容は過去の出来事に関わるものであると理解されてきたのである。彼らはそれがどのような歴史を語ったものであるかを説明することはできないが、おそらくそれも関係してであろう、伝承者たちの多くはこうした過去の出来事を勝手に変えることに抵抗感をもっている。

ただし、ジャンガル英雄叙事詩の表層だけをみる限り、ジャンガル英雄叙事詩には現実に存在あるいは生起したという意味での歴史的人物や事件についての直接的な言及、あるいはその表象を認めることはできない。ここでいう歴史とは、実際に生起した出来事ではなく、こうした出来事を経験した彼らが心のなかで新たに創作した過去の出来事であるという意味で、「心性史」とでも名づける歴史だといえる。こうした心性史の一端は、すでに『アルタイ・ハイラハ』という英雄叙事詩をもとに、内在論的視点と外在論的視点とを接合させることにより、詳細に論じたことがある（藤井2001: 1-193）。

本論は心性史を解明するための第一歩として、内在論的な観点から「12勇者」の「12」という数詞を考察したことになる。考察の結果、この「12」は、動態性を宿命とする口頭伝承にあっても決して偶然には用いられておらず、ある特定の人物、すなわちアルタン・チェージを暗示していることが明らかになった。そして、「12」という隠喩で表されなければならなかった理由は、「13」で表されるもう一人の人物、すなわちホンゴルカグゼーン・ゲンベとの対比に起因するものであると考えられた。つまり、「12」で表されるアルタン・チェージは「13」で表されるホンゴルカグゼーン・ゲンベよりも下位にあるということが示されており、物語の表層における上下関係が逆転されているのである。通常、左右の座席のうち左より右の座席が上位とされていることを考えると、隠喩の秩序は、物語の表層や現実の生活世界における秩序を逆転させた形で構成されていることになる。

ただし、モンゴルで右を左よりも優位にみる見方を仏教の浸透と関連づけるとすれば、この結論がいえるためには、『ジャンガル』の成立年代が仏教浸透後のことであるとみなしなければならない。つまり、ジャンガルの成立年代が仏教浸透以前であるとするならば、こうしたホンゴルカグゼーン・ゲンベが「13」で表されたり、アルタン・チェージが「12」で表されたりすることはあっても、こうした前者の後者に対する優

位性は全く存在しないことになる。

以上をまとめるならば、次のようになる。すなわち、左右の座席のどちらを優位に置くかという点を仏教的影響と関連づける観点からいうならば、本論の結論は『ジャンガル』の成立年代が仏教浸透後か前かによって大きく異なるものとなる。すなわち、『ジャンガル』が仏教の浸透以前に成立したとするならば、数字の配置からみる隠喩の秩序は物語の表層や現実の生活世界における秩序をそのまま反映した形で構成されていることになり、逆に、仏教浸透後に成立したとするならば、数字の配置からみる隠喩の秩序は物語の表層や現実の生活世界における秩序を反転させた形で構成されていることになる。

可能性としてはこうした2つが考えられるのであるが、より可能性があるのは、後者であろうと考えられる。なぜなら、前者の場合、「12」と「13」の数字で表される勇者の座席が現実の秩序をそのまま反映しているとするならば、なぜそもそもそうした数字で勇者がこのように迂回して表されなければならなかったかを説明することが難しいからである。この点、後者であれば、説明可能である。

いずれにせよ、この結論は内在論的視点と外在論的視点とのまさに交差点に現われる結論である以上、今後の心性史研究への導入の役割を果たすことになるであろう。

注

- 1) この地域に関しては『世界民族問題事典』の解説を参照（田中1995: 324-325）。
- 2) たとえば後述する新疆の15章本の序にも記されているように、オイラト（西モンゴル）英雄叙事詩には馬を捕獲して鞍をつける描写、勇者が鎖帷子を着る描写、旅の描写、戦闘の描写等に共通性が多くみられ、伝承者がジャンガルとして語ったものの中には『ジャンガル』ではないものも含まれていることが指摘されている箇所を参照（Buyankisig・Badma 1982a: 8）。
- 3) 1857年にアイルドマンがこれをロシア語からドイツ語に翻訳している。
- 4) A. M. ポズドネーフは大学におけるカルムイク語の教材として用いた。
- 5) これは1960年に再版されている。
- 6) エーリヤン・オヴランの第11章目がカルムイクジャンガル25章本で章の数に入れられなかったのは、この章が未完であったためであろうか。
- 7) 1940年にはカルムイクにおいてジャンガルの500年記念の式典が開催されたが、新たに記録されたのは、この時期に『ジャンガル』を民間から探す努力がなされたためである（Михайлов 1978: 8）。
- 8) この写本はロシア語翻訳およびI. I. ポポフ氏によるノートと一緒に保管されていた。
- 9) トド文字写本については解読されない文字も残っているため、それらについては写本と対校すべきことが記されている。
- 10) 辺垣は1930年代に新疆の軍閥であった盛世才によって入獄させられた人物で、獄中で満金と知り合い『ジャンガル』を聴いた。なおこの書は1958年に再販されている（辺垣1958）。

- 11) この1960年のトド文字版を筆者は未見である。
- 12) 訪問先は新疆ジャンガル15章本の序によると、伊犁州のモンゴル・フレー、テクス（特克斯）、ニルハ（尼勒克）等の县、博尔塔拉蒙古自治州のアラシャン（温泉）、ボルタラ（博尔塔拉）、ジン（精）等の县、巴音郭楞蒙古自治州のホシューン（和硕）、ホージン（和静）等の县、昌吉回族自治州のジムサル（吉木萨尔）等の县である。またボヤンヒシグ氏が新疆に赴く前に内蒙古大学のチョイジョンジャブ氏が新疆でジャンガルの録音をおこなっており、そこで録音した10本のテープをボヤンヒシグ氏に寄贈したということである（Buyankisig・Badma 1982a: 2-3）。
- 13) 刊行本の序によると、『ジャンガル』は内蒙古社会科学院図書館や内蒙古语言文学研究所以外に、内蒙古民族古籍办、新疆少数民族古籍办、中国<江格尔>研究会、新疆民間文芸協会にも保管されているというが、実際あとどれくらいの手書き写本が存在しているのかは現在のところ不明である。
- 14) 13巻目はなぜか「1」という番号が付されている。
- 15) ただし、トド文字版の第3巻は発行されていないらしい。
- 16) このことはとくに翻訳本に顕著に現われており、そこにおいては常に人数としてこの数字が解されていることを観察することができる。
- 17) さしあたりイギリスの『アーサー王物語』における円卓の騎士のような存在と当面は理解しておいてもらってよい。
- 18) 後述のカルムイクジャンガル25章本においては、エーリヤン・オヴランの語った序の2つのヴァリエントが載せられているいるが、勇者の席次については同様である。ここでは第1のヴァリエントから引用した。
- 19) <ハル・キナスの章>はカルムイクジャンガル25章本の第4話、<シャル・グルグの章>はカルムイクジャンガル25章本の第3話にそれぞれ対応している。この2つの章については本論の後続部で言及することになる。
- 20) テキストから具体的に示せば、アルタン・チェージの場合、「右側の、3千勇者を、リードして座った勇者はbarun bijān, yurv'n miñyēn baatriini, aq'lzi suugs'n baat'rmi(I/227頁)」であり、グンベンの場合「左側をリードして座っているという zūūn bijān aqlad suud'g ginā」と叙述されている (I/231頁)。
- 21) ただし、エーリヤン・オヴランが語ったとされる第11章をここでは除外していることを断っておく。カルムイクジャンガル25章本では、エーリヤン・オヴランのもうひとつの章として第11話が未完のまま収録されており、この追加の章にはやや異なる形で左右に座した勇者の名前が挙げられていることが観察される。すなわち、右側にアルタン・チェージ、ブフ・ムンゲン・シグシルゲ、クンド・ガルトー・サワル、通訳ヘー・ジルゲン、ブフ・チャガーン、左側にアルスランギーン・アルク・オラーン・ホンゴル、グゼーン・グンベ、ドクシン・ハル・サナル、ミンヤン、トグチ・ドクシン・シオンホル・メルゲンと、11人に言及されている (II/345頁)。だが、これは単に列挙されただけであり、席次の叙述とは認めがたいように思われる。この章についての残された写本では、こうした表現はなく、右側の第1にダラー・アルタン・チェージ、第2にオドウルダグチ・オラーン・ホンゴル、左側の第1にはグンプ、第2には明示されないながらもサワルが座ったとあり、4人にしか触れられていないことが観察される（Биткеев・Овалов 1990: 162-165）。したがって、未完な語りではない点で写本を重視すると、エーリヤン・オヴランのほかの章と、左側の第3のサナルについて言及されていないだけで、全く同一であることが観察される。
- 22) ただし、カルムイクジャンガル25章本の第24話と第25話は例外である。第24話ではアルタン・チェージは左の第1席に、第25話では左の第2席に配当されている。これについては後述する。
- 23) ただし17章本のドクシン・タヒル・アルダル・アララン doysin takil aldal arayan の aldal の代わりに altan となっている（塔壘 1999: 29）。
- 24) 369頁の後記によれば、1980年12月20日にT. バドマ氏が録音し文字におこしたとある。
- 25) この場合、重複があったとしても登場人物をすべて別人として数えている。
- 26) これは両者がともにホボクサイル出身者であることを考えると興味深い事実である。
- 27) ミハイロフ氏によると、これはV.L.コトヴィッチが1958年モスクワ市で刊行された『ジャンガル』の序において、章の数は勇者の数と一致していると述べたことに起因している（Михайлов 1978: 12）。

- 28) これについては先に引用したボルマンシノフ氏もミハイロフ氏のこの指摘を引用している。なおボルマンシノフ氏もまた“12勇者”を「12人の勇者」と解していることが観察される。
- 29) もっともコージンにしても、『ジャンガル』の語りではそのようなことは全く述べられていないだけでなく、そのようなオイラト云々のようなものは全く存在しなかったのごとく扱っていると述べている。
- 30) また氏はジャンガルについても「普通の勇者」であるという斬新な見方をさりげなく提示している。
- 31) ただし、モンゴル語をカタカナ表記にする場合、本論の表記の仕方と若干異なるものがあることを断っておく。
- 32) トダエヴァの付録事典にもクルーガーの辞書にも記載のない語であるが、モンゴル人のインフォーマントによると、多くのものがひしめき合っている状態を指す語という。ここでは「我も我もと身を乗り出して」と意識した。
- 33) üzeの語義不明。語り間違えか。
- 34) 直訳すると「命の赤い大動脈を結んだ」となる。胸部を刀で切り開いて心臓に近い大動脈をひねるようにつまんで即死させるモンゴルに独特の家畜の屠殺方法に関連する表現である。
- 35) 圧倒的頻度からみて、この「8万」は「8千」の言い間違えと考えられる。
- 36) 原文2回目のbeye niは言い直しと考えられる。
- 37) 「アルワン・ゴルワン・ソヨート」は直訳すると「13牙付き」となる。
- 38) 「アルワン・ゴルワン・トルゴイト」は直訳すると「13頭付き」となる。
- 39) このテキストでは「アトハル」と「アトガル」の2つの表現がなされている。
- 40) クルーガーの辞書ではdoldoiで「小山・塚」とある (Kruger 1984b: 562)。
- 41) クルーガーの辞書にもトダエヴァの付録辞書にもnayarの項目はない。
- 42) トダエヴァの付録辞書「聴く、耳をすます」とある (Тодаева 1976: 481)。
- 43) クルーガーの辞書ではburcaqで「破片、少量」とあるが (Kruger 1984a: 372)、信頼できるあるモンゴル人のインフォーマントによると、「豆」の意。この場合、後者の意味が文脈に合う。
- 44) 「若い若い」の部分はおそらく言い間違えであろう。
- 45) この行の意味は不明。
- 46) 全体の文脈においてここにおけるbisingkiの意味は不明。
- 47) ここでaltan čegeji babai abayaという表現は重要である。なぜなら、babaiが年長者に対する一種の尊称と考えられるからであり、これとは別にabayaが付加されているからである。
- 48) このような親族呼称の用法は現実の生活世界においても認められる。
- 49) 邦訳では第4歌「紅顔ホングルのマンナ・ハーンに対する勝利と後者のジャンガルへの服属」(若松 1995: 99-124)を参照。
- 50) 残念ながら筆者は1988年と1989年に内蒙古少数民族古籍編委会・内蒙古社会科学院文学研究所合編、内蒙古人民出版社より刊行された2巻本の漢訳本を未見である。なお、ジャンガルの最初の漢訳本である1983年に北京の人民文学出版社より刊行された『江格尔—蒙古族民間史詩』においては、当該部分を原文に忠実に訳しており、校訂を加えていない(色道尔 1983: 182-183)。とはいえ、ここでは原文に3度出現する「11ポドン(猪)」の最初の事例のみを忠実に写しており、他の2つは意識によってうまくこの問題を回避していることが観察される。なお、『ジャンガル』の表記は、漢訳本においては『江格尔』あるいは『江格爾』というように写される。
- 51) ジャンガルの最初の漢訳本である1983年に北京の人民文学出版社より刊行された『江格尔—蒙古族民間史詩』においては、当該部分を「12名勇士が一齊に参加し、ジャンガルを加えて13の好漢が」マグナイ王を圧倒した、と訳出しており(色道尔 1983: 192-193)、邦訳ジャンガルの注釈(九)と同様の見解を採っていることになる(若松 1995: 113)。
- 52) この事例は単純な“12勇者”表現ではないが、“12勇者”の問題として論じてとくに支障はないものと思われる。
- 53) 原文は、küctä baat' r al' a moñqla, arsl' n bod' ñgudÿyn, arviini alqad, taviini tašad, barun bijiini aq' lzi suus' n, baj' n küñkiin alt' n čeežiin daru suuv' とある。
- 54) “12勇者”の事例に数えられそうな事例がひとつあるが、ここではそれを数えていない。

- それは、ホンゴルの救出に向かったジャンガルたちが馬を競走させながら出陣する描写において、「12勇者の馬たちが、列をなして出て行った」とある箇所である（1/198頁）。ここでは馬に言及した部分であるために除外した。
- 55) この表現にはもしかするとホンゴルも含まれていない可能性がある。なぜなら、この表現の後に、「自分よりも凄いいホンゴルとともに」という表現がなされているからである。
- 56) 原文は、ald'r bogd' zañy'r arv'n qojur'n, bökë möngën sigšergëtäyän, ar'g ulan qoñy'riin, ard' üldëdëg kövütäyän bolad däaldëvë. とある。
- 57) 行の数え方や行という概念については問題がないわけではないが、ここでは目安として記述したことを断っておく。行の概念については『アルタイ・ハイラハ』という英雄叙事詩をもとに論じたことがあるので、詳細はそちらに譲る（藤井 2001: 195-278）。なおここでの行数については邦訳ジャンガルに拠った。
- 58) 12例中1例はジャンガルたちの息子の勇者たちについての言及で用いられている（塔壘 1999: 34）。
- 59) これはソシユール言語学における基本問題にもなる事例である。「12」の価値を知るためには隣接する数字との関係を知らなければならない。
- 60) モンゴル英雄叙事詩にこうした内在論が必要とされる理由は、英雄叙事詩が現実の生活世界との関わりつつも、それとは一線を画する自立性をもっていると考えられるからである。これについては、英雄叙事詩の語りに厳格な作法が要されるアルタイ・ウリヤンハイ族の、英雄叙事詩を語る序として必ず語る「アルタイ讃歌」と英雄叙事詩のとの関係を論じた拙論「アルタイ讃歌研究——モンゴル英雄叙事詩の語り手からの聞き取りを中心に」で詳細に論じたことがある（藤井 2002a: 281-312）。
- 61) ここで用いる共時的様態とはソシユール言語学でいうところの概念である。
- 62) 馬の隠喩の問題については、拙論「モンゴル英雄叙事詩における“隠喩の馬”と“動物の馬”」を参照（藤井 2002b: 243-283）。

文 献（原典資料）

〔特殊キリル文字による転写テキスト〕

Джангар

1978a *Джангар Калмыцкий Героический Эпос /тексты 25 песен/*, Том I, Калмыцкий научно исследовательский институт языка, литературы и истории при Совете Министров Калмыцкой АССР. Москва: Издательство Наука СССР.

1978b *Джангар Калмыцкий Героический Эпос /тексты 25 песен/*, Том II, Калмыцкий научно исследовательский институт языка, литературы и истории при Совете Министров Калмыцкой АССР. Москва: Издательство Наука СССР.

〔カルムイク新文字によるテキスト〕（ただし丸括弧内はカルムイク新文字による表記）

Биткеев-Кидиш-Покровская-Кудияров-Пюрбеев (ред)

1990 *Джангар Калмыцкий Героический Эпос (Халымгбаатрлг Эпос)*, Главная Редакция Восточной Литературы. Москва: Издательство Наука СССР.

Биткеев-Овалов (ред)

1990 *Джангар (ЖаңһР) Калмыцкий Героический Эпос*, Том 2, Тексты 16 песен (Халымг Баатрлг эпос, 2 Боть 16 дууна текст). Элиста: Калмыцкий Книжное Издательство (Элст: Халмг Дэгтр һарһач).

〔トド文字によるテキスト〕（丸括弧内はトド文字のラテン文字転写表記）

托. 巴玛德, 宝音克希格等搜集整理 (Badma·Buyankišig)

1979 『江格尔传 (Jangyar)』 乌鲁木齐: 新疆人民出版社。

藤井 英雄叙事詩『ジャングル』における“12勇者”

中国民間文学芸術研究会新疆分会整理

1985 『江格尔(一)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

1987 『江格尔(二)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

中国民間文学芸術研究会・新疆维吾尔自治区分会整理

1985a 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (一)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

1985b 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (二)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

1985c 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (三)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

1985d 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (四)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

1985e 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (五)』 烏魯木齊：新疆人民出版社。

中国芸術家協会新疆分会・新疆维吾尔自治区民族古籍办公室合編

n.d.a 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (六)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

n.d.b 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (七)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

n.d.c 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (八)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

n.d.d 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (九)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

1993 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (十)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

1996a 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (十一)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

1996b 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (十二)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

1996c 『江格尔資料 (Byangyar-yin eke materiya) (一?)』 烏魯木齊：中国民間文学出版社。

索德那木拉布担・巴图編

1996 『江格尔手抄本 (Byangyar-yin yar biçimel sudur-muud)』 赤峰市：内蒙古科学技术出版社。

[ウイグル式蒙古文字によるテキスト]

Damdingsürüng, Ć.

1958 Ёngyar, 沈陽：内蒙古人民出版社。

Buyankišig・Badma

1982a Ёngyar (上), 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

1982b Ёngyar (下), 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

内蒙古少数民族古籍編・内蒙古社会科学院文学研究所編

1988 Ёngyar (一), 格日勒图・那木吉拉転写注釈, 索特那木拉布担审訂, 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

1989 Ёngyar (二), 格日勒图転写注釈, 索特那木拉布担审訂, 呼和浩特：内蒙古人民出版社。

内蒙古古籍整理办公室・新疆民間文学芸術家協会編

1996 Ёngyar (三), 格日勒图転写注釈, 索特那木拉布担审訂, 赤峰市：内蒙古科学技术出版社。

塔亜, D.

1999 『アリンピルの「ジャングル」——新疆オイラト・モンゴルの英雄叙事詩』 塔亜, D. 採録・解説, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座・千葉大学ユーラシア言語文化論集別冊第1号。

[モンゴル国の新文字によるテキスト]

Загдсүрэн, У.

1968 *Жангарын Тууль, Аман Зохиол Судлал, Tomus VI, Studia Folclorica Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici.* Улаанбаатар: Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэл.

1977 *Аян Алдарт Аялган Хонгор* (БНМАУ- саас сурвалжлан бичсэн Жангарын тууль), Аман Зохиол Судлал, Tomus XI, Studia Folclorica Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici. Улаанбаатар: Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэл.

〔漢語テキスト〕

边垣

- 1950 『洪古尔』 边垣編写, 上海: 作家出版社。
 1958 『洪古尔』 中国民間文艺研究会主編 (第二版), 北京: 作家出版社。(1950を参照)

文 献 (著者・論文)

Bergmann, B.

- 1805 *Heldengesang aus der Dschangariade Nomadische Strejerejn unter den Kalmiken in den Jahren 1802*, Bd. 4, Riga.

Bormanshinov, A.

- 1981 The Present State of Research in Janggar Epic Studies. *Fragen der Mongolischen Heldendichtung, Vorträge des 2 Epensymposiums des Sonderforschungsbereichs 12, Bonn 1979*, Teil I, Herausgegeben von Walter Heissig, Asiatische Forschungen, Bd.72: 273-339. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

藤井麻湖

- 2001 『伝承の喪失と構造分析の行方——モンゴル英雄叙事詩の隠された主人公』
 東京: 日本エディタースクール出版部。
 2002a 「アルタイ讃歌研究——モンゴル英雄叙事詩の語り手からの聞き取りを中心に」
 『言語文化学会論集』18: 281-312。
 2002b 「モンゴル英雄叙事詩における“隠喩の馬”と“動物の馬”」『北アジアにおける人と動物のあいだ』東京: 東方書店。

黒勒・丁师浩

- 1993 『江格尔』 汉文全译本第一册, 烏魯木齐: 新疆人民出版社。

Козин, С. А.

- 1940 *Джангариада* (Героическая поэма Калмыцков). Москва-Ленинград: Академии Наука СССР.
 1998 Джангариад, Элиста: АПП “Джангар” 358000. (1940を参照)

Kruger, J. R.

- 1984a Materials for an OIRAT-MONGOLIAN to ENGLISH Citation Dictionary II. Bloomington, Indiana: The Mongolia Society Inc.
 1984b Materials for an OIRAT-MONGOLIAN to ENGLISH Citation Dictionary III. Bloomington, Indiana: The Mongolia Society Inc.

Lord, A. B.

- 1960 *The Singer of Tales* (Harvard Studies in Comparative Literature 24). Third printing (1971). Cambridge: Harvard University Press.

Михайлов, Г.

- 1978 Предисловие, *Джангар*. (*Джангар*を参照)

村上正二

- 1970 『モンゴル秘史1——チンギス・カン物語』東京: 平凡社・東洋文庫。
 1972 『モンゴル秘史2——チンギス・カン物語』東京: 平凡社・東洋文庫。
 1976 『モンゴル秘史3——チンギス・カン物語』東京: 平凡社・東洋文庫。

Qurčabaŷatur · Üjüme

- 1991 *Mongyl-un böge mörgül-ün tayilya takilya-yin suyul* (モンゴル文, 『モンゴルのシャマニズムの祭祀文化』) 北京: 民族出版社。

仁钦道尔吉

- 1999 『中国史詩研究——江格尔伦』呼和浩特: 内蒙古大学出版社。

Sayinjiryal · Šaraldai

- 1983 *Altan ordun-u tayilya* (モンゴル文, 『黄金オルドの祭祀』) 北京: 民族出版社。

藤井 英雄叙事詩『ジャンガル』における“12勇者”

色道尔

1983 『江格尔——蒙古族民間史詩』北京：人民文学出版社。

田中克彦

1995 「カルムイク」梅棹忠夫監修，松原正毅代表・NIRA編『世界民族問題事典』pp. 324-325，東京：平凡社。

Цэрэнсодном, Д.

1987 *Монгол Уран Зохиол XIII-XX Зууны ЭХ* (Их дээд сургуулийн Монгол хэл бичгийн ангид үзэх сурах бичиг), pp. 105-134, Улаанбаатар: БНМАУ-ын Ардын Боловсролын Яамны Сурах бичиг, сэтгүүлийн нэгдсэн редакцын газар.

Тодаева, Б. Х.

1976 *Опыт Лингвистического Исследования Эпоса «ДЖАНГАР»*. Элиста: Калмыцкое книжное издательство.

若松寛

1993 『ゲセル・ハーン物語——モンゴル英雄叙事詩』東京：平凡社・東洋文庫。

1995 『ジャンガル——モンゴル英雄叙事詩2』東京：平凡社・東洋文庫。

楊海英

2001 「モンゴルにおけるアラク・スウルデの祭祀について」『アジア・アフリカ言語文化研究』61: 71-113。

